魔法少女リリカルなのはStrikerS～孤独の歌～

灯火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～孤独の歌～

【Ｎコード】
Ｎ６３４８Ｚ

【作者名】
灯火

【あらすじ】
３０年間の人生に幕を閉じた…はずだったんだけど…
前世とは違う人生、前世とは違う容姿、前世と変わらない境遇、目的もなく、目標もない、そんな空っぽな2度目の人生。
けど…そんな中、出会った少女の笑顔は…なんだか…暖かかった。

第一話「人生３０年？」（前書き）

小説を書くのは初めての上、作者はリリカルなのはをそこまで深く分かってないので、多々至らない点があると思いますが、よろしくお願いします。

第一話「人生３０年？」

仕事の帰り、ふと考えた……

生まれてそろそろ３０年、俺はいったい何をしているんだろうか？

仕事内容以外で誰かと最後にしゃべったのは、いつだっただろうか？

家族……は初めからいなかった、友達……は作らなかったのか作れなかったのか、まぁ存在した覚えはない。

夢……特にない、趣味……特にない、目標……立てたことがない、ただ毎日仕事に行って、帰って、寝る。

毎日毎日それを繰り返すだけ……あれ？なんのために俺、生きてるんだろう？

「人間元来一人で生まれて一人で死んでいくのである」ってのは、誰の言葉だったか？

……うん

……死のう。

でもどうやって死ねばいいんだ？

出来ることなら楽に死にたい、苦しんだりせずに一瞬で……

そんな事を考えながら歩いていると、ふと目の前の横断歩道に少女が見える、信号は……赤い色で、馬鹿みたいなスピードで車が走ってきていた。

意識する前に、体は動いて、少女を車の前から突き飛ばした。

眼前にゆっくりとスローモーションのように迫る車、法定速度って、守る奴いるのかな？

頭に浮かぶのは、今までの人生……あれ？……これ背景違うだけであんま変わんねえぞ？

……まぁでも、このスピードなら痛みを感じる暇もないだろう。

ある意味、よかったのかな？

そんなことを考えながら、俺の人生は幕を閉じた。

……はず……だったんだけど……

第一話「人生３０年？」（後書き）

導入編？
はじめての小説におっかなびっくりで……Ｏｒｚ

第二話「魔法都市？」（前書き）

導入編は４話までの予定です。
出生～転機となる場面までは、できるだけ詳しく書きたいのでご了承ください。

第二話「魔法都市？」

――真っ暗だ。

俺。どうしたんだっけ？

確か……仕事の帰りに死のうと思い立ち、んで幼……女の子をかばって車に……

俺死んだよな？うん、あのスピードの車と衝突したんだし死ぬはうだよね？……ね？

――ここが死後の世界ってやつなのかな？

なんかイメージと違う。

頭を整理しながら、考える……

死のうと思ってすぐ死ねた、しかも痛みを感じる間もなく、これは神様に感謝しないといけないな……俺無神論者だけど……神様ありがとう！！

しかし誤算が一つ、

―死んでも意識がある―

これには正直困った、死んだら意識なんかなく何も感じなくなるんだとばかり思っていたが、意識はしっかりしてるし、なんか生温か

いし、息苦しい……うん？

息苦しい？んなばかな、何で死んでるのに息苦しい？死んでも呼吸ってするのかな？

――しないよな？

予想と違う状態に戸惑う俺、さらに追い打ちをかけるようにいきなり全身が絞め付けられた。

「――！？！？」

痛い、とんでもなく痛い、痛みも感じるのか！

声も出ない！

何かに引っ張られるような感覚、急に辺りが眩しくなった。

「もう少しですよ！頑張って！」

――なにを？

「今頭が出てきましたよ！もう一息です！」

――頭？なんの？

「赤ちゃんも頑張って！もうすぐ出られるからね！」

――赤ちゃん？誰の？

次の瞬間、何かを切られるような感覚と鋭い痛み。

「オギャア～～！？（いてえええええええ！？）」

思わず叫ぶが、え？オギャア？

「おめでとうございます、元気な男の子ですよ！」

――は？

だんだんクリアになる視界、映ったのは粉でも舞ってるような景色と、色とりどりのオーラ？を纏った看護士たち、変な顔の医者。

――病、院？

ちょっと待ってくれ！頭が付いていかない何がどうなってるのかさっぱりわからない。

ショートしそうな頭を抱えようとして気付く、なに……この手？、そこにあったのは、小さな赤ん坊の手、全裸の体……

「オギャア～～～～～！？！？（なんじゃこりゃあああああああ！？！？！）」

――前言を撤回する……神様とか……まじ死ねよ……

そして、自分のことで頭がいっぱいだった俺は、母親であろう人物の複雑な表情に気が付いていなかった……

――新生児室――

あれから、丸一日たった。俺はいまだ整理のつかない頭で状況を確認していた。

?俺は猛スピードの車に轢かれて死んだ……はず
?だけどなぜか生きていて、体は赤ん坊になっている
?転生?
?プレートに書いてある文字が読めない……てか何語?周りの機械も見たことないし……
?なんか眼がチカチカするっていうか、変なオーラが見える
?俺の母親であろう人物は一度も俺を抱いていない（てか顔もろくに見てない?）

まぁ……?はどうでもいいとして、重要なのは?~?だ。

まず、?……認めたくないが、状況的に転生って考えるのが一番しっくりくる。

次に、?……見たこともない文字ってことは、ここは外国?でもしゃべってる言葉は普通に聞き取れる。
となると考えられるのは……別の世界?

最後に、？……これが一番の問題だ、なんかハウスダストのＣＭみたいな、なんて表現したらいいのか、細かい粒みたいなものが空中にたくさん浮いている。でも触ろうとしても触れない……なにこれ？

そしてなんか、看護士もそうだけど周りの赤ん坊もなんか、いろいろな色のオーラ？ってか光の膜みたいなのに包まれてる、てか俺も包まれてる……色は薄緑。

死ぬ前に、こんなものが見えた覚えはないから、過去に戻った。とかではなくまったくの新しい体と考えるのしかない。

よし、まとめよう……つまりは……

俺は人生に絶望して死にました⇒でも神様の気まぐれで前世の記憶を持ったまま転生しました⇒しかもここはどうやら前住んでたとこととは違う世界っぽい⇒しかも変なものが見える目のおまけつきだ♪⇒神様ってやつは……俺が嫌いなようだ⇒もうやだ……この人生……

――それからさらに、４日たった。

ケージの前に誰かいる、誰？この女の人

疑問に思っていると、近くにいた看護士が女性に声をかけた。

「退院ですね、外は暗いので気を付けてくださいね」

「――はい、お世話になりました。」

ああ、こいつ母親か……初めて見たよ顔、変なオーラ？は緑色ね、はいはい一緒一緒。

そのまま俺は、母親？に抱かれて病院を後にする。

――で、現在なんかどっかの建物の前にいる。時刻は深夜。

なんか門にプレートが貼ってあるってことは、何かの施設かな？……読めないけど。

で、この母親？かごに入れた俺を、門の前に置いて泣きながら何か言ってる。

「――だから、ごめんね……ごめんね……貴方が悪いんじゃないのよ、あいつが……悪いの……」

えと……つまりは、どっかの男と子作り⇒捨てられた⇒もう出産拒否できない日数がたっていた⇒でもこの子を見ているとあの男を思い出すから一緒にはいられない⇒全部その男のせいだから、怨むならそいつを恨んで

――知らんがな。

というか、今回の俺は特殊な例として、物心ついてない赤ん坊に何言ったって覚えてないだろう。

じゃあ、何のために？そんなの決まってる自分を正当化するためだ……うぜぇ。

前の世界の母親も……そうだったのかな？生まれたばっかの俺に、自分を慰めるためだけの言い訳を並べて、捨てて行ったのかな？

――何かすげえ腹が立つ。怒鳴り散らしてやりたいが、悲しいかな「オギャア」ぐらいしか言えない身……転生したっていうのに、前と何も変わらない状況……いや、捨てられる様を認識できる分、今のほうが悪いか。

そして戯言を並べ終わった、母親？……いやもうどっかのおばさんは去って行った。

一人残された俺は、これからの事を考えていた。まぁロクな施設じゃないよな……経験上

――こうして、俺の2度目の人生は幕を開けた……けど、もう幕降ろしてぇよ……

第二話「魔法都市？」（後書き）

話が思ったように進まない（；￣Д￣）

２話目で原作キャラの一人も出てこない体たらくＯＲＺ

小説書くのって難しいな；；

次回いよいよ原作キャラも登場して「なのは」らしくなってくる…

…かな？

第三話「出会い？」

――自分を生んだおばさんに、孤児院の前に捨てられて7度目の夏――

ジリリリリ！！

カチ！

枕元の目覚ましが鳴り、目を覚ます。体を起こし辺りを見回す。

お化け屋敷みたいな安アパート、必要最低限の物しかない狭い部屋……ここが、今の俺の住処だった。

俺の引き取られた（捨てられた）孤児院は「エルザード孤児院」という個人経営の孤児院だった。……いや別にダジャレじゃねえよ？

どうやら、この国？「ミッドチルダ」という場所では孤児育成に対し、多額支援金が降りるらしい。孤児の育成に力を入れているのか？それとも孤児が量産されるほど危なっかしい世界なのか？まぁ詳細はよく分からないが、ともあれ孤児を引き取っている施設には支援金が支払われる。

勘のいい人なら気付くだろうが、俺が引き取られた孤児院は、経営者が楽して稼ぎたいがためだけに作られた施設だった。

孤児を拾い、最低限の食事だけ与えて育てる、残ったお金は懐に入れて、成長した子供には家事をさせる。新しい孤児が来れば、その成長した孤児に育てさせる……といった感じだ。

実際俺の育児（世話？）をしてくれたのも１０歳に満たないであろう子供だった。

この世界の常識なんかについても、その子供やほかの子供に教わった。

この「ミッドチルダ」という世界では、魔法が日常的に使われてる世界らしい。

初めて聞いた時は、鼻で笑いそうになったが、残念なことに事実っぽい……ただ、この世界の魔法は俺のイメージしていたそれとは違って、超科学的な物みたいだった。

そして、魔法について知るのと同時に、俺の目についてもようやく分かってきた。どうやら俺の目は、空気中の「魔素」や人の持っている魔力、という物が目視できるようだった。

まぁ見えたからどうというわけでもなく、４歳になってようやく自分の意思で切り替えられるようになるまでは、目がチカチカしてしょうがなかった。

そういった感じに、この世界について知るにはこそこそ役に立った……精神的にはもう立ち直れないかもしれない……意識がある状態で赤ん坊とか……マジ拷問……

しかしそんな孤児院も、５歳になったころに金だけ盗んで逃げだし

た。

正直、気持ちが悪かった……他人を利用することしか考えてない経営者、影で不平不満を言うだけでなにもせず、空から恵みが降ってくるのを待つだけの餓鬼共。……まぁ逃げ出す時に、「時空管理局？」とかいう軍隊みたいなとこに通報しといたし、まぁなんかあるんじゃね？

逃げ出した後も、この世界については驚かされた。まず仕事、なんか今の俺と同じぐらいの歳……１０歳にもなってないような子供たちが、普通に働いてたりする……どうなってんだ？労働基準

そして、「時空管理局」という軍隊みたいな組織、なんか１０歳ぐらいの女の子が街頭のテレビにエースとして映っていた。

これなら俺も職に就けそう、とか思ったんだけど……この世界にも履歴書はあるみたいだった。子供でも履歴書を持参しないと雇用してくれないらしい……なんでそんなとこだけしっかりしてるんだ？

つまり、こっちの世界での自分の名前すら分からない俺は、もちろん論外、しょうがないので残飯漁って腹を満たし、公園で寝る生活を繰り返した……なんというホームレス。

孤児院から盗んだお金は、まだあったが……いざという時のために取っておいた。

それで、いつ頃だったか……まぁ慣れた手つきでゴミを漁ってる時に、ふと見つけた壊れた機械、見た感じテレビの様な物。

前世では、何を隠そう家電製品の修理の会社に１４年間勤めていた俺（孤児院を出ないといけない年齢が１６歳だったから）もしかして直せるんじゃね？と中を見て見ると、元居た世界と殆ど変わらない構造だった。

これは金になる！って考えた俺は、取っておいたお金で部品や工具類を買って、捨てられている機械を片っ端から集めて回った。

中には構造がさっぱりな物もいくつかあったが、家電製品類は概ね元の世界と同じような感じだった。

その後、俺は直した家電品を安値で販売、と同時に家電類の修理を請け負う小さなお店の様な物を始めた。場所はいつも寝ていた公園で、レジャーシート引いただけの小汚い店だった。

しかし、意外なことにこの世界の人たちは、財布の紐が緩いのか？子供が売ってるのを見て同情する偽善者ばかりなのか知らないが、店はそこそこ繁盛していた。

しかしそうなると、困った問題も出てきて、先に挙げた構造がさっぱりわからない機械類の修理も出来ないか？と聞かれることが多くなってきた。

出来ないっと答えても、大抵は子供なので問題なかったが、それで客足が遠のいては困るので、稼いだお金で本屋へ行き、いろいろな機械類の本を買い勉強した。その甲斐あって、家電品はもちろん、

簡単な構造をしている物なら、魔導師たちが使う「デバイス」という物も修理できるようになってきた。

そうなると今度は、やたらめったら「デバイス」の修理の頼まれることが多くなってきた。簡単なものなら修理は出来たが、複雑な「カートリッジ」などを搭載している物はお手上げだったので、また本を買って商売の合間に勉強した。

おかげで、5歳の頃から2年たった今は、生活するだけなら不自由なく暮らせるぐらいは稼げるようになっていた。

ただ……そんな俺を最近悩ませている奴が……一人

「こんにちわ、今日もお店頑張ってるんだね」

そう言って、店の前にしゃがむ金髪の女性、ロングの金髪を緩く後ろで結んだその子は、１０人に聞けば9人以上は美少女と答えるであろう容姿をしていた。

「……またあなたですか」

俺は感情のこもってない声で答える。

「う～ん、だめだよ?お客さんなんだしもっと愛想良くしないとね」

「……毎日、商品もロクに見ず話だけ振ってくる人お客なんて呼びません」

そう、これが最近の俺の悩みの種だった……この女性、フェルトだったかフェイトだったか？

まぁとにかく、最近毎日来てはくだらない話を振ってくるだけで、なにも買わずに帰っていく。しかも、話す内容は「家族はいないの？」とか「何か困ってない？」とかそんな、どこかの保護官みたいなセリフばっかりだった。

「でも、いつも寂しそうな顔してるよ？私でよければ相談に乗るよ？」

何の見返りも求めず、差し伸べられる優しさはただ単純に気味が悪かった……

「……あなたが、帰ってくれれば元気になりますよ」

感情のこもってない声で返す。

「その……話したくないなら無理にとは言わないけど……でもね、人は一人では生きられないんだから、もし何か辛いことがあったら……私じゃなくてもいいから友達とかにでもいいから、話してみて……ね？」

……？

「……え？……生きていくのに、他人って……必要？」

「――！！？」

ふと、疑問に思ったので聞いてみただけだった。

すると少女は、何か驚いたような目をして固まっていた……俺何か変なこと言ったか？

「ご、ごめん……また、来るね……じゃあ」

そう言って、走り去っていた……別にもう来なくてもいい。

フェイトＳｉｄｅ

「こんにちわ、今日もお店頑張ってるんだね」

私は、いろいろな機械が並べてられているシートの前に座り、その店主である少年に声をかけた。

「……またあなたですか」

返ってきたのは、少しも感情のこもってない声、この子を見つけたのはいつだったろうか……

仕事の帰りに立ち寄った公園で、一人シートの前に座っていた少年、たぶん年齢は私より少しだけ下ぐらい、ボロボロの服を着て、まっ

たく切っていないように見えるボサボサの長い髪、元は銀なのだろうけど汚れて灰色にみえる髪の色、まるで世界から一人切り離されたような寂しげな眼をしていたその子を、ほおっておけなくて声をかけたのが確か最初。

なんだか……なのはに出会う前の自分を思い出してしまいそうな目だった。

それから、少しでも心を開く手伝いになればと思って、仕事の合間にたびたび訪れているけど、心を開くどころか、うっとおしく思われてそうだ。

でも……それでも私と話すことで、少しでも寂しさが紛れているといいんだけど……

そんなことを考えながら、出来るだけ明るい声で返す。

「う～ん、だめだよ？お客さんなんだしもっと愛想良くしないとね」

「……毎日、商品もロクに見ず話だけ振ってくる人お客なんて呼びません」

……痛いとこを突かれた、確かに営業妨害かも……で、でも仕事の途中で寄ることが多くて、何かを買って持っていくわけにもいかないし……それにたぶん何か買ったら、追い返されそう……

「でも、いつも寂しそうな顔してるよ？私でよければ相談に乗るよ？」

少しでも、この子のことが知りたくて、何か話してくれれば何かし

てあげられそうなのに……

「……あなたが、帰ってくれれば元気になりますよ」

うぅ……今の言葉は少し、いや結構堪えた……そ、そんな敵意をストレートに向けられると、けどここで諦めたくなくて……

「その……話したくないなら無理にとは言わないけど……でもね、人は一人では生きられないんだから、もし何か辛いことがあったら……私じゃなくてもいいから友達とかにでもいいから、話してみて……ね？」

そう……これは私がこの数年で学んだこと、一人でいる限り、辛さや寂しさはなくならない……誰かに少しだけ話すだけでも、楽になることだって……いっぱいあるんだよ？

「……え？……生きていくのに、他人って……必要？」

「――！？」

返ってきたのは、いつも通りの感情のない声……向けられた目は、まるで……この世界に何も期待していないような、まるで何十年も経て悟ったかのような、冷たい……とても冷たい目をしていた。

「ご、ごめん……また、来るね……じゃあ」

その場に、居続けることができなかった。あんな目を見たのは初めてだった……

私が……が考えてたよりも……あの子の闇は大きいのかもしれない

……

そう、なんだか……死にたがっているようにすら見えた……

第三話「出会い？」（後書き）

やっと原作キャラの登場で「なのは」らしくなってきたかな？

……まだかＯＲＺ

次が導入編の最終話です、その後舞台はＳｔｒｉｋｅｒＳへと移ります。

第四話「転機？」（前書き）

導入編ラストです、やっと主人公の名前が明かされます。

第四話「転機？」

――望まないまま幕を開けた第二の人生、前世と変わらない一人ぼっちの人生のはずが……

「――って訳で、やっぱり一人のままじゃ出来ないことも多いと思うんだ」

「……その考えは否定しませんし、正しいとも思いますが、俺には関係ないです」

感情なく返した言葉に苦笑いするのは、ここ最近しょっちゅう来る常連の冷やかし……もとい今現在は客の、「フェイト・テスタロッサ・ハラオウン」（執務官試験に向け勉強中）。

……なんで、ファミリーネーム２つあんの？ミドルネームってやつかな？よくわかんね。てか、毎日こんなとこ来て勉強はいいのか？てか試験て筆記とかなのかな？まぁ、興味はないけど。

まぁ、ともあれこのフェイトさん（今は一応年上なので）毎日毎日うちの店？に来ては、保護官みたいな世間話ばかりしている。

「やっぱり、手際がいいね～その歳でそこまでできるなんてすごいよ！」

「……まぁ、これが仕事ですからね」

現在俺は、このフェイトさんのデバイスの清掃メンテをしている。
あまりに毎日来るので、昨日「冷やかしならもうくんな！！」的なことを言ったら、今日来るなり頼まれた。

てか……なんだこのデバイス、インテリジェントデバイスにベルカ式カートリッジシステム、最近急速に進んでる研究ってのは知ってたけど、実物見たのは初めてだ。

繊細なインテリジェントデバイスに、カートリッジシステムは相性が悪く、研究はされているが流通している物は、殆どアームドデバイス形式のはずだ。

しかしこのデバイスは、それを全く感じさせない。しかも、そのカートリッジもミッド式ではなくベルカ式、内部の構造も見たことないような高級パーツがふんだんに使われてて、まさに『一人のために作られた傑作』とでも言える出来だった。

このデバイス設計した奴、どんな頭の構造してんだ……てかこんなの、公園で露店してる子供にメンテ頼むって、どういうことだ。まぁすごい勉強にはなるが……

「あ、そういえばこの間、地球の海鳴市で美味しいケーキ屋さんを見つけてね――」

また来た、地球の話題。いつだったか、話の中で地球という単語が出てきて、つい反射的に反応して、「自分も地球の事をそれなりに知っています」みたいなことを言ってしまってた。

それからというもの、まるで攻め込む隙を見つけた！とでもいうような勢いで、毎日地球の話題を話してくる。地球の友達の事、最近

あった出来事、地球の食べ物、よくまぁ話題が続くもんだと感心する。

しかし、話を聞く限り、どうもこの世界の地球は俺の居た地球とはどこか違うような印象だった。……いちいち話したりはしないけど……

「ねぇ……そろそろさ、えと……名前、教えてくれると……嬉しいんだけど……」

名前？そういえば考えてなかった。この世界での本当の名前は、俺は知らない。前世の名前は完全に日本人の名前＝ミッドチルダでは珍しい。アパート借りる時、不思議そうな顔されたもんな……

それから、聞かれることなんて無かったから……考えてなかった。とりあえずここはシカトだ。

そんなことを考えてる内に、メンテは終わった（てかすることなんて殆ど無かった）

「……はい、終わりましたよ」

余計なことは言わない、食いついてきても面倒だし……

「ありがとう！……えといくらになるかな？」

「……５００です」

「え？それはいくらなんでも安すぎない？普通の専門店の３分の１くらいだけど……」

「……子供の露店で客を呼ぶには、安さぐらいしか武器はないですからね」

「そっか……えと……細かいのは……」

――ピピピ！

フェイトさんがお金を探そうとしていると、何やら通信が？

「ごめん！ちょっとまってね」

そう言って、通信するフェイトさん。が、次第にその顔は青ざめ…
…というか蒼白といえるくらいに変わっていく。

「……うそ、なのはが……そんな……」

なのは？えと、確か地球の友達で管理局のエース様だったっけか？

「うん！すぐ行く……場所は？……うん分かった！」

焦ってる様子なので、声をかける。

「……急ぐんですよね？お金はどうせまた来るんでしょうし次会ったときでいいですよ」

「――！？ごめん！！ありがとう！！また来るから！！今度来た時には、名前教えてね！！」

矢継ぎ早にそう言って、ものすごいスピードで走って行った。……

まぁどうせまたすぐ来るだろう。

「……名前、考えとかないとな……」

――それから少しして、管理局のエースが撃墜されたという噂を聞くようになった、そしてその後フェイトさんと再開するのは8年後だった――

フェイトさんが、走り去った後……いつも通りシートの前に座っていると……

「返して！！返してよぉ～！！」

という、喧しい声が聞こえてきた。

声のしたほうに目をやると、今の俺と同じ年ぐらいの少年3人、青い髪の少女1人が何か言い争っていた。

「ここは俺様のナワバリなんだから、入ってきたてめえが悪いんだよ！」

小太りの少年が、ポーチだか鞄だかそんなものを振り回しながら、訳のわからないことを言っている。ナワバリって……お前はどこか

のライオンか？

「うぅ……返してぇ……」

少女の方は、完全に泣きだし同じセリフを繰り返すだけ……

……うるせえ……喧嘩ならよそでやれよ。

「おいそこのお前！何じろじろ見てんだよ！！」

小太りの後ろに居た少年……仮に子分Ａとする。その、子分Ａがこちらに気付いたのか声を張る。

「あ～ん？てめぇ……なんか文句でもあんのか？」

小太りがこちらに近づいてきて、俺の胸倉を掴んで、旧時代のチンピラみたいなセリフを吐いた。

「俺様は――ふぎゃあ！？」

顔が近かったので、とりあえず殴った。

「て、てめぇ……い、いきなり何しやが――るふぁ！？」

尻もち付いて、涙目で何か言ってきてたので、次は顔を蹴った。涙を流しながら、子分Ａ，Ｂ共々怯えた目でこっちを見ている。まぁ当然の反応か……

「……やかましい、失せろ……もう一回殴るぞ？」

とりあえず退場いただこう。「もう一回殴る」の部分にビク！っとした小太りは、慌てたように走り去って行った……子分Ａ，Ｂははるか前方を走ってた。……人望ねぇな小太り……

騒音の現況が走り去った後、俺の足元にはさっき小太りが振り回してたポーチのようなものが、落ちていた。

「えぅ……そ、それ……」

青い髪の少女がこっちを見て、涙目で何か言おうとしている。……ああ、これこいつのか。

「……ほら」

ポーチ？を拾い上げて、その少女に渡し、俺はいつものシートの前に戻る。

騒音の元は、去ったしこれでいつもの日常が返ってきた。

……さっきの少女が隣に座って、こっちを見ている以外は！！

なんだ？この状況、なんか文句があるのかこいつ……ああ、あれか？実はさっきの小太り達は友達で、お遊びでやってましたとかそん

なのか？……だとしてもうるさいお前らが悪い。

「あ……あの……」

やはり何か言いたいことがあるようで、こっちをチラチラ見ては顔を伏せる少女。

「……なんだよ？何か言いたいことがあるのか？」

とりあえず、聞いてみる。もし文句だったら、適当に怒鳴ればどっかいくだろ……

「あの……その……ポーチ……あ、ありがとう……」

……は？

「取り返してくれて……ありがとう」

ああ、こいつには今のは、俺がこいつのためにポーチを取り返したように見えたのか、絡んできたから追っ払っただけで、割って入る気なんてなかったんだが……

「……商売の邪魔だった奴を、追っ払っただけだ助けたわけじゃねぇよ」

「……お店、やってるの？」

……失言だった。少女はシートの上に置かれた商品を、珍しげな眼で眺め始める。

まずい……居つかれる前に逃げないと！！

「……そうだけど、もう今日は店じまい」

物を片付け、撤退の準備をしようとする。

「ホント！？」

なぜか嬉しそうな少女。

「じゃあ！一緒に遊ぼ！」

「……は？」

一緒に遊ぶ？何言ってんだこいつ……確かに見た目は同じ年ぐらいだが、精神的にはもう３７歳な訳だし……正直嫌だ……

「……いやだね、俺はもう帰……る……」

断りの言葉を言おうとした瞬間、涙目になる少女。

「うぅ……いっしょに……あそぼ……」

「……いやだから、俺は……」

「……いっしょ……ぐす……あそ……ぼ」

「……」

こいつ、捨てられた子犬のような目で……

「いっしょに……」

「……あああもう！分かったよ遊べばいいんだろ！遊んでやるから泣くな！」

泣きだされても困るので、俺はしょうがなく折れた。……てか……あの目は……無理。

「ホント！！やった～♪！！」

とたん、さっきまでの顔はどこへ行ったか笑顔になる少女。嘘泣き……だと……そんな高等技術をこの歳で……

「……はぁ、とにかく商品を一度家に置いてからな！」

最後の抵抗、一人で帰れたら逃げよう。

「うん！ついてく～♪」

……さいですか。

がっくりと肩を落として歩く俺、後ろを楽しそうについてくる少女……どうしてこうなった？

「あ！！そういえば……」

少女が何かに気付いたように声を上げた。

「……今度はなんだ？」

「名前！」

「……はい？」

「お名前、教えて～」

名前……そういえば考えてなかったわ。ええっと……名前……名前……

「……コウタ」

「こうた？」

とりあえず、前の世界での名前を名乗った。あとはええっと……ファミリーネーム……は……

「……コウタ……コウタ・エルザード……」

とりあえず、孤児院の名前から取った。バランス悪いが、まぁどうせ今日限りだしこれでいいよな。

「コウタ♪」

嬉しそうに俺の名前を呼ぶ少女。

「コウタ！私の名前はね――」

――思えば、これが始りだったのかもしれない、俺の……第二の人

生の――

人通りの少ない公園、そこに佇む一人の少女。

「……今日も……いない……か、どうしたんだろう？」

ここ数週間と同じように、少女は誰かを探し辺りを見渡す。

「お店……やめちゃったのかな？……それとも別の場所に変わったのかな？」

そう呟く少女の背中は、どこか寂しげで、

「お金……まだ払えてないよ……名前も教えてもらってない、私はあの子を助けてあげられなかったのかな？」

その問いに、答える人はいなく夕暮れ時の公園には静かな風だけが吹いていた。

「また……どこかで会えたらいいな……」

そう呟き少女は、風になびく金髪を押えながら、公園を後にした。

――そう、少女は知らなかった。彼女の探している少年は、偶然知り合った青い髪の少女のワガママに付き合わされ、ここ数週間露店を出せずあちこち連れまわされていたことを……二人が再び出会うのは、今から８年後――

第四話「転機？」（後書き）

やっと導入編が終わりましたＯＲＺ

次回より原作のストーリーに入っていきます。

基本的に原作に沿って、進んでいく予定ですがところどころ変えていきます。

次回は８年たち、主人公の性格が激変しますが、その辺の間の８年間はストーリーの中で入れていきます。

主人公設定（十七話時点）（前書き）

箇条書きにて、主人公設定～

話が進むごとに更新します。

１２／３０主人公のデバイス設定を更新…変更するかもです

主人公設定（十七話時点）

≪プロフィール≫（※十三話時点）

名前：コウタ・エルザード（旧名：村山幸太）

年齢：１５歳（前世の享年３０歳）

身長：１７４ｃｍ

体重：７０ｋｇ

魔力ランク：Ａ－

魔導師ランク：陸戦Ｃ⇒Ｂ

魔力光：薄緑

階級：ニ等陸士

所属：機動六課ライトニング分隊※コールサインはライトニング０５

術式：ミッド式

ポジション：オールラウンダー（射撃寄り）

得意な事：魔力収束・魔力操作（形状の変化・圧縮など）

苦手な事：魔力の瞬間大量放出（瞬間的に多量の魔力を放出する砲撃魔法などが使えない・収束魔法もしかり）・魔力の遠隔操作

レアスキル：魔力・魔素を目視出来る目（切り替え可能）？

所持資格：大型二輪免許、機械設計技術士2級、エネルギー管理士、危険物取扱

趣味：強いて挙げるなら料理（食べるのはほぼスバル）

特技；機械いじり

好きな物：友達、仲間

嫌いな物：自分、神様

リリカルなのはの世界に転生した主人公、当初は枯れた性格をしていたが、８年間で心境の変化があり現在は丸くなっている。
魔力操作・魔力収束については、天賦の才を持っているが、魔力の瞬間大量放出が苦手なため、強力な魔法がまともに使えず、高めの魔力量は宝の持ち腐れ。（Ｂランク相当の魔法は、発動するまで普通の倍ぐらい時間がかかる・Ａランク以上なら3倍以上）
上記の理由のため、収束はできても発射の「瞬間」に多量な魔力が必要な収束魔法・砲撃魔法は使用できない。
また、魔力の遠隔操作も苦手なため、誘導弾・フェイクシルエットなどの遠距離操作魔法も使えない。
その為、魔力を圧縮することで威力を、加速魔法を組み込み、速度・連射を上げることで命中力を上げている。⇒デバイスの補助により誘導性・発動にかかる時間はある程度解消された。
目下の悩みは、火力不足
転生前は、なかなかハードな人生を歩んできたため、自分に対して損得勘定なく向けられる好意や優しさが苦手。
前世を通して初めて「絆」と呼べるものを手にしたせいか、友達や仲間を大切にしていて、感情の機微にもよく気がつきフォローなどもするが、自分の事や気持は他人には話さない。
本人曰く「目的も、目標もない」ため、昇進やランクアップに対しては興味がなく、約５年前に自身に誓った想いだけで魔導師を目指した。
スバルとは7歳の頃からの幼馴染といっていい関係で、昔からワガママに振り回されている。
ティアナ曰く「スバルに弱い」。
普段はめんどくさいなどやる気のない発言ばかりをしているが、実

際は傷つくのが怖く、予め「いやいや付き合った」などの言い訳を用意したいがために、やる気なく振舞っていて、自分でもそれを自覚しているため自分が嫌い。（根は真面目なお人好し）
前世と幼少の頃、職としていたため機械いじりが得意。
フェイトとは、幼少の頃に面識があり、そのころ取った態度について謝罪したいと思っている。
どのポジションも本職には敵わないが、それなりにこなせる為、ポジションチェンジが得意なオールラウンダー。（スバル・ティアナと組む際は主にフルバック・クロスシフトではガードウィング）
オールラウンダーとして、スバルやティアナに付いていくため、訓練校の頃から毎晩自主トレを欠かさず行っている。（隠れてやっているため周りの評価は、いろいろこなせる天才）
とある事情のため、ゲンヤとレジアス対しては頭が上がらない。

≪デバイス≫

名称：ジェミニ

種類：インテリジェンスデバイス

人格：女性型

性格：献身的で主人公が望むのなら、体に負荷のかかるようなことも心配しながら了承する。更に主人公の力になるため、日々自身の改良プランを思案中。

形状：ショートライフルの上下に刃がついた両刃の双銃剣

カートリッジ：４発×２丁※装填式

待機モード：翡翠色のネックレス

☆通常モード：ワンハンドモード／ツーハンドモード
ティアのクロスミラージュと同様に、２丁・１丁どちらにでも切り替えられる。
基本的には２丁で使用。

☆モード２：???

☆フルドライブモード：???

☆???（主人公が自分で搭載）

オールラウンダーである主人公の補助に重点を置いたデバイス。
近距離で打ちあえる強度を保つため、重量は同サイズのデバイスよりやや重め。
魔力の圧縮・誘導性・魔力出力の補助の３点を特に意識して作っており、デバイスが単独で使う魔法も多い。
主人公は元々すべての距離で戦えていたため、モードが変わっても形状の変化はない。

主人公の魔力放出力を補うためカートリッジを多用出来るように、カートリッジは装填式。（予備の物は腰のポーチに収納）

主人公にとっては、唯一の相談相手と言っても良く、新魔法などをよく一緒に考えている。

名前の由来は主人公の誕生日が、日本の星座に当てはめると双子座のため。

主人公設定（十七話時点）（後書き）

魔法と分けます。

基本的に主人公はそこまで強くはないです、
攻撃力・防御力はスバルより低く
幻術・射撃ではティアナに劣り
突貫力・スピードはエリオに届かず
補助・支援ではキャロより効果が低い
といった感じになります。

後半になれば強くなっては行きますが…

後、オリジナルキャラは主人公と後1体（人間じゃない）しか出さない予定です。基本的には原作に主人公が加わるという形で進んでいきます。

使用魔法設定（十七話時点）

≪使用魔法≫（十七話現在）　※原作登場は○オリジナルの物は横に☆

【砲撃魔法】

なし

【射撃魔法】

魔力の遠距離操作が苦手なため、弾に誘導性を付与できず、すべて直射型。
魔力の最大放出量も低いので、魔力を圧縮することで威力を上げている。
デバイス『ジェミニ』のおかげで魔力圧縮にかかる時間は3分の1程度まで短縮された。

○基本的なショット系魔法（使えるだけで威力が低く、時間もかかるため改良したものを使用）

☆シュートバレット改

直射型
魔力の遠距離操作が苦手で、誘導性が付与できないため改良。
加速系魔法の術式を応用しているため、速度と連射性能に優れる反面、火力は低い。

☆ストライクシュート

直射型

カートリッジ1つ消費、圧縮した魔力弾が、着弾した瞬間に爆発する。
範囲はそこそこあるが、威力は低めのため主に仲間との同時射撃で使用。
名称は2人の魔法に合わせる形で付けた。

☆スパイラルバレット

直射型
魔力で作った三角柱型の弾に、ドリルの要領で回転を加えたショット。
貫通力・速度に優れるが、サイズはビー玉位で爆発もしないため、バリア破壊ぐらいしか使い道はない。

☆ソニックバレット

直射型
速度＝威力、カートリッジを2発ロードして発動する。
様々な加速魔法の術式を応用して、音速を超える速度で圧縮した魔力弾を打ち出す。
ただし、魔力の圧縮にかかる時間が約1分、とても実戦向きではない。

☆スナイプバレット

直射型
量遠距離用魔法、最大射程は約3ｋｍ、カートリッジ2発ロード。
圧縮した魔力弾にドリル回転を加え、威力よりも貫通力に特化した射撃。弾速も速い。
ただし、魔力圧縮に約2分かかるため、使用機会は殆どない。

☆ジャンクバレット

直射型
簡単にいえば、「スターダストフォール」の劣化版。
サイズの小さい瓦礫などを加速させて打ち出すだけの魔法。
打ち出せるサイズは最大で掌に収まるくらいまで。ＡＭＦ対策に開発。

【近接魔法】

☆スパイラルランス

デバイスの先に、魔力を螺旋回転させ貫通力を高める魔法。
フィールド貫通効果などはない。

【幻術魔法】

○オプティックハイド
術者と術者に接触した対象を透明にし、見えなくする幻術魔法。

【防御魔法】

○基本のプロテクション・シールド

○アクティブガード
低速の爆風を発生させ、対象の速度を減衰させたり、柔らかく受け

止める。
爆発の規模等は、目算で調整する。

○ホールディングネット
網状の魔法で対象をキャッチする。

【捕獲魔法】

○リングバインド
基礎的なバインド魔法。

【補助魔法】

○フィジカルヒール
軽傷を直す程度の回復呪文、コウタはあまり得意でないため時間がかかる。

○フィールドインベイド以外の基本ブースト系魔法

☆ブーストアップ・ジャンプ
脚力を強化する補助魔法。
主にジャンプで移動する際に使用。

【召喚魔法】
無機物召喚は操作が単純なため可能だが、無機物操作はデバイス任せのため、狙い通り動くかどうかはデバイスとの信頼関係次第。
生物の召喚は『召喚するだけ』なら可能だが、指示・操作などが複

雑で、デバイス単体ではできないため、召喚獣が好き勝手に暴れる危険があるので使用しない。（というか、どうやって召喚獣と契約を結べばいいのか分からない）
キャロ曰く『相手が全面的に協力』という意思を持っているなら言葉だけで使役できるらしい。

○錬鉄召喚
キャロに教わって覚えた魔法。初めは召喚は出来ても、召喚した鎖を操作することができず何の役にも立たなかったが、デバイスに操作を一任し可能になった。
詠唱が必要な魔法のため、デバイス単体で使用はできない。

【移動魔法】

☆浮遊
魔力によってその場で１０ｃｍほど浮くだけの魔法。
移動はできない、スバルに引っ張って移動してもらう際に使用。

○ソニックムーブ
あたかも瞬間移動したかのように見えるほど、高速の移動を行う。

○ブリッツアクション
腕の振りやフットワーク等の体全体の動作を高速化するための魔法。
近接戦闘の際に使用することが多い。

使用魔法設定（十七話時点）（後書き）

主人公は魔力量は多いですが、瞬間的に引き出せる魔力が人より少ないため、発射の瞬間に大量の魔力を消費する、収束・砲撃魔法が使えず、人より多めの魔力量も魔力切れがしにくい程度にしか、扱えてないという設定です。

その為、通常の魔法を得意な魔力の圧縮により、密度を高め強度と威力を上げています。しかし全体的に、弾は小さく火力に欠けます

具体的にはこの時点で?型のガジェットと戦うと、ほぼ打つ手がないです。

第五話「試験？？」（前書き）

いよいよ原作ストーリーに入ってきました。

しかし長いので分割します。

第五話「試験？？」

――ミッドチルダ臨海第８空港近隣――

破棄された都市街のビルの屋上に、３人の男女がいた。

一人は、足にローラー、腕にナックルを付け、すさまじいスピードでシャドーをする、青い髪の少女。

一人は、拳銃型のデバイスを持ち、落ち着いた様子で調整している、オレンジの髪の少女。

一人は、ショートライフルの上下に刃が付いたような銃剣を、柵に立てかけ『ワガママ女性の対処法～試験編～』と書かれた本を読んでいる少年。

３人は、三者三様の状態で、これから始まる「試験」を待っていた。

「……スバル、あんまり暴れてると、本番でそのオンボロローラーいっちゃうわよ？」

「ティア～嫌なこと言わないでぇ～、大丈夫だよ！ちゃんとこの日に備えてコウタにデバイスのフルメンテしてもらったもん！……ね？コウタ」

そう言ってこちらを向くのは、俺の幼馴染「スバル・ナカジマ」……ワガママな怪力女だ。思えばここ8年間の苦難等は、8割近くこいつが原因だった気がする。

俺は、手に持っていた愛読書……もとい人生の教本を腰のポーチにしまいながら答える。

「スバル、いい事を教えてやるメンテナンスってのは、性能を保つための保守であってだな……お前のオンボロローラーが新品に変わるわけじゃない。……壊れるかどうかなんて知らん」

「うぅ……コウタが冷たい……」

よく言うよ、フルメンテなんて手間のかかるもん頼んできたくせに。

「まぁでも、知り合いにデバイスに詳しい奴がいると何かと便利よね。私たちのは支給品じゃないから、定期メンテはともかくフルメンテは大変だしね」

そう言いながらこちらに歩いてくるのは、「ティアナ・ランスター」（愛称はティア）俺とスバルとは訓練校の頃からの知り合いで、よ

く組んでいる。……ワガママな凶暴女だ。

「俺に得することが、何一つないんだが？」

「なにいってるのよ。そのおかげでこんな美少女二人と一緒にいられるのよ？」

何言ってんだ……このオレンジ。

「ならその美少女二人を早く連れてこい。今俺の視界にいるのは、青髪の怪力女と、オレンジ髪の凶暴女だけ――ごふぉ！？」

俺の鳩尾に、ティアの拳が突き刺ささり、膝から崩れる。

「なんか言った？」

こ、こいつ……鳩尾を正確に……てかバリアジャケット着てんだぞ！なんだこのダメージ。

「お、お前……絶対ポジション間違え……「なに？」――ごめんなさい」

まだ開始してないけど、帰りたい……よし帰ろう。でも、了承取らずに帰ると後が怖いから……

「なあ？スバル、ティア一つ相談したいことがあるんだけど……」

「うん？どうしたの？「帰る」以外なら何でも聞くよ♪」

「なに？「もう帰りたい」以外なら聞いてあげてもいいけど？」

「……」

二人がほぼ同時に答える。何こいつら、エスパー？

図星を突かれた俺が黙っていると、ティアが肩を震わして……

「まったく！あんたはどうしてそう！いつもいつもやる気がないの！！」

やべえ、説教モードに入りやがった。俺は助けを求めるようにスバルを見るが、スバルは明後日の方向を向く……おいこっち向け幼馴染。

「だいたい、今回の試験だってスバルが申し込んだからいいようなものを……絶対受ける気なかったでしょ！！」

「……」

ティアの言うとおり、俺のこの試験への申し込みはスバルが代わりにやった。……もちろん事後承諾である。

……まぁでも、たぶんそうじゃなくても一緒に受けたいし、申し込んだろうけど、そんなことは口が裂けても言わない。

ある程度、ティアが怒鳴り終わった辺りで、スバルが仲裁に入る。

……遅いよ

「まぁまぁ、ティア。コウタだって試験が始まれば真面目にやるよ、ね？」

「まぁ……な。手抜いて長引くのはかんべんだし、一応は真面目にやるさ」

ティアが俺の不真面目さを叱って、それをスバルが仲裁して……まぁいつものパターンだ。

「はぁ……まったくスバルといい、コウタといい……どうしてこう手がかかるのかしら……」

「ははは、ご苦労さま。……で、ティア時間は？」

自分の事はとりあえず棚に上げて話題をそらす。

「ちょっとまってね、ええっと……」

答えながら、ティアナが右手を弄る。すると空中に小さなモニターが現れ、現在の時間が表示された。

すると、すぐにカウントダウンが始まり試験開始の時刻になった。

俺達がそれを確認するのとほぼ同時に、スバルの後方辺りにモニターが現れ、銀髪の少女が映る。同じ髪の色だ、ちょっと親近感。

俺達がそちらを振り向くのを確認してから、少女は腰に手をあてて口を開く。

『おはようございます！……さて、魔導師試験の受験者さん3名。揃ってますか？』

「「「はい！」」」

一列に並び、元気良く返事をする。……やっぱ公私はしっかり分けないとね。モニターの少女は、しっかりした返事に満足したように一度頷き、手に持ったバインダーに視線を移す。

『確認しますね。時空管理局陸士３８６部隊所属の、スバル・ナカジマ二等陸士と』

「はい！」

『ティアナ・ランスター二等陸士』

「はい！」

『コウタ・エルザード二等陸士』

「はい！」

『所有しているの魔導師ランクは、陸戦Ｃランク。本日受験するのは、陸戦魔導師Ｂランクへの昇級試験で間違いないですね？』

「はい！」

「間違いありません」

「間違いないです」

俺達の答えを聞くと、少女は視線をバインダーから戻し

『はい！本日試験管を務めますのは、私、リインフォース？（ツヴァイ）空曹長です。よろしくですよ～』

そう言って、リインフォース？空曹長は敬礼をする。……どう見ても今の俺より年下なんだけど……曹長！？ほんとどうなってんだ？この世界の労働基準……

「「「よろしくお願いします」」」

心の葛藤を押し込めて、二人と共にそう言って敬礼を返す。

いよいよ試験が始まろうとしてた。

――上空――

ヘリの中から試験会場を見る二人の女性。

「お、さっそくはじまってるな～。　リィンもちゃんと試験管してる。　ふふ」

そう言って、全開のドアに手をかけほほ笑む茶髪の女性は、時空管理局二等陸佐「八神はやて」

「はやて、ドア全開だと危ないよ。　モニターでも見られるんだから……」

椅子に座り、風になびく髪を押えながら話す金髪の女性は、時空管理局本局執務官「フェイト・T・ハラオウン」

「は～い」

その言葉を素直に了承し、ドアを閉じ座るはやて。

「この三人が、はやての見つけた子たちだね」

モニターを見ながらフェイトが話す。

「うん、三人ともなかなか伸びしろがありそうな、ええ素材や」

「今回の試験の様子を見て、いけそうなら正式に引き抜き？」

「ん～直接の判断は、なのはちゃんにおまかせしてるけどな？」

「……そっか」

モニターを見て、嬉しそうに目を細めるフェイト。

「部隊に入ったら、なのはちゃんの直接の部下、う～ん一人どっちに入れようか迷ってる子もおるんやけど……なんにせよ教え子になるわけやからな……って、フェイトちゃん？なんか嬉しそうやな？」

「……うん、まぁね」

「……？」

嬉しそうなフェイトと、よく分からない様子のはやて。

「（8年ぶりか……また……会えたね）」

――建物内――

モニターの前で何やら作業をしている、茶髪ロングをサイドポニーテールにしている女性。

≪範囲内に生命反応、危険物反応はありません。コースチェック終了です≫

「ん、ありがとうレイジングハート。観察用サーチャーと、障害用のオートスフィアも設置完了。私達は全体を見てようか」

≪イエス、マイマスター≫

――そして陸戦魔導師Ｂランク昇級試験が、始まる――

第五話「試験？？」（後書き）

３０００文字以上書いて、まだ開始すらしてないとか…Ｏｒｚ

次回は初の戦闘シーン…さてどうなることやら…

第六話「試験？？」

『三人はここからスタートして、各所に設置されたポイントターゲットを破壊』

モニターに映る銀髪の小……いや幼女。この試験の試験官リインフォース？空曹長、見た目は完ぺき幼女だが、階級は俺より３つくらい上……映ってる映像から推測するに、背も小さいんだろうな。

『あ！もろん破壊しちゃ駄目なダミーターゲットもありますからね』

試験官の言葉に応えるように、空中にモニターが表示されターゲッドなどの情報が映る。ダミーは青色ね。

『妨害攻撃に気をつけて、すべてのターゲットを破壊。制限時間内にゴールを目指してくださいです。
……何か質問は？』

内容が理解できているか、最終確認をする試験官。要は「ダミー以外のターゲットを破壊しながら制限時間内にゴールへ向かう」ってことだ。

「あ……え～っと……」

呟きながら俺とティアをチラ見するスバル。

「ありません！」

「ないです！」

ティアと俺は答える。

「ありません！」

俺達の答えを聞いて安心したのか、返事をするスバル。

『では、スタートまであと少し、ゴール地点で会いましょう、ですよ！』

試験官がそう言い、モニターが消えると同時にスタート用の、カウントが表示された。

今は青いランプが3つ。

「確認するわよ！左側と正面のビルのターゲット破壊は、私とスバルで、コウタは迂回して距離が離れているターゲットをお願い！その後、コース沿いに合流！」

ティアが、早口に説明する。なるほど……数が多いところは二人が受け持ち、距離が離れてまばらにあるターゲットは俺が破壊しながら合流か……

「おっけ～」

「分かった、じゃスタート直後はお前らが正面、俺が右だな」

スバルと俺の返答に頷き、視線をカウントへ戻す。黄色い2つのカウントが消え、赤いカウントが一つ表示される。俺達はそれぞれスタートの構えをとる。

「レディー！」

ティアがタイミングをそろえるために声を出す。……最後のカウントが消える

「「「ゴー！！」」」

3人の声が重なり、俺達は一斉に駆け出した。

俺はスタートしてすぐ、右に曲がり走りながら魔法の準備をする。

「我乞うは、力強き跳躍。我の両足に、大地蹴る力を――≪ブーストアップ・ジャンプ≫」

俺の詠唱に呼応して、魔力で強化された肉体に、更なる跳躍力のブーストがかかる。そのまま柵に向かい、隣のビルの屋上、そして次のビルの屋上へとジャンプしながら移動する。

途中デバイスに表示されている探索魔法の情報を確認しながら、ターゲットのあるビルの前へと辿り着き、銃剣型のデバイスから魔力弾を連射する。

魔力弾は、マシンガン並み……ごめん、言いすぎた。それなりの早さで連射され、窓際に並ぶターゲットを次々破壊していく。

けど、よく見ればかなり外してる。

訓練校に入り、本格的に魔法を学んでいて分かったことだが、俺は魔力の収束・魔力操作に関してはかなりの才能があったようで、更には魔力量も同年代と比べかなり多かった。

とここまでなら、天才と言われてもおかしくなかったが……やはり世の中そううまくはいかない物で、俺には2つの大きな欠点があった。

一つ目は魔力の放出量が同世代と比べ、半分以下しかなかった。

簡単に説明してしまえば、魔力量を水道タンク、放出量を蛇口に例えるなら、俺は人より量の多い水道タンクを持っているが、蛇口が人よりかなり小さいため一度にたくさんの水を出すことができない。

結論から言ってしまえば、魔力の収束はできてもそれを放出することができないため、収束魔法はおろか砲撃魔法も使うことができない。

射撃魔法は強力な物でなければ使うことができるが、他の人に比べ発動までに倍近い時間が必要になる上、今使っているシュートバレットと言う射撃魔法の基本中の基本の物でさえ、普通に使えば魔力密度の低い、スッカスカの弾が出来上がる……まぁ時間かければ通常の物ぐらいにはなるが……戦闘中にそんなに時間がかかるのは致命的。

その為俺は、通常野球ボールくらいの大きさの弾を、得意な魔力の

圧縮でビー玉サイズまで縮小し、密度を上げることで強度を、【ソニックムーブ】の術式を応用することで、弾速（速さ＝威力）を、【ブリッツアクション】の術式を応用することで連射性を上げて使っている。

まぁ、言ってしまえば普通の物より威力は少し低いけど、スピードと連射性は上のショートバレットだ。

2つ目の欠点は、魔力の遠隔操作がまったくと言っていいほどできない。

これは、射撃を中心に戦う魔導師には致命的で、要は弾に誘導性がないため、まっすぐにしか飛ばない。これには当初本当に困り、近接戦闘主体のベルカ式に変えようかと思ったほどだが、残念ながら俺にベルカ式の資質はなかった……

まぁ出来ないものは出来ないで、しょうがないため「数打ちゃ当たる」の理論で連射性を、「避ける前に当てる」の理論で弾速を強化した魔法を使っていくことにした。

以上の事から、先に挙げた「魔力の収束が得意・魔法量が多い」は完璧宝の持ち腐れになっていた。

……って誰に説明してるんだ俺？

頭の中で、謎の第三者に説明してる内に、ターゲットの破壊は完了した。……ダミー混ざってなくてマジよかった。

探索魔法をかけると、どうもビルの内部にまだ一つあるみたいだが……ここからじゃ狙えない、狙える位置まで移動している時間はない……ここは、直接たたくか。

俺はブーストと一旦解除し、マルチタスクで2つの魔法を準備しながら窓のないビルの内部に飛び込む。

ターゲットの前に設置された2体の妨害用のスフィアが、俺に反応し攻撃の態勢に入る。

「≪ブリッツアクション≫！！」

着地と同時に、準備していた魔法の一つを発動、着地動作から駆け出す体勢までの動きを加速する！そして駆け出す瞬間に……

「≪ソニックムーブ≫！！」

高速移動魔法により、一気に新幹線並みのスピードまで加速する。

動作を加速したまま、目の前に並ぶスフィアを横なぎに刃部分で一閃！速度を緩めず、そのまま正面のターゲットを突き刺す！

――ドガン！！

俺が停止し、やや遅れて後ろで先ほどのスフィアが爆発する。

「よし……これでこの辺のターゲットは全部か……」

探索魔法で確認、この辺にはもうターゲットはないみたいだ。

しかし、もうかなり使っているがソニックムーブの移動速度にはまだ慣れない。最初の頃はうまく止まれず何度も転んだっけ……でもトップクラスの使い手は、この倍以上の速度で移動するっていう言うんだから驚きだ、いくら魔力で強化してても目が付いていくか？

「まぁそういうの出来る奴は、ばけも……」

化け物みたいな奴なんだろう、と言いかけて……やめた。

頭によぎったのは、管理局内でこの魔法の1、2の使い手の女性。

……子供だった頃、俺を心配して、いろんな言葉をかけてくれた人……そんな人に対してずいぶん酷いことを一杯いってしまった昔の俺。謝罪したいと思い、陸士になってから探してはいるんだけど……かなり忙しいようで、未だ会えずにいた。

たとえ誰も聞いてはいなくても、あの人の悪口は言いたくなかった。

……会いたいな……

（コウタ！こっちは終わったけどそっちはどう？）

「――！？！？」

物思いにふけっていると、ティアから念話が入る。やべ、今試験中だった……

（こっちも終わった、追いかけて合流するから先に進んでてくれ）

（わかったわ、急いで来なさいよ）

（了解）

とりあえず、考えるのは後だ、早く追いつかないと……

俺は再度ブースト魔法をかけ、先行してるであろう2人を追いかけた。

――上空――

「三人とも、いい動きだね」

「そやな、特にあの男の子面白いな」

ヘリの中でモニターを見ながら、フェイトとはやてが話す。

「最初にブースト魔法を使ってて、そのあと射撃、次に近接、オールラウンダーなのかな？珍しいよね」

「うん、まぁでもオールラウンダーは他に比べて成長が遅いもんやから、そのまま行くのは大変やろうけど……」

「指導次第では、大化けするかもね」

「そやな、けど……難関はまだまだ続くよ、特に最後に控える、受験生の半分以上を脱落させてきた関門、大型オートスフィア」

「今の三人のスキルだと、普通なら防御も回避も難しい（一人ソニックムーブでかわせそうだけど）……中距離自動攻撃型の狙撃スフィア」

「どうやって切り抜けるか……知恵と勇気の見せ所や！」

「……楽しそうだね、はやて」

「よし、全部クリア！」

デバイスに弾を補充しながら、ティアが話している。

どうやら、結構遅くなったみたいだな。

「あ！コウタ！おそいよ～もぅ！」

スバルがこちらに気付き声をかけてくる。

「悪い悪い、でこの次は？」

謝罪を入れつつ状況を確認する。

「次は、このまま上。上がったら最初に集中砲火が来るわ！オプティックハイドを使って、クロスシフトでスフィアを瞬殺！やるわよ！」

クロスシフト……訓練校時代から使ってる陣形で、三人にそれぞれ役目を割り振り戦闘する。一番慣れている陣形だ。　パターンが何種類かあり、それによって俺のポジションが変わる。

シフトの後ろに付くアルファベットで判断するが……今回は指定なしってことは、俺とスバルが切り込んで敵を固め、三人の同時射撃で制圧するパターン（俺のポジションはガードウィング）

「「了解！」」

俺とスバルはほぼ同時に応える。

壊れた道路に、ローラーの音だけが響く。ティアがスフィアの狙いを集めてくれているので、オプティックハイドによって、姿が見えなくなった俺とスバルは迂回して近づく。（俺のは効果時間が短いのでティアにかけてもらった）

「5！」

ティアのカウントが聞こえ、俺とスバルは固まっていないスフィアの破壊に散る！

「4！」

スバルが先行し、俺が打ち漏らしを剣部分で叩く！

「3！」

その声が聞こえるとほぼ同時に、オプティックハイドの効果が切れ、こちらを認識したスフィアが攻撃を仕掛けてくる！それを回避しながら射撃の準備に入る！

「カートリッジロード！」

俺はカートリッジを一つロードし魔力の圧縮を始める。

「2！」

俺に迫るレーザーをスバルがリボルバーナックルで弾き、そのまま跳躍する！

「1！」

その声を聞き、俺はその場に停止し！射撃の態勢に入る！（スフィアの攻撃はスバルが引き付けてくれている）

「ゼロ！！」

発射の掛け声と同時にティアが姿を現す！

「クロスファイヤーッ！」

「リボルバーッ！」

「ストライク！」

「「「シュート！！！」」」

三人の掛け声と共に発射された射撃は、固まっていたスフィアに正確に当たり爆煙を巻き起こす！

煙が晴れると、スフィアは綺麗に一掃されていた。

「イエーイ！ナイスだよ二人とも！一発で決まったね！」

「ま、あれだけ時間があればね」

「……だな」

よかった、命中して……俺あのショットの命中率6割くらいだもんな……

「普段はマルチショットの命中率、あんま高くないのに、ティアはやっぱ本番に強いな～！」

スバル……それ褒めてねえぞ。

「うっさいわよ！」

「いやでも、羨ましいぞティア……俺マルチショットできねえし」

いいなぁマルチショット……俺も打ちたいな。

「コウタはティアよりたくさん展開できるけど、発射できないもんね～」

「うるせえよ！」

スバルのセリフが突き刺さる。確かに……展開するだけならティアの倍の数はいける自信がある。でも……展開できるだけで発射できない……くそぅ

「二人とも遊んでないで、さっさと片付けて、次に……！？」

「うん？……！」

俺もティアにつられて視線を動かすと……

打ち漏らしがあったのか、スフィアが一つスバルに狙いを定めていた！

「スバルッ！！防御！」

ティアが叫びスバルを突き飛ばし、自身も逆方向に回避する！

「チィッ！！」

俺は慌てて、デバイスを構えスフィアに向けて魔力弾を連射する！

発射の瞬間、グキ！と言う嫌な音が聞こえた……

――上空――

「！？なんや？」

突如モニターの映像が消え、困惑するはやて。

「サーチャーに流れ弾が当たったみたいだけど……」

フェイトはそう呟き、映らなくなったモニターを見る。

――建物内――

白い服を着た女性が、映らなくなったモニターを確認し、通信する。

「トラブルかな……？リイン、一応様子見に行くね」

『はいです、お願いします』

≪セットアップしますか？≫

「そうだね、念のためお願い。」

――廃道路？――

「ティア！！」

足を押え座りこむティアに、スバルが駆け寄る。　駆け寄る？……ローラーの場合どういうんだ？

「騒がないで！なんでもないから！」

っとそんなこと考えてる場合じゃねえな。

「嘘だ！グキッって聞こえたよ！捻挫したでしょ？」

「だから……なんでもないって――くぅ、あた！」

立ち上がろうとして痛んだのか、再び膝が崩れる。

「動くなティナ。見せろ」

俺はティアのそばにしゃがみ≪フィジカルヒール≫を使う。が……これは……

「……駄目だな、結構酷くやってる。俺の回復魔法じゃ、時間がかかる」

俺の使う回復魔法は正直、あまり効果は高くない、せいぜい小さな傷を塞ぐぐらいだ。捻挫は酷ければ結構治療に時間がかかる。

「そんな……ティア……ごめん、油断してた……」

スフィアに気付かなかったのを後悔してるのか、スバルが謝る……
気付けなかったのは俺とティアも一緒なんだがな。

「私の不注意よ……あんたに謝られるとかえってムカつくわ」

そしてこいつはまた、自分の責任にしてる。……まぁ昔からか……

「制限時間内に治りそうにはないわね、私が離れた位置からサポートするから、あんた達二人でゴールして」

「ティア！！」

スバルが声を張る。さて、どうするか……

「うっさい！次の受験の時は私一人で受けるってんのよ！！」

「……次って……半年後だよ？」

「迷惑な足手まとい達がいなくなれば、私はその方が気楽なのよ！わかったらさっさと行きなさい！」

とりあえず回復魔法は一旦止め、成り行きを見守る。

「ティア、私、前に言ったよね。弱くて、情けなくて、誰かに助けてもらいっぱなしの自分が嫌だったから、管理局の陸士部隊に入った……魔導師を目指して、魔法とシューティングアーツを習って、人助けの仕事に就いた……」

「知ってるわよ！聞きたくもないのに何度も聞かされたんだから……」

あ～俺も聞かされたな、その話と管理局のエース様の話は耳だこだ。

「ティアとコウタとずっとチームだったから！ティアがどんな夢を見てるか、魔導師ランクのアップと昇進にコウタと違って、どれぐらい一所懸命かもよく知ってる！」

……そこで俺を引き合いに出すな。

「だから！こんなとこで！私の目の前で、ティアの夢をちょっとでも躓かせるなんて嫌だ！！一人で行くのなんて絶対に嫌だ！！」

「じゃあどうすんのよ！走れないバック「まぁ落ち着け、二人とも」――！？」

このままじゃ時間がなくなりそうなので、割って入る。ティアとスバルの喧嘩に俺が割って入るのもまぁよくあるパターンだ。

「ティア、スバルの強情さはよく知ってるだろ？こうなったら何言っても聞きやしねえよ……なんか思いついた手があるんだろ？言ってみろよ」

長い付き合いだしそれぐらいはわかる、こういう時のスバルは意見を押し通すためか、頭が回る。

「裏技！反則取られちゃうかもしれないし……ちゃんと出来るかもわからないけど……上手くいけば三人でゴールできる！！」

「ホント!?」

「あ、あ～、えぇと、その……ちょっと難しいかもなんだけど……、二人にも無理してもらうことになるし……」

そこは自信持って言えよ……

「よく考えると……やっぱ、無茶っぽくはあるし……その……えと……なんていうかその……二人が、もしよければっていうか……」

「ああ～～!!イライラする!」

それは同感だ。

「グチグチいっても!どうせアンタは自分のワガママを通すんでしょ!?どうせ私とコウタはそのワガママに付き合わされるんでしょ!?だったらはっきり言いなさいよ!」

「ま、同感だな……お前が無茶言って、俺とティアがフォローする……いつものことだろ?　大丈夫、今まで上手くいったんだし、今回も何とかなるさ」

俺とティアの言葉に決心がついたのか、スバルは顔を上げて……

「三人でやれば、きっとうまくいくよ!力を貸して二人とも!」

その言葉に、俺とティアは微笑み……

「まぁ頑張ろうぜ……ティア残り時間は?」

「……4分30秒ね、で、スバル……プランは？」

「はっ――うん！」

「――って、感じなんだけど……どうかな？」

「なるほどね、強引な力技だけど……現状それぐらいしか手はないわね」

「じゃあまぁ、スバルの考えた作戦で行くとして……」

確かに力押しだが、悪くない作戦だ……ただし、こいつたぶん「あの事」考えてないよな？

「よし！じゃあいこ「ちょっとまて！」……う？」

さっそく行動しようとするスバルを止める。

「その作戦の前に、二人に教えてほしいことがあるんだが……重要な事だ正確に教えてくれ」

「う、うん」

「何を教えるのよ？」

「二人の――だ」

――この後、俺には2発の鉄拳が撃ち込まれた――

第六話「試験？？」（後書き）

なっげぇ…試験が…終わらない…細かく書きすぎてるのかな；；

試験編は次で終了の予定です。

感想を書いてくださった、リンドウさんありがとうございます♪励みになります。

第七話「試験？？」

破棄されたビルの並ぶ都市街、廃ビルの一つの屋上に俺とスバルはいた。

スバルは足元に魔法陣を展開し、タイミングを計るように正面のビルを見つめ、俺はその後ろで殴られた顔を撫でていた。

「なんで……殴るし……」

「女の子にあんな質問すれば、あたりまえだよ！」

俺の呟きにスバルがあきれたように返す。……重要な事なのに……

（二人とも準備はいいわね？）

ティアから念話が届く。

（うん！こっちはいつでもいけるよ）

（じゃあ……スタート！）

スバルの考えた作戦はこうだ。　まずティアが幻術魔法で大型スフィアの攻撃を引きつけ、俺とスバルが反対側から突入、一気に叩く。

（フェイクシルエット……コレ、めちゃくちゃ魔力食うのよ……。あんまり長くもたないんだから、速攻で決めなさいよ！でないと三

人そろって落第なんだから！）

（うん！）

（了解だ）

フェイクシルエット……自分や他人の幻覚を作りそれを動かす魔法、かなり高度な遠隔操作技術と集中力が必要なため、もちろん俺には使えない。

ティアからの念話を聞き、俺とスバルは突入の準備をする。

「私は、空も飛べないし、ティアみたいに器用じゃない、コウタみたいに色々なことができるわけでもない、……できるのは、全力で走ることと、クロスレンジの一発だけ！」

自身を鼓舞するように、スバルが言葉を紡いでいく、この言葉に呼応するように足元の魔法陣が光を強くする。

「だけど……決めたんだ！あの人みたいに強くなるって！誰かを……何かを……守れる自分になるって！」

言葉を発し、右腕を上に掲げる。

「ウイング！ロード！」

そう叫び、地面に拳を突き立てる！すると足元の魔法陣から蒼い道が伸びていく。

ウィングロード……先天性の魔法のようで、詳細はよく分からない

が空中に光の道を作る魔法だ、その道は術者でなくとも利用できる。
ウィングロードが正面のビルに突き当たり、壁に亀裂をいれる！
「いくよ！コウタ！」
俺の方を向き声をかける。
俺は魔力により、その場に１０ｃｍほど浮遊し、スバルの肩に手を置き応える。
「ああ、いつでもいいぞ……バリアは俺が破壊する。お前は全力で叩きこめ！」
俺の言葉に頷き、スバルはクラウチングスタートの態勢に入る。
（いって！）
ティアからの念話に応えるように……
「いっくぞおぉおおお！」
一声叫び、最高速でスタートする！そして拳を構え、
「でやあぁあああ！」
声と共に、亀裂の入った壁に拳を叩きつけ、内部に突入する！

内部に突入すると、すぐさまスフィアがこちらに気付き攻撃を仕掛けてくる！

左右に分かれてかわし、俺は攻撃の態勢に入る！

「カートリッジ、ロード！」

カートリッジを一つロードし、圧縮した三角柱の魔力弾を作り出す！そしてそれをドリルの要領で高速回転させる！

――キュィィィン！

空気を裂くような音が鳴る……

「スパイラル……」

狙いを付け……

「バレット！！」

高速で発射された弾は、スフィアのバリアにぶつかり一瞬火花をひらせ、バリアを破壊し、スフィアとその後ろの壁を貫通し穴をあける！……『豆粒』サイズの……

スフィアは……なぜか攻撃をやめ……こちらを少し見つめた後、「なにこいつ？」みたいな感じでふぃっと『スバルの方』を向き、攻撃を開始する……

俺は、予想外の精神攻撃に崩れ落ちる……機械にまで馬鹿にされた……

「一撃！！必倒！！」

スバルはそう叫び、収束した魔力に自身の魔力をこめた拳を叩きこむ！

「ディバイン！バスタァアアア！！」

放たれた蒼い閃光はスフィアと更には後ろの壁まで破壊し……巨大な穴をあける！

……いいな、収束魔法……俺も使いてえよ……

俺はまだ精神的ダメージから立ち直れない。

「やった、やったよ！コウタ！」

スバルが嬉しそうにこちらに話しかける……

「あ、ああ……や、やったな……」

「こ、コウタ？……大丈夫」

「だだ、大丈夫だ、さあ残りの時間も少ないし……急ごう……」

高火力魔法覚えよう……絶対、覚えよう……

俺達はティアと合流し、ゴールを目指す。

動けないティアをスバルがおんぶし、俺はスバルの肩につかまり移動する。

「あと何秒？」

「１６秒！まだ間に合う！」

スバルの問いに応えつつ、ティアは最後のターゲットを撃つ！スバルはターゲットが破壊されたのを確認して、

「魔力！全開ぃいいい！！」

急加速する。俺は二つの魔法の準備をしているので黙ってる。

「ちょっ！スバル！止まる時のこと考えてるんでしょうね？」

ティアが慌てて聞く……考えてるわけないだろ、スバルだぞ……

「え？……あっ……」

スバルはすっかり忘れてた、みたいな感じで応える。

「嘘ぉ！」

ティアの顔が絶望に染まるが……

「大丈夫だ！それは俺が考えてる！！」

そう応え俺は、ゴール地点の先に魔法陣を５つ展開する、大きい物が中心に一つ、四方に小さい魔法陣が四つだ……ああ、ちなみに遠距離操作は苦手だが、遠距離発動は出来る、ってか得意分野だ。

俺は頭の中で、さっき聞いた二人の体重（情報料は顔面パンチ×２）、移動のスピードなどを暗算して、魔法の威力を調整する。

「あ、なんか……ちょいヤバです～」

そう言って試験官は進路から横に逸れる。

スバルがゴールを通過するのと同時に……

「≪アクティブガード≫！！」

俺は用意していた一つ目の魔法を発動する。

アクティブガード……緩い爆風で対象の速度を減速させる魔法。運転講習などでも使われている魔法で、爆風の威力は術者が計算して発動する。

目の前に、緩い緑色の爆風が現れ……スピードが落ちる……が！止まらない……あれ？……計算的には少し強めで、やったはずなんだけど、　こいつら……サバ読みやがったな……

「≪ホールティングネット≫！！」

しかたないので用意してたもう一つの魔法を、発動する。

ホールディングネット……網上の魔力が対象を受け止める。転落防止用によくつかわれる魔法だ。

瞬間、４つの魔法陣から緑色の網が出て、スバルの足に引っ掛かり、そのまま倒れた俺達を受け止める。

……二人を庇うように、体を割り込ませたせいで、俺は今二人の下敷きになっている。この重さ的に……○○ｋｇ……俺の計算より４ｋｇほど上だ。

「いてて……大丈夫？二人とも」

「ええ、私は大丈夫よ」

「てか、重い！……早く降りろお前ら！」

スバル、ティア、俺の順に話す……まぁ二人とも無事なようで、よかった。

「重いって！女の子にそんなこといっちゃだめなんだよ！！」

「女の子だろうが！なんだろうが！二人乗ってれば重いに決まってるだろうが！！」

スバルが、俺の言葉に噛みついてくる……いあ、先にどけよ。

そんなコントをしていると……

「も～～！！三人とも危険行為です！！」

怒鳴りながら、試験官がおりて……ちっさ！？

「頑張るのはいいですが！怪我をしては元も子もないですよ！……そんなんじゃ、魔導師としてはダメダメです！！」

と、至極もっともな事を言ってるが……だめだ見た目が気になってそれどころではない。

「……ちっさ……」

同じことを考えてたのか、ティアが呟く。　そこは思っても口に出すなよ……一応上官だぞ。

「まったくもう！」

試験官様は大変の怒りのようで、この後も言葉が続くかと思われたが……

「ははは、まぁまぁ」

と上から声が聞こえる……てかお前らいい加減にどけよ！見えないだろ！

「ちょっとびっくりしたけど、無事でよかった……とりあえず試験は終了ね。お疲れ様」

そう声が聞こえると、俺達の体が浮き、ホールディングネットから降ろされる。

そこに居たのは、局員でなくとも殆どの人間が知ってるであろう、「エースオブエース」こと高町なのは一等空尉である。たしか……あの人の親友だったよな……

「あ……」

スバルは、微動だにしない。憧れの人だって言ってたから緊張してるんだろうか？ティアも俺と同じようにスバルを見る。

「リインもお疲れ様。ちゃんと試験官出来てたよ」

「わ～い！ありがとうございます。なのはさん！」

さっきまでの怒りはどこへ行ったのか、とたん笑顔になる小人試験官。

「まぁ、細かいことは後回しにして……ランスター二等陸士？」

「あ、はい！」

「怪我は足だね。治療するからプール脱いで」

「あ！治療なら私がやるですよ～」

高町一等空尉の言葉に反応し、試験官がこちらに近づいてくる。

「あ、えと……」

ティアは何かを考えるようにこちらを見ている。

「やってもらえよ、俺の治癒魔法じゃ時間かかりすぎるしな」

「うん……えと、お願いします」

俺達の言葉を受けて、試験官は治療を開始する。すげぇ……俺のと全然違う。

ふとに気なり、目を切り替え、視線を高町一等空尉に戻す。……すげえよ……なにあの魔力。

俺の目には、とんでもない密度で高町一等空尉の周りに停滞する、桃色の魔力が写っていた。これが、オーバーSか……Aまでと次元が違う。

「なのは……さん」

俺が、自分にしか分からないことで驚愕していると、スバルが高町一等空尉に声をかける。

「うん？」

優しげな表情で、高町一等空尉が応えると、ビクっとしたように。

「ああ！いえ、あの……高町、教導官！！一等空尉！！」

慌てて呼称を改める……が、

「なのはさんでいいよ。みんなそう呼ぶから」

そう高町一等……なのはさんはスバルに近づきながら応える。

「4年ぶりかな？背、伸びたね……スバル」

「――！？えと、あの……あの……」

「うん、また会えて嬉しいよ」

感極まったのか、泣きだしそうになるスバルに、優しげに微笑み手を置くなのはさん……よかったなスバル。

なのはさんに抱かれ泣きだしたスバルを、ティアと一緒に見つめていた。

「私の事……覚えててくれたんだ……」

泣き続けるスバルに声をかけるなのはさん。

「あの……覚えてるって言うか……私、ずっと、なのはさんに憧れてて……」

「嬉しいな……」

「あ……」

優しく応えるなのはさん、空気になりつつある俺とティア……

そのまま二人の会話を眺めていると……リイン試験官が話しかけてきた。

「ランスターニ等陸士とエルザードニ等陸士は、なのはさんの事ご存知ですか？」

「あ、はい知ってます」

「俺もティアも、スバルに耳にタコが出来るぐらい聞かされましたので……」

てか、たぶん知らない人なんてほぼ居ないだろ、あの人雑誌とかにもよく出てるし。

「そうですか～」

俺達が、リイン試験官と話していると上空からヘリが下りてきて……その窓から覗いてる女性を見て、俺は固まった……

――そう、これが……8年ぶりの再会だった――

第七話「試験？？」（後書き）

試験やっと終わった～～～Ｏｒｚ

長かった…もう少しコンパクトにまとめる能力を付けねば…

後主人公…残念だがお前が高火力魔法を覚えるのは、私の中では地球編あたりの予定だ！！

さて次回は、オリ主とフェイトの再会、そして勧誘の話です。

撃震さん、感想ありがとうございます。
主人公は今の予定だと…最終的にスバルと同じぐらい（陸戦ＡＡ）になる予定です。

最後の最後、それ以降戦闘シーンがないであろう最終戦では無双してもらう予定ですが、それまでは器用貧乏な感じで行きたいと思ってます。

現在の構想では、主人公は最終戦の手前ぐらいで精神的に成長する予定です。

…このペースじゃそこまで何話かかるのかＯＲＺ

後半に進むにつれ、原作と違う展開が増えていく予定です。

ではまた～

第八話「再会と勧誘？」

――とあるオフィス――

「――と、まぁそんな経緯があって……八神ニ佐は新部隊設立のために奔走」

金髪の女性フェイトさんが話す。

「四年ほどかかって、やっとそのスタートを切れた、というわけや」

それに続けるように、八神ニ佐が話す。

試験が終わった俺達は、八神ニ佐に呼ばれ試験結果を待つまでの間オフィスで話を聞いていた。

「部隊名は、『時空管理局本局遺失物管理部機動六課』！！」

元気よく話すのは、リイン試験官。

「登録は陸士部隊、フォワード陣は陸戦魔導師が主体で、特定遺失物の捜査と、保守管理が主な任務や」

「遺失物……」

「？」

八神ニ佐の言葉に考えるティアと……頭に？マークが見えそうなスバル……

「ロストロギアですね？」

「？？？」

ロストロギア……古代遺産技術の総称だったっけ？……オーパーツってやつかな？

……表面上はそう思いつつも、俺は現在まったく冷静ではなかった。目の前に、ずっと謝りたかった人がいる……なのに言葉が出ず。頭の中は思考が渦巻いていた。

……あの頃と比べ、俺はだいぶ見た目も変わっている。ボサボサで伸びきっていた髪は、きれいに整えセミロングぐらいにしているし、身長もだいぶ伸びた、顔つきだって変っているだろう。

覚えてるわけないよな？いや、覚えてたってわからないぐらい変わってる。だったら下手に思い出させない方がいいんじゃないだろうか……いやでも、あの時の態度を謝罪しないと！……でも、しかし……

そんな考えが頭の中でぐるぐる回り、思考がまったく定まらない。正直話も半分ぐらい耳に入ってないし、出されたコーヒーにも手を付けずにいる。

（ティア！コウタ！）

（……なによ！）

（……）

突然スバルからの念話、黙ってろと言いたげに応えるティアと無言の俺。

（ロストロギアってなんだっけ？）

……お前訓練校主席じゃねえのかよ。

（うっさい！話し中よ！後にして！）

（……）

「で、……スバル・ナカジマニ等陸士、それと、ティアナ・ランスターニ等陸士、そして、コウタ・エルザードニ等陸士」

「「はい！」」

「……」

「私は三人を機動六課のフォワードとして、迎えたいて考えてる…
…厳しい仕事になるやろうけど、濃い経験は積めると思うし、昇進機会も多くなる……どないやろ？」

「あ、え～と……」

「スバルとコウタは高町指導官に魔法戦を直接教われるし、執務官志望のティアナには、私でよければアドバイスとか出来ると思うんだ」

「あ、いえ……とんでもない。と、いいますか……恐縮です……といいますか……」

「……」

迷うスバル、それを見て声をかけるフェイトさん、さすがに焦るティア、あいも変わらず無言な俺。

「ん？……コウタ？どないかしたん？」

「……！？い、いえ……もも、勿体ないお話に驚いていただけです！！」

ずっと無言の俺を心配してか、八神ニ佐が声をかけてくる。ドモりつつ返す俺……ああ！どうすればいいんだ！

「え～と、取り込み中かな？」

「ふふふ、平気やよ～」

そう言いながら、バインダーを持ってオフィスに入ってきたなのはさん。それに大丈夫だと応える八神ニ佐。……試験結果かな？

一旦考えるのをやめ、なのはさんに向き直る俺。

「三人とも、技術はほぼ問題なし……」

技術……『は』？

「でも、危険行為や報告不良は、見過ごせるレベルを超えています。」

ですよぇ～、ビル壊したりしたもんね、倒壊の危険だってあるよね。

「自分や仲間の安全だとか、試験のルールも守れない魔導師が人を守るなんて、できないよね？」

「う……」

「……はい」

「……その通りです」

なのはさんの指摘に、反論できない俺達。

「だから……残念ながら三人とも不合格……」

まぁ、しょうがないか……次は半年後だな。

「……なんだけど！」

「「「え？」」」

「三人の魔力値や能力を考えると、次の試験まで半年間もCランク

扱いにしておくのは、かえって危ないかも？というのが私と試験官の共通見解」

「ですぅ～」

なんか……変な展開になってきたぞ、再試験とかじゃないだろうな？

「ということで……これ」

3枚の用紙と、同数の封筒を出すなのはさん。

「特別講習に参加するための申し込み用紙と、推薦状ね。これを持って本局の武装隊で三日間の特別講習を受ければ、四日目に再試験を受けられるから……」

「え……ええ？」

「ぁ……」

……やっぱりか、しかしまぁ二人はBランクになりたかったみたいだし、よかったかな？

「来週から、本局の厳しい先輩達にしっかりもまれて、安全とルールをよく学んでこよ？そしたらBランクなんて、きっと楽勝だよ。……ね？」

「「「ありがとうございます！！」」」

三人そろって頭を下げる。

「合格までは、試験に集中したいやろ?私への返事は試験が済んでからってことにしとこうか」

「「「すみません!恐れ入ります」」」

八神ニ佐の言葉に三人そろって立ち上がり、敬礼をする。

退出しようとすると、フェイトさんが……

「あ……ちょっと待ってもらっていいかな?コウタ」

呼び止められる俺、心臓が跳ねた気がした。

フェイトさんは微笑み……『あの頃』とまったく同じ表情、同じ声で問いかける

「寂しそうな顔してるよ?私でよければ相談に乗るよ?」

その言葉にハッとする。

……そっか……覚えててくれたんだ……なら……

俺は、『あの頃』と同じ言葉を、今度は『あの頃』と違い冗談だと感情をこめて返す。

「あなたが、帰ってくれれば……元気になりますよ？」

「「っちょ！コウタ！！」」

俺の返答に、仰天するなのはさん、リイン試験官、八神ニ佐、そして慌てた様子で俺を諌めようとするスバルとティア。

でも、フェイトさんは笑いながら……

「ふふふ、……また……会えたね……今度は名前……教えてくれるかな？」

さっき呼んでたとかは、言わない……これは『あの頃』の約束だから……俺は微笑みながら。

「コウタ・エルザードです。……お久しぶりですフェイトさん」

俺の言葉に驚き、言葉を失っている５人。

「ホント久しぶりだね……あ！そうだこれ！」

そう言って、ポケットから５００と書かれたミッドチルダの硬貨を取り出し、俺に手渡す。

「遅くなってごめんね、会ったらすぐ払えるように、ずっとポッケに入れてたんだよ」

「……たしかに、受け取りました。……その、フェイトさん……」

「うん？」

緊張で、口が震えるが……言わないと……

「あ、あの頃は……色々失礼な事を言って……申し訳ありませんでした！！」

はんば叫ぶように謝罪し、頭を下げる。

「いいんだよ……気にしなくて、……表情、軟らかくなったね……また会えてうれしいよ」

……やばい、涙出そうだ。さっきのスバルの気持ちがわかった気がした。

「なんや？……二人とも知り合いなん？」

固まってた状態から戻った八神ニ佐が、フェイトさんに問いかける。

「うん……二人には話したことあるよね？公園で機械やデバイスの修理をしている子供がいるって」

「あ～あったな～……ってちょい待ち！あれ聞いたの１１歳ぐらいのころやで……」

記憶力いいな……さすが指揮官。

「はい、当時は7歳でした。フェイトさんはその頃よくいらっしゃってました」

俺の言葉に、スバルとフェイトさん以外は再び固まる……まぁそりゃあそうか……

「ん？……じゃあコウタってデバイスマイスターなの？」

なのはさんがそう聞いてくる。

「いえ、インテリジェンスのＡＩ構築を勉強してなかったので、資格は取れてません」

そう、俺はストレージなどは1から組むこともできるが、ＡＩ部分はまだ勉強中で制作できない。

その返答に納得したのか、なのはさんは無言でうなずいた。

「あ、引きとめてごめんね」

フェイトさんが思い出したように話してくる。

「いえ……お会いできて嬉しかったです」

「うん、もし同じ部隊になったらよろしくね♪」

「はい！」

嬉しそうに言うフェイトさんに応え、俺達はオフィスを後にする。

「あ～なんか色々緊張した。てかビックリしたよ！コウタがフェイト執務官と知り合いだなんて……」

「そうね、そんな話初めて聞いたわよ！いつ知り合ったの？」

芝生に三人で座り、話していると……やっぱり話題はそれに行くか……

「スバルと知り合う前だよ。一人で生活してた俺を色々心配してくれたんだ……その頃の俺はロクに取り合わなかったけど……な」

「ふ～ん……珍しいね？コウタが自分の昔話するなんて」

「そうね、訓練校以来かしら？」

「まぁ……たまには……な」

「でさ、新部隊の話、二人はどうするの？」

話題を変えるようにスバルが言う。

「アンタはいきたいんでしょ？なのはさんはあんたの憧れだし、同じ部隊なんて凄いラッキーじゃない」

「まぁ……そうなんだけどさ……」

「ティアはどうするんだ？」

「私は……どうしようかな？遺失物管理部の機動課っていったら……普通はエキスパートとか特殊能力持ちが勢揃いの生え抜き部隊でしょ？そんなとこ行ってさ……今の私がちゃんと働けるかどうか……」

「ふふふ～ん」

「……なるほどな」

俺とスバルは二人してにやにや笑う……背中押してほしいんだなこいつ。

「なによ……二人して気持ち悪い」

「うふふふ、だってね～？」

「じゃあスバル、その役目はお前に任せたぞ」

「役目？二人とも何言って……」

「そんなことないよ！ティアなら出来る！！……って言ってほしかったんでしょ～♪」

……おい一言多いぞ、てかその顔は馬鹿にしてるようにしか見えない。ああ、ほらティア怒ってる。

「いたたたたた！」

「なによそれは！言ってほしくないわよ！馬鹿言ってんじゃないわよ！」

言わんこっちゃない……ティアにつねられながら、助けを求めるようにこっちを見るスバル、ポーチから人生の教本を取り出して読み始める俺。

「終わったら、声かけてくれ～」

「ちょ！……いたたた、助けてよぉおおお」

無理……だって止めたら、たぶん俺がターゲットにされるもん。

「うぅ……痛いよぉ～」

終わったようなので、うつぶせに倒せるスバルを尻目に、俺はティアに近寄り声をかける。

「ティア……まぁそんな難しく考えるなよ」

「コウタ？」

「前線で指揮できる統率力がお前にはあるんだし、大丈夫……十分やってけるさ」

できるだけ優しく声をかける。

「……そうね……ありがと」

「あれ？……なにこの扱いの差……酷いよティア……」

お前は言い方が悪い……

「ともかく！やろうよ！二人とも！」

スバルが急に起き上がり、キラキラした目で叫ぶ。

「私はなのはさんに色んなことを教わって、もっともっと強くなりたい！ティアは新しい舞台で経験積んで、自分の夢を最短距離で追いかける！……で……あれ？そういえばコウタはどうするの？」

「……めんどくさい」

「えぇ～コウタも一緒に行こうよ！だって当面三人でやっと一人前扱いなんだから、まとめて引き取ってくれる方が嬉しいじゃん！！」

……それお前が言うのか？

「スバルの物言いには納得いかない……てかすごいムカつくけど、実際人にはっぱかけといてめんどくさいってなによ！」

「いや……だってな……厳しい訓練とか～、忙しい任務とか～気が滅入るじゃん？それに、俺昇進とか興味ないし……」

「えぇ～一緒に行こうよコウタ！」

「いやだから俺は……」

「……一緒に……いこうよ……ね？」

ぐ、こいつまた……

「いや……あのな……」

「……一緒に……」

「……わかった、俺も新部隊に入る」

「やった～♪」

「……アンタ、相変わらずスバルに弱いわね」

「……言うな……自覚してる……」

でもまぁ、どの道二人が入るなら……入ってただろうが、二人と一緒がいいしな。

……自分の性格がほんと嫌になる。本心を素直に言えなくて、引きとめてほしい、引っ張っていってほしいなんて期待してる自分が……本当に嫌いだ。

まぁまずは再試験だな、頑張ろう……

目の前でじゃれる二人を見ながら……一人そんなことを考えていた。

――廊下・窓際――

芝生で話す三人を見つめる、二人の女性。

「あの三人は、まぁ入隊確定かな？」

「だね」

「なのはちゃん嬉しそうやね？」

「三人とも育て甲斐がありそうだし、一人どういう方向性で育てるか悩む子もいるしね」

「ふふふ、それは先が楽しみやな」

「新規のフォワード候補は、あと二人だっけ？……そっちは？」

「二人とも別世界。今シグナムが迎えに行っとるよ」

二人が話しているともう二人、歩いてくる……一人は浮いているが

「なのは！はやて！待たせ」

「おまたせです～」

「ほんなら次に会うんは、六課の隊舎やね」

「お二人の部屋、しっかり！造ってあるですよ～！」

「うん！」

「楽しみにしてる……あ、はやて？」

「うん？どうかしたん？フェイトちゃん」

「一人……コウタの入れる隊、決まってないって言ってたけど……うちにもらっちゃダメかな？」

「ライトニングにか……う～んそやね！そっちにはセンターガードがおらへんし、前衛もガードウィングやから……ええかもな、なのはちゃんはどう？」

フェイトの言葉にハヤテは少し考えて応え、なのはに話を振る。

「うん！私もいいと思うよ。確かに前線指揮ができる子が、両方にいた方がいいし」

「よっしゃ！じゃあコウタはライトニング分隊に入れる方向で進めとくわ、本人には今度会った時に話すことにするな」

「うん、ありがとう二人とも」

第八話「再会と勧誘？」（後書き）

勧誘…そして再会、主人公の所属が決定しました。

次回は大きな原作改変があります。

第九話「休暇と食事？」

――地上警部部隊・隊舎――

カタカタとキーボードを叩く音が、静かな室内に響く。

特別講習を受け、再試験に合格し、八神ニ佐にスカウトの返事をして、今日は休暇。

現在俺は、自分のデバイス用のＡＩプログラムを作っていた。主に、魔力圧縮と誘導補助に主軸を置いたものを作る予定だが……あまりはかどってはいなかった。

俺がＡＩ製作に不慣れな事もあるんだが、問題は魔力の圧縮である。誘導補助の方は、参考になるプログラムも多いんだが、魔力圧縮については使い手が少なく、十分な資料が集まっていない。

……この分だとまだ数カ月はかかるな。

きりのいいところまで進め、一息付こうとすると、端末にメールが入る。あ、そうか端末と連動出来るようにもしないと……

『今晩、一緒に食事でもどうだ？』

「あの人」らしい、なんとも簡潔なメールに少し苦笑しながら返信を打つ。

『かまいませんよ、１９時ぐらいでどうでしょうか？場所はいつもの場所でいいですか？』

打ち終わり送信すると、ものの数秒で返信が来る。はええよ

『ああ、それで大丈夫だ』

ホントメール短いなこの人。　さて、朝食の支度でもするか……

手際良く刻まれる野菜、寸分違わぬ動きで動かされるフライパン。

自分で言うのもなんだが、俺は料理がうまい。作るスピードだけなら三ツ星ホテルの料理長にも負けない自信がある。そしてなにより安くうまく、大量に作るのが得意だ！

子供の時から度々うちに来ては、冷蔵庫の中身をすべて食らい尽くしていく幼馴染に、破産させられないために自然と身につけた技術だった。今では唯一の趣味と言ってもいい。

食事はすぐ出来上がり、それを食べながら約束の時間まで何をするか考えていた。

端末と連動させる部分のＡＩ参考資料がほしいな……本屋に買いに

行こうか。あ！そういえば今日『ワガママ女性の対処法～入学初日編～』の発売日だ。それも買わないと……

食べ終わった食器を片づけていると、誰か来たようだ。手を拭きドアに向かう。

「コウタ、おっはよ～♪」

そこには、私服のスバルとティアがいた。

――バタン！

勢いよくドアを閉じカギとチェーンをかける。今日は家の中で過ごそう……そうしよう。

「えぇえぇ！なんで閉じるの！コウタ！お～～～～い」

ドアの前で、スバルが何か言いながらドアを叩いてるが、聞こえなかった事にする。

――ドンドンドンベコ！ドンドン！

扉を叩き続けるスバル……え？ベコ？

……嫌な予感がして振り返ると、スバルが叩いているであろう所はそれに合わせるようにへこんでいた。そういえばこいつ、素手で戦闘機械とか破壊する奴だった……慌ててドアを開ける。

「扉壊す気かお前！」

「あ、コウタ！おっはよ～」

「……ああ、おはよう。それで？二人して何の用だ？」

「スバルが昇級試験の合格祝いに、三人で遊びに行こうって」

「そそ、だからコウタも一緒に行こう！！」

「……ちなみに遊ぶって、どういうルートで行くつもりだ？」

「まずは買い物をして～ご飯食べて～あとは適当……かな？」

「要は俺に荷物持ちになれと……そう言いたいのか？」

「そうよ？」

「そうだよ～」

悪びれる様子もなく、二人は即答する。

「なんでせっかくの休暇に、罰ゲームみたいなことしないといけないんだよ……」

「なにいってるよ、こんな美少女二人と過ごす休日なんて、ご褒美

みたいなもんじゃない？荷物持ちぐらい当然の対価でしょ」

何言ってんだこのオレンジ……

「……一応聞くんだけど、俺に拒否権って――「「ない（よ）！！」」――ソウデスカ」

はぁ……まぁ俺も買いたいものがあったし、時間つぶしにはいい……のか？

「わかったよ。じゃあ準備するからちょっと待っててくれ」

「わかった～」

「手早くね」

やれやれ……

――クラナガン――

「なぁ……まだ買うのか？」

俺の両手には今、大小２０の紙袋が下げられていた。

「あ！ねぇねぇティア、次はあのお店に行こうよ！」

「あの店？う～ん、私としてはその隣の店がに気なるんだけど……」

聞いちゃいないよこいつら……だいたいこんなに服ばっか買って…
…全部着る気か？

俺はため息をつきながら、前を歩く二人についていく……現在１１：
３０、まだまだ先は長そうだ。

「二人とも！そろそろお昼にしない？」

１５件ほど店をめぐり終わったところで、スバルが提案してきた…
…１３：２０……まぁお昼時だな。

「いいわよ。どこにする？」

「安いとこがいいんじゃないのか？どうせそこのブラックホール胃袋がアホ程食うんだし……」

「……そうね、ファミレスにしましょうか」

この辺他は高い店しかないしなぁ……

「スバル、金は貸さないから支払える程度にしろよ」

「うぅ……わかってるよぉ」

「い～や！ちゃんと言っておかないとお前は何度でもやるからな！この前だって――」

「あぁ！その話はやめて！すと～っぷ！！」

「……そこの二人、コントしてないでさっさと行くわよ……」

――ファミレス――

「ご注文はお決まりでしょうか？」

清楚な感じのウェイトレスが注文を取りに来る。

「ドリンク系以外全部！！」

「は？……え？」

スバルの元気のいい答えに、時の止まるウェイトレス。

「ああ、気にしないでください。こいつ大食いなんで、　後、その注文より先に俺のランチのBと……ティアは？」

「う～ん、じゃあ、私はカルボナーラ」

「その二つの注文を先に持ってきてください、後、ドリンクバー3つで」

「……は！？はい、かしこまりました」

俺の言葉に我に返り、頭を下げ戻っていくウェイトレス。

「だいたいみんな同じ反応だよな～、まぁ無理ないけど……」

「誰でも固まるわよ、いきなりメニュー全部なんて言われたら」

「あはは……そういえば、二人ともご飯終わったらどうする？」

「どうしようかしら？あらかた店も回ったしね……」

「それなら、俺が買いたいもんがあるんだが、どっか大きめの書店に行ってもいいか？」

「本買うの？……またあの失礼な本じゃないよね？」

……その本である。まぁ言ったら殴られるので言わない。

「いや、デバイスのＡＩの本だよ。外部機器との連動について書いてある本がほしくてな」

「ＡＩの本？」

俺の答えにティアが聞き返す。

「ああ、今のデバイスをインテリジェンスに改良したいんだが、なかなか難航してな……」

「ＡＩ自分で作ってるの！？すご～」

「簡単な奴だけだよ、俺の魔法はちょっと特殊だし、既存のじゃ相性悪くてな」

「アンタ……進む道間違えてるんじゃない？」

……俺もわりとそう思う。

ファミレスに入って４０分、俺とティアは昼食を終え、ファミリー席のテーブルを埋め尽くす料理を食べ続けてるスバル眺める。

「このペースだと、後１時間はかかるわね。コウタ、なんかある？」

「トランプなら有るが？」

「それでいいわ、適当になんかやってましょ」

「あいよ」

俺は腰のポーチからトランプを取り出し適当にシャッフルする。

「なんか賭けるか？」

「う～ん……じゃあ負けた方が、この後エイティーワンのアイスクリームおごりで」

エイティーワン……あちこちに支店のある有名なアイスチェーン店だ……え？聞いたことある？気のせいだろ。

「おっけ～じゃポーカーでいいか？１０勝した方が勝ちな、降りは２回で一勝分ってことで」

話ながらカードを配る。ちなみに、こんな感じの賭けは何度かやっている。

俺とティアの勝率は五分五分、ティアとスバルの勝率は９：１、俺とスバルは４：６くらいかな？（５割はわざと負けてるが）

俺の手は……テンハイのツーペア……まぁ初戦だし様子見かな。

「ごちそうさまでした！！」

スバルが元気よく手を合わせる。その様子を眺める俺とティア……

ちなみにポーカーの結果は８・１０で俺の負け。……くそぅ

「スバル～コウタが、エイティーワンのアイス奢ってくれるらしいわよ」

「ホント！？やった～♪」

「いや待て、確かにティアには負けたし奢る。でもスバルには……」

てかお前、今アホ程食ったばっかだろ！まだ食う気か！？

「ありがと～コウタ！！私あそこのアイス大好きなんだ♪」

「いや……その……」

「～♪」

「……」

本気で嬉しそうにしてるスバルを見て、何も言えなくなる……ティア後で覚えてろよ。

結局その後、ティアには2段、スバルは……7段のアイスを奢り、本屋に行ったり、今度は、小物の買い物に付き合わされたりしながら時間は過ぎ、俺は二人を隊舎まで送った後、約束している店へ急いだ。

「いつ見ても……すげえ店……」

俺の目の前には、見るからに高級店と言わんばかりの巨大な料亭があった。

入口で名前を告げ、部屋に案内してもらうと、そこには……

「おお！来たか、まってたぞコウタ！！」

渋い髭の生えた。見るからに豪気そうな中年の男性がいた。

「お久しぶりです。レジアスさん」

レジアス・ゲイズ中将……地上本部で多大な影響力を持つ人物、訓練校時代に馬鹿をやった俺を庇ってくれ、その後も色々世話を焼い

てくれている。賛否両論ある人だが、俺にとってはただの気のいいおっさんだ。

「あらあら、私の事は？」

レジアスさんの隣に座る、知的な感じの女性が話しかけてくる。

「忘れてないですよ、オーリスさんもお久しぶりです」

オーリス・ゲイズ三佐……レジアスさんの娘で副官、色々俺を心配してくれる優しい人だ。

「ほんと……久しぶりね。そう言えばＢランク試験受かったんですっけ？おめでとう」

「ありがとうございます」

「まぁ、挨拶はその辺で座れ座れ」

「はい」

促されるまま席に座り、話を始める。内容は主にここ最近の事、六課勧誘の件などだ。

「まったく！八神の目の付け所にも困ったもんだ！コウタはいずれワシの部隊に入れようと思っておったのに……」

「断固として断ります！」

けど……あれ？

「あんまり嫌な顔しませんね？……八神ニ佐のこと嫌ってると聞いてたんですが……」

局内では、割と有名な話だ。

「正直言ってな……別にそうでもない、あの娘が考えあって部隊を作ったのは知っておるしな……ただ、やはり本部内には教会の予言や、あの娘に反感を持っているものも多い。……残念な事ではあるが、ワシが表立っていい顔をするわけにもいかんよ」

そう言って少し辛そうな顔をするレジアスさん。

「中間管理職ってのも……大変ですねぇ」

「ははははまったくだ！中将と言っても、結局自由にできることなどたかが知れておるし、部下達の手前自由に動くことも出来ん、まったく窮屈な事だ」

「なにをいってるのかしら、今回の食事の件だって、かなり強引にスケジュールを調整したくせに……」

オーリスさんが呆れたように話す。……相当力技で抜けてきたんだろうなぁ……

「あはは、なんかすみません」

「構わんさ、ワシはこうしてお前を話すのが楽しいからな！」

ははははっと豪快に笑うレジアスさん……こうしてるとホントただのオジサンにしか見えない。

「本当にお父さんは、コウタの事がお気に入りね……」

「でも、色々していただいて、実際かなり助かってますよ……」

訓練学校から正式に局入りする際、親の居ない俺の身分保障をしてくれたのもレジアスさんだ……本当に俺、頭の上がらない人多いなぁ……

「そう言えば、なんか強力な兵器の開発をしているとか？」

「ああ……『アインヘリアル』の事か、まぁ鉄屑だ……」

「鉄屑って……」

アインヘリアル……地上本部が開発している、固定式の巨大魔力砲だ。

「あんなものは実際地上から攻められれば、防衛戦にならざるおえんしな、そんな物に予算を回すよりは、隊員の育成に力を入れた方が、よっぽど効率的なのに、上の連中はわかっとらんよ！」

「あれだけの威力の魔力砲台……抑止力にしても行き過ぎた力だわ」

世間的には、レジアスさん達が中心となっているアインヘリアルだ

が、実際のとこ本人達は否定的だ。

「じゃあ、なんで地上本部はそんな物を？」

「安心感がほしいんだろうな、これさえあれば大丈夫！絶対に安全！そんな言葉に人は弱いものだからな……人を守るのは兵器などではなく……人であるべきなんだがな」

忌々しげに話すレジアスさん。上と下と板挟みになって色々大変なんだろうな……

その後は、たわいのない話を続け夕食会はお開きとなった。

料亭から出る時、レジアスさんは思い出したように……

「コウタ、スバルちゃんとティアナちゃんは……元気にしているか？」

と聞いてきた。レジアスさんは、スバルとは直接の面識はないが、ティアナとは一度会っている。

「ええ、元気すぎて困るぐらいです。今日も買い物に付き合わされ

てクタクタですよ」

俺の言葉に、微笑みながらも、辛そうな顔をするレジアスさん。

「そうか……ティアナちゃんにはワシの監督が行きとどいてなかったせいで……スバルちゃんにはワシの犯した罪のせいで……辛い思いをさせてしまっているから……な」

「……」

「コウタ……あの二人を支えてやってくれ……頼んだぞ」

俺が返事に困っていると……真剣な顔になり俺に話しかけてくる。

「……はい！」

俺はそれに心からの言葉で返す。

「ただし、コウタも無理をしないようにね……貴方は友達の事になるとすぐ周りが見えなくなるんだから……」

オーリスさんは俺を心配し、少しあきれたような声で話す。

「あはは……気をつけます」

「うむ！ではまたなコウタ！新部隊でしっかり頑張れよ！」

「私達で力になれる事があればいつでも言ってね」

「はい！ありがとうございます」

二人に頭を下げ、その場を後にする。……あんな人たちが……家族だったらいいのにな……

――そして、機動六課への出向の日が来る――

第九話「休暇と食事？」（後書き）

私の作品における大きな原作変更点？

・レジアスとゼスト（ドゥーエも）生存
渋いおっさんキャラが結構好きなので、殺してしまうのはもったい。
そしてそもそもそういうシーンがうまく書ける自信がない。

・綺麗なレジアス
この作品のレジアスは、スカリエッティとは一度手を組むも、ゼストの件により決別し、現在は過去の行いを悔んでいる。といういう設定です。
しかし上層部及び評議会、自身の立場もあり思うように行動できずにいる。
とまぁこんな設定です。

今回は完全なオリジナル話…そして主人公は過去に馬鹿をやって取り押さえられています。

詳細は後に明かすとして、その行動がレジアスと知り合うきっかけとなり。レジアスが忘れていた志を思い出すきっかけになりました。

なのはシリーズには圧倒的にナイスミドルが足りない！…おっさんかっこいいよおっさん

次回、原作に戻りいよいよ機動六課が動き出します。

小説好きさん、指摘ありがとうございます。どうも私は勘違いで覚

えてることが多いみたいで、他にも間違いがありましたらまた教えてください。

第十話「稼働と出会い？」（前書き）

今回からアバンタイトル付けてみました～

第十話「稼働と出会い？」

試験、勧誘、そして再会……

かつて望んだのは平穏……

今望むのは、自分の変化……

自分自身は変わらないまま、状況だけは速足に変わっていく……

俺は、この新しい場所で何かを見つけられるのだろうか？

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～孤独の歌～始まります。

――機動六課・本部隊社――

今日からいよいよ新部隊のスタートとなる。現在、簡単なオリエンテーションを終えた俺達は、全員集められ八神ニ佐……もとい機動六課課長の挨拶を待っていた。

一つ疑問に思うのは、男女比率である。女性隊員に比べ男性隊員が少なすぎる。フォワード陣に至っては俺のほかにあと一人だけと聞いている。何か理由があるんだろうか？……まぁ俺が考えてもしょうがないか……

少し思案していると、八神部隊長が一歩前へ出る。

「機動六課課長。そして、この本部隊社の本部隊長、八神はやてです。」

皆と一緒に拍手をするが……変な違和感を感じ目を切り替える。

なんだ……あれ？

俺の目に写ったのは、八神課長だけでなく……隊長格全員に見える……魔力を押えこむ輪のようなもの。

何人かは分からないが、なのはさん、フェイトさん、八神課長の三人は依然見ているのでわかる。魔力がかなり抑え込まれている。以前見た時は驚愕するほどの魔力だったのに……今はAランクより少し上程度に見える。あれ……いったい何なんだろう？

それにあの……狼？使い魔なのかな？俺より魔力大きいんですが……

「――以上ここまで、機動六課課長および部隊長、八神はやてでした！」

考えてる内に、八神部隊長の挨拶が終わる。やっべ……全然聞いてなかった……

周りに少し遅れて慌てて拍手をする。……気が緩んでるのかな？俺……さっきから考え事ばっかだ。

フェイトｓｉｄｅ

――ヘリポート付近・通路――

ヘリポートへと続く通路を、シグナムと一緒に歩いている。

「シグナム、ホント久しぶりです」

「ああテスタロッサ。……直接会うのは半年振りか」

「はい、同じ部隊になるのは初めてですね。どうぞよろしくお願いします」

「こちらのセリフだ。だいたいお前は私の直属の上司だぞ」

「それがまた……なんとも、落ち着かないんですが……」

シグナムの言葉に苦笑しながら答える。絶対私よりシグナムの方が

隊長向きだよ。

「上司と部下だからな、『テスタロッサ』に『お前』呼ばわりもよくないか……敬語で喋った方がいいか？」

「あぅ……そういう意地悪はやめてください……いいですよ、テスタロッサで、お前で」

「ふっ……そうさせてもらおう」

私が慌てて返すとシグナムは、冗談だと言わんばかりに笑う。うぅ……絶対わざとだ……

フェイトｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――訓練スペース付近・通路――

「残りのフォワード二人って、どんな人たちなんだろうね？楽しみだね！」

「アンタ達みたいに手のかかる奴じゃないことを祈るわ」

俺達は今、残りのフォワードと合流予定の場所へ向かっていた。ちなみに俺はフェイトさんが隊長を務める『ライトニング分隊』に所属することになった。コールサインはライトニング０５。

スバル達と分けられるのは意外だったが、そちらの分隊にはセンターガードがいないらしく、前線指揮を、というわけで俺が回されたらしい。……たぶんあの子たちだよな？

「たぶん、右端辺りに居た子供二人がそうだと思うぜ？」

魔力的に……

「えぇ！あの子たちが！？……まだちっさかったよ？」

「……だからだよ。あの歳でバックヤード要員ってのはないだろ？だったらフォワードじゃないか？」

目の事は言わない。俺のこの目については書類等にも書いてないし、知ってる人はいない。……なぜか？……いや特に今のとこ使い道も思いつかない能力なのに、レアスキル持ちってカウントされたくなかったので言ってない。

「正解みたいね……あの子達でしょ」

ティアの言葉に前を向くと、姿勢よく二人の子供が立っていた。

「えと……君達が残りのフォワードかな？」

スバルが二人に問いかける。

「はい！エリオ・モンディアル三等陸士、１０歳であります！コールサインはライトニング０３で、ポジションはガードウィングです！よろしくお願いします！」

赤髪の少年が、敬礼と共に元気よく答える。

「キャロ・ル・ルシエ三等陸士であります！モンディアル三士と同じく１０歳であります！コールサインはライトニング０４で、ポジションはフルバックです！よろしくお願いします！こちらは私の竜でフリードと言います！共々よろしくお願いいたします！」

「キュクル～（よろしく～）」

エリオに続き、ピンクの髪をした少女もとても１０歳とは思えない丁寧な挨拶をする。……うん？今その竜の言葉が聞こえた気が……あれ？っと、挨拶返さないと……

「スバル・ナカジマニ等陸士。１５歳、コールサインはスターズ０３、ポジションはフロントアタッカーだよ！よろしくね」

俺がまた考え事をしている間にスバルが先に挨拶をする。

「ティアナ・ランスターニ等陸士。１６歳、コールサインはスターズ０４、ポジションはセンターガードよ」

スバルに続きティアが簡潔に挨拶をする。

「コウタ・エルザードニ等陸士。１５歳、コールサインはライトニング０５、ポジションはオールラウンダー、二人と同じ分隊になるから、よろしくな」

ティアに続き俺も挨拶をする。

「「よろしくお願いします！！」」

「キュクル～（よろしく～）」

二人は敬礼をし返す……てかやっぱ聞こえる！？

「えと……キャロだったよね？ちょっと聞きたいことがあるんだけど……」

「はい！なんでありましょうか！エルザード二士！」

……う、う～ん。

「質問の前に、二人とも俺の事はコウタでかまわないよ？後、話しやすい口調でいいよ？」

「「え？でも……」」

俺の言葉に二人が少し詰まる。

「同じ新人フォワードなんだし、遠慮はいらないって」

「そうだよ！私の事もスバルでいいからね！」

「ええ、階級も大して変わらないんだから気にしなくていいわよ」

俺の言葉にスバルとティアも同調する。

「「わかりました！」」

うん……まだちょっと硬いな……まぁ徐々にでいいか

「それでコウタさん、質問と言うのは？」

「ああ、うんフリードの事なんだけど……その竜って人の言葉話すの？」

「え？……いえ、賢い子なんで、こちらの言葉は理解してるはずですが……人語を話したりは出来ないです」

俺の質問にキャロが応えてくれるが……うん？どうなってるんだ……

「コウタ……なにいってるの？さっきからキュクルっとしか鳴いてないじゃん」

やっぱそうなのか……

「……悪い、竜って初めて見てな……もしかしたらって」

「ふ～ん以外とコウタって――痛い！」

なんか失礼な事を言おうとしたスバルをはたいとく……なんで聞こえるんだろ？

「まあ、自己紹介も済んだんだし、早くいきましょ？なのはさん待ってるわよ」

ティガが声をかけてくる。

「訓練か……気が重いなぁ……さぼっちゃ――駄目ですねわかりました」

俺の言葉にティアが拳を作る……バリアジャケット越しであのダメージ、生身で受けたら死ぬぞ……

「じゃ！皆いっくよ～」

「「はい！」」

スバルが歩きだしそれにティア、エリオ、キャロの順番で続く……フリードは俺の隣に来て。

「キュキュク、キュイキュイ？（コウタさんは私の言葉がわかるの？）」

「……なぜかわかるんだよ……まぁ、考えてもしょうがないか、これからよろしくなフリード」

「キュイ！（はい！）」

先を歩く四人に追いつくために、少し速足で歩きだす……う～んどうなってんだ？

第十話「稼働と出会い？」（後書き）

訓練が…始って…ないだと…

次回が長くなる予定なので今回は少し短めです。

後々明かされる予定ですが、フリードの言葉がわかるのは主人公のレアスキルに関係しています。

リスカさん、ｙｕｋｉさん感想ありがとうございます。これからも楽しんでいただけるよう頑張りたいと思います。

第十一話「訓練と復習？？」（前書き）

ちょうど投稿開始から1週間～

第十一話「訓練と復習？？」

動き出す機動六課……

そして同じフォワードの２人との出会い……

それぞれ初訓練に向け期待と不安を募らせながら……

訓練の始まりを待つ。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～孤独の歌～始まります。

――機動六課訓練スペース――

「今返したデバイスには、データ記録用のチップが入っているから。大切に扱ってね。それとメカニックのシャーリーから一言」

なのはさんと合流して、訓練スペースまで来た俺達、訓練着に着替え、ウォーミングアップのランニングを終えた俺達は、なのはさんともう一人、眼鏡をかけた茶髪のロングヘアーの女性の前に一列に並び説明を受けていた。

「え～メカニックデザイナー兼機動六課通信主任のシャリオ・フィニーノ一等陸士です。皆はシャーリーと呼ぶので、よかったらそう呼んでね。皆のデバイスを改良したり、調整したりもするので時々訓練を見せてもらったりします。……あ、デバイスについての相談があったら遠慮なく言ってね。」

「「「「「はい！」」」」」

シャーリーさんの挨拶にそろって返事をする俺達。……デバイスマイスターか、今度ＡＩプログラムの件で相談してみようかな……

「それじゃあ、さっそく訓練に入ろうか」

「は、はい……」

「ここで……ですか？」

なのはさんの言葉にスバルとティアが返す。

確かに今、俺達の前には海に浮かぶ小さな人工島みたいな物しかない。あそこで訓練するにしても障害物も何もないな……

「シャーリー？」

「は～い」

なのはさんの言葉に、シャーリーさんが端末を展開する。

「六課自慢の訓練スペース、なのはさん完全監修の陸戦用空間シミュレーター……ステージセット！」

端末の操作が終わると、俺達の目の前に小さな街が現れた。……すげぇ

――訓練スペース付近――

訓練スペースを静かに見つめる赤髪の少女に、シグナムが近づく。

「ヴィータ……ここにいたのか」

「……シグナム」

「新人達、さっそくやっているようだな」

「……ああ」

ヴィータと呼ばれた少女は、見た目に合わぬ落ち着いた様子で返す。

「お前は、参加しないのか？」

「五人とも、まだよちよち歩きのヒヨッコだ。私が教導を手伝うのはもうちょっと先だな……」

「そうか」

シグナムの問いかけに、ヴィータは新人達を見つめながら答える。
そして付け足すように、

「それに自分の訓練もしたいしさ。同じ分隊だからな。私は空でなのはを守ってやらなきゃならねぇ」

「……頼むぞ」

ヴィータの言葉を受け、シグナムは何かを思い出すように前を見た。

――訓練スペース――

今俺達は、訓練スペースの設定中ということで体をほぐしながら待機していた。

スバルはエリオと話し、ティアはキャロと話している……あぶれた俺はフリードト話していた。

「――キュル、キュイキュキュイ！（って感じの攻撃だよ！）」

「へぇ……炎か、それは強力そうだな。さすが竜って感じだね」

「キュックイ！（えっへん！）」

ブラストフレアという技の説明を受けて、俺が感心する。するとフリードは、俺の頭の上で体を反る。……かわいいな、こいつ。

どうやら言葉がわかるのがよほど嬉しいらしく、完全に懐かれ、さっきからずっとフリードは俺の頭の上に乗っている。

「よし！準備できた。皆～はじめるよ」

なのはさんの指示に従い、俺達はジミュレーターの町へ移動する……すげぇこれ触れるよ、立体映像とかじゃないんだ……

俺達は簡単な作戦会議をして位置に就く、今回は初めと言うことで俺はセンターガードとして動く。

『よしっと、皆聞こえる？』

「「「「「はい！」」」」」

『じゃ、さっそくターゲットを出していこうか、まず軽く１０体からね』

『動作レベルＣ、攻撃制度はＤってとこですかね？』

『うん』

『わたし達の仕事は、捜索指定ロストロギアの保守管理、その目的の為に私達が戦うことになる相手は……これ！！』

なのはさんとシャーリーさんの声が聞こえ、目の前にターゲットが１０体現れる。

『自立行動型の魔導機械。これは近づくと攻撃してくるタイプね。攻撃は結構鋭いよ！』

シャーリーさんがターゲットについて説明をしてくれる。

魔導機械……確かに見てみると魔力が見える。……あの周りの膜みたいなのはなんだろう？バリア？

『では、第１回模擬戦訓練。ミッション目的、行動するターゲットの破壊又は捕獲。１５分以内！』

「「「「「はい！」」」」」

『それではミッション……スタート！』

なのはさんの開始の合図と共に、ターゲットが一斉に動き出す！

同時に、スバルとエリオはターゲットを追い、ティアとキャロは右

のビルへ、俺はティア達が狙えない位置をカバーするため左のビルへと登る。

「はぁあああ！！」

スバルが掛け声とともに跳び、リボルバーシュートを放つ！が、ターゲットは素早い動きで散開し攻撃をかわす。

「……え、何これ！動き早！？」

その先に待ち構えていたエリオが、魔力の斬撃を飛ばすが、それも簡単にかわされる。

「だめだ、ふわふわ避けられて……当たらない……」

（前衛二人！分散しすぎ！ちょっとは後ろの事を考えて！）

（攻撃も分散しすぎだ！連携して狙え！）

二人に俺とティアが念話で注意を叫ぶ！

（あ、はい！）

（ごめん！）

ターゲットが先の進路で合流したのを確認し、俺とティアが射撃の態勢に入る！

「キャロ……威力強化お願い！」

「はい！ケリュケイオン！」

≪ブーストアップ・バレットパワー≫

ティアの声に応え、キャロがブースト魔法を発動する！……威力強化がほしいのはむしろこっちだよ……

と思ったらちゃっかりこちらも強化してくれている。キャロ……すげえな、補助魔導師はあんま見たことなかったけど、二人に同時にかけれるのか……

（コウタ！）

ティアから念話が届く、タイミングを指示しろってことか……

俺はすぐ指を一本立て、それを降ろす！

「「シュート！」」

俺とティアの声が重なり、ターゲットに魔法弾が向かう……が！

ティアの攻撃はターゲットに当たる直前でかき消える！……俺の攻撃はサイズが小さくなり……コツンといった感じで弾かれる……今のは……

「バリア！？」

「違います！……フィールド系？」

「魔力が消された！？」

……いや、俺の弾が当たったってことは……魔力を消滅させるようなものじゃないはず……

『そう、ガジェットドローンにはちょっとやっかいな性質があるの。【アンチ・マギリング・フィールド】……通称ＡＭＦ。効果範囲内の魔力結合を解いて魔法を無効化すから、普通の射撃は通用しない』

……なるほど、俺の弾が消えなかったのは、魔力密度が高く、サイズが小さいためか……

『……それに』

「あ！くそ……こ、この！」

高く跳びあがったターゲットを追うため、スバルがウィングロードを……やばい！

「スバル！冷静になれ！」

俺は即座に魔法の発動の準備をする。ターゲットが、魔力結合を解くってことは……

「スバル！馬鹿！危ない！」

ティアも同じ事に気付いたのか慌ててスバルを止めようとするが……

『……ＡＭＦを全開にされると……飛翔や足場作り。移動系魔法の発動も困難になる』

「うぇ！？うわぁわわわ！？！？」

ウィングロードが先端から消え始める！？……間に合えよ……

「きゃぁあああ～！？」

スバルがウィングロードから落下する瞬間！

「≪ホールディングネット≫！！」

ギリギリ間に合った俺の魔法により、スバルはビルに当たる寸前でネットに収まる。

（大丈夫か！スバル！）

（う、うん……ありがと、コウタ）

まったく……

『まぁ、訓練では皆のデバイスにちょっと細工をして、擬似的に再現しているだけなんだけどね、でも現物からデータを取ってるし、かなり本物に近いよ～』

シャーリーさんが嬉しそうに説明する。

スバルの無事を確認した俺は、作戦を決めるためティアの居るビルへと移る。

「どうする？ティア」

「う～ん……キャロ、手持ちの魔法と……フリードの技で、何とか出来そうなのある？」

「……試してみたいのが、いくつか……」

「……あたしもある、コウタは？」

「俺の弾は一応、当たるとこまでは行くみたいだからな……一番威力のあるのをぶつけてみる」

（スバル、エリオ……先行して敵の足どめしてもらいたい。可能なら固めて数を減らしてくれるとありがたい）

方向性の決まったところで、俺は前衛の二人に念話を飛ばす。

（何か手が浮かんだの？）

（それぞれ……ね、いけるかしら？二人とも）

（おっけ～任せて！）

（や、やってみます！）

（よし、頼んだぞ二人とも……）

念話を切り、俺も準備を開始する。

「……カートリッジ……フルロード」

――訓練スペース・ビル屋上――

ビルの屋上で訓練を見守る二人。

「へぇ……皆よく走りますね」

「危なっかしくってドキドキだけどね……デバイスのデータは採れそう？」

「いいのが採れてます！五機とも良い子に仕上げますよ～、ただ……」

「うん？」

「スバルとコウタのデバイスについては、難しくて……」

「スバルは先天性の魔法の解析に時間がかかるのはしょうがないとして……コウタのは？」

「オールラウンダーって特性上、どうしても難しくなりますね～」

苦笑しながらシャーリーが応える。

「なるほど……じゃあコウタに直接相談してみたらどうかな？あの

子デバイスについてかなり詳しいし、自分なりに改良案とか考えてるかも？」

「なるほど……それはいい考えですね」

――訓練スペース――

さて、チャージは完了。後はタイミングか……

「いくよ！ストラーダ！カートリッジロード！」

エリオが橋を破壊し2体のターゲットを押しつぶす。だが、残り2体は上空へと逃げる……そこへ上空からスバルが、攻撃する！

「潰れてろ！！」

が、やはり魔力による身体強化も無効化されるためか、大きなダメージはない……

「それなら！」

後ろから迫るターゲットに馬乗りになり、リボルバーナックルを叩きこむ！

「うりゃぁあああ！」

そのままリボルバーナックルの回転力を利用し、拳を深く突き刺し破壊する！……残りは7体！

「連続……行きます！フリード！ブラストフレア！」

フリードが、吐いた炎は2体のターゲットに向かい……高熱によりショートさせ動きを止める！

「我が求めるは、戒める物、捕える物、言の葉に応えよ……鋼鉄の縛鎖……錬鉄召喚！≪アルケミックチェーン≫！」

キャロの詠唱と共に魔法陣から現れた鎖は、動きの止まったターゲット2体と、上空へと逃げようとしたターゲット1体を捕獲する！……残り四体！

俺はキャロの居るビルの真下で、炎から逃れた2体を追う！

「フリード！ターゲットの前方にブラストフレア！」

「キュクイ～！（了解～！）」

「えぇぇ！何で言うこと聞くのフリード！？」

俺の指示に、フリードが再び炎を吐く……キャロはフリードが俺の指示に従ったのに驚いている。

進路を炎で塞がれたターゲットは、右手にある一直線の道に逃げる。

「直線状に並んでくれなきゃ……同時破壊できないしな……俺」

俺はターゲットに狙いを定め、2体のターゲットが重なった瞬間！

「≪ソニックバレット≫！！」

ソニックバレット……加速のみを最大まで強化した、現在俺の持つ最高威力の魔法だ。

圧縮された弾は、ＡＭＦで多少威力を弱めるも、その圧倒的な弾速で手前のターゲットを貫き、少し遅れて爆発する！……だが、奥に居たターゲットは大きくへこみはしている物の、破壊には至ってない。

「ッチ！……≪ソニックムーブ≫」

舌打ちと共に、へこんだダメージで動きの鈍っているターゲッドを

逃さないように加速魔法を発動させ、銃剣を前に構え突撃する。

ターゲットの直前でソニックムーブはかき消されるが、加速した銃剣はそのままターゲットを貫く！

銃剣を抜き、ターゲットから離れると図ったようなタイミングでターゲットは爆発する……これで残り2体！

（スバル！私が上からしとめるから！そのまま追ってて！）

ティアの念話が聞こえ、道路の方に目をやると、残った2体のターゲットに向かってティアが射撃の態勢に入っていた。

「攻撃用の媒体を無効化されないように……膜状のバリアでくるむ！フィールドを突き抜けるまで外殻のバリアがもてば……本命の弾はターゲットに届く！！」

ティアは、生成した魔力弾にさらに上から魔力の膜をかぶせていた……おいおい、それは俺達のランクよりかなり上の魔法だろ……

――訓練スペース・屋上――

「魔法弾!?ＡＭＦがある上、コウタみたいに圧縮して密度を高めてるわけでもないのに……」

≪いいえ、通用する方法があります≫

シャーリーの疑問にレイジングハートが応える。

「うん……フィールド系の防御を突き抜ける多重弾殻射撃。……ＡＡランクのスキルなんだけどね」

「ＡＡランク!?」

――訓練スペース――

「固まれ……固まれ……」

ティアの言葉と共に弾を外殻が固め発射の準備が整った!

「≪ヴァリアブルシュート≫!!」

放たれたオレンジ色の魔法弾は、１体ターゲットを貫き……そのま

ま威力を落とすことなく、最後の一体を破壊する！

（すげぇなティア……よくあんな高度な魔法を……）

（ティア～ナイスだよ！やったね♪　さっすが～！）

（……二人とも……うるさい……これぐらい……当然よ……）

相当消耗してるな……まぁでも、これでターゲット全滅完了……だな、訓練は終わりじゃないだろうが……

――その後、少しの休憩をはさみ訓練は夕方まで続いた――

第十一話「訓練と復習？？」（後書き）

うん…わかってた…一話じゃ終わんないことぐらい…Ｏｒｚ

戦闘シーン…難しい…でもこっからどんどん増えるんだよなぁ…

つ、次で何とか…

ｙｕｋｉさんまたまた感想ありがとうございます。頑張ります。

Ｆさん誤字指摘ありがとうございました。他にも質問等があればいくらでもどうぞ…ちゃんと答えられるかは…あれ…ですが…

第十二話「訓練と復習？？」（前書き）

今現在、年末キャンペーンでＳｔｒｉｋｅｒＳのＤＶＤをレンタルして見直してます…あれ？こんな展開だったっけって思うのが何か所かｗ

第十二話「訓練と復習？？」

機動六課での初めての訓練……

ＡＭＦを搭載した魔導機械との戦闘……

皆疲れ、日は沈んでいった。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～孤独の歌～始まります。

――機動六課・施設内――

「「「「はぁ……はぁ……」」」」

「お～い皆、水持ってきたぞ」

俺は、疲れた様子で座りこむ四人に水を渡す。

「……ありがと……コウタ……」

「……てか……なんで……アンタ……そんな元気……なのよ」

「「……ありがとう……ございます」」

「いや……疲れてるよ。水取ってくるぐらいの余力はあるだけだ……」

ティアの問いに答えながら、俺も座り水を飲む……普通初日にここまでやるか？

「皆、立てるか？寝るなら隊舎に戻ってからにしようぜ……後フリード、重い降りろ」

「キュイ！（やだ！）」

立ち上がり、頭の上のフリードに声をかけるが、フリードは即答する……やだってお前……

「「「「……」」」」

その様子に、突っ込む気力もないといわんばかりに四人は無言で立ち上がり歩きだす。

四人が自室に戻ったのを確認して、俺は静かに隊舎を出て、人気の

ない場所まで移動する。

――林付近――

隊舎の近くにある林まで移動し、辺りに人がいないのを確認してから座る。

そして目を閉じゆっくりとイメージする。

……敵は今日初めに戦ったガジェットドローン……数は１０……味方はなし……

俺はデバイスを構え、そのままガジェットの中心に魔法弾を撃ち込むが、素早い動きで散開されかわされる……

即座にソニックムーブを発動！先ほど魔法弾を撃ち込んだ位置まで移動する！そこで即座にブリッツアクションで足を組みかえ、散ったガジェットのうち一体に向かって再び加速！

加速した斬撃で、1体のガジェットを破壊！振り向かないままサイドにステップする！

先ほどまで俺がいた地点を残りのガジェットのレーザーがえぐる！音を確認し、ポーチからいくつかの小さな鉄の玉を取り出し、音のした方に振り向く！

その鉄の玉を術式によって加速し発射する！一発目！へこみはするが破壊には至らない……二発目！ヒビが入りガジェットの動きが止まる……三発目！動きの止まったガジェットを破壊する！

スクラップバレット……小型の物体を加速して打ち出す魔法……まぁ本来別の目的で作ったんだけどＡＭＦには効果的だ。

……後、８体……

四方からレーザーが迫る！それをステップで側しながら、残りの玉を発射！正面の2体に当たるが……破壊できない……瞬間！視線の端にこちらを狙うガジェットが写る！？発射後の硬直で少し回避行動に手間取る！

紙一重でそれをかわすも……目も前の2体からもビームが撃たれ……回避できずに直撃する……

「……だめか～」

イメージトレーニングを終え目を開く、あの数を相手にするには切り替えが遅いか……もっと瞬発力を上げて即座に次の行動に移れるようにしないと……

今日の課題は決まった……俺は起き上がり地面に十字の模様を描き、その中心から変則的な反復横とびを始める。

フェイトｓｉｄｅ

私は地上本部から戻り、自室に向かっていた……隊舎が見えた辺りで、足音の様な物が聞こえる。

「……足音？……こんな時間に……」

不審に思った私は、バルディッシュを手に持ち……気配を殺して音のする方へ向かう。

すると……そこには……

ステップの練習だろうか、地面に書かれた十字を変則的に跳ぶコウタが居た。

「コウタ！？」

「え？……フェイトさん！？」

思わず声を上げた私に、コウタは驚いたように振り返る。

「どうしたんですか？フェイトさん……こんな時間に」

「それは……私のセリフだよ。コウタこそなにをやっているの？」

今日は訓練初日のはず……フォワードの子たちはみんな疲れて寝ているって聞いたのに……

「俺は……えと、なんていうか習慣みたいなものでして」

「習慣？」

「ええ、訓練校時代から一日が終わる前に、その日の事を復習して、不足部分のトレーニングをするっていう感じに続けてて、どうもこれをしないと寝つきが悪くて……」

コウタの答えに少し驚く、

「それって……毎日追加でトレーニングしてるってこと？」

「いや……そこまで大層なもんじゃないですよ。なんていうか……ほら、俺はオールラウンダーじゃないですか」

「う、うん」

「オールラウンダーとして、スバルやティアみたいな専属ポジションの人に付いていくには、どうしたって普通のトレーニングだけじゃ足りませんしね……」

私は、思い違いをしていたのかもしれない。

「ずっと……一人で？」

幼少時代の様子や、訓練校のデータを見て、この子はなんでも器用にこなす天才だと思ってた。、

「え、ええ、まぁ」

「……無理はしてない？」

でも、本当はずっと影で努力してたんだ……一人っきりで、

「そこは大丈夫ですよ。ちゃんと次の日に影響が出ない程度で止めておくので」

「そっか……ねぇ、終わるまで見ててもいいかな？少しぐらいならアドバイスも出来ると思うし」

私は、この子の事……なにも知らないんだなって思った。

「それは……かまいませんが、フェイトさんは時間とか大丈夫なんですか？忙しいんじゃ……」

「大丈夫だよ……それに、私はライトニング分隊の隊長なんだから！隊員が無茶しないようにしっかり見はっとかないとね」

私は、コウタの事をもっと知りたかった。だって……

「だ、大丈夫ですよ。ある程度で切り上げますし……」

「でも、心配だから……だめ？」

「わ、……わかりました。でも見ててもつまらないですよ？」

雰囲気や見た目は、あの頃と比べて随分変わった……でも、

「大丈夫！それじゃあここで見せてもらうね」

寂しげな目は、あの頃のままだったから……

その後、コウタは2時間ほどトレーニングを続け、時刻が0時になった辺りで、私にお礼を言い隊舎へ戻って行った。

訓練校時代から……って言ってたよね。4年以上も……一人で毎日？

……コウタはいったい、何のために頑張ってるの？昇進やランクアップには興味がないって言ってたよね？

でも、こんな努力……何の目的もなく出来るものなのかな？

答えは出ないまま、私はなのはの待つ自室へと向かう。

このことは他の人には言わない。たぶんコウタはそれを望まないから……また、様子を見にこよう……

――なんでかな？……まるで、一人でいることを望んでるみたいに見えるのは――

第十二話「訓練と復習？？」（後書き）

主人公の事を一つ知ったフェイト。

あれ？おかしい…私の当初の予定ではメインヒロインはスバルのはずだったのに…なんかスバルの影は薄くて、フェイトがヒロインやってるような…あれ？

次回、いよいよ主人公のデバイスが登場…するかな？

ｙｕｋｉさんいつも感想ありがとうございます。

第十三話「開発と双子座？」（前書き）

この話は、本編では詳細のなかった入隊後～ファーストアラートの間辺りの話です。

第十三話「開発と双子座？」

機動六課に来てもうすぐ一週間……

新しい環境にも皆慣れ始めていた……

まだ出動は一度もなく、訓練の毎日……

皆、これから先の実戦に備え力をつけていっていた。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～孤独の歌～始まります。

――機動六課・食堂――

六課に来てから今日で丁度一週間になる。

この一週間でだいたいの流れはわかった。

一日中訓練⇒一日中訓練⇒午前中だけ訓練⇒一日訓練⇒一日訓練⇒午前中だけ訓練⇒訓練なしって感じだ。

いくら前衛部隊と言っても、報告書等のデスクワークも存在するので、週に2日ほど午前中だけ訓練をして午後をデスクワークに当てる。

訓練なしの日は、主に自由行動だが24時間勤務のため、外出などは出来ない。（部隊長の許可があるなら別だが）……後にちゃんとした休日に変わるらしい？

そして、今日は訓練のない日。今俺達は揃って朝食をとっていた。

「……」

目の前に積まれているトーストの山……もといトーストの乗っていた皿の山を見つめ言葉を失う。

スバルがもともと大食いなのは分かっていたが、エリオも俺の3倍ぐらいの量を平気で食べる。……大丈夫なのか機動六課の経費……

「キュイ、キュイ（ねぇねぇ）」

「うん？どうしたフリード」

「……」

俺の頭の上でフリードが何かを言う。俺の頭の上がお気に入りらしく、フォワードで集まる時などはたいがい乗っている。それに対しキャロは、なぜかキラキラした目で俺を見ている。

「キュクイ、キュ～クイ（それ、ちょ～だい）」

そんなことはお構いなしにフリードは、俺の皿のベーコンを見る。

「ああ……それはいいけど頭の上ではやめろ、一度降りろ」

「キュ～イ（は～い）」

俺の言葉にフリードは頭から降り、皿の横に着地する。俺はベーコンをフォークで刺しフリードの顔まで持って行ってやる。

「ほら」

「キュ～ク♪――キュクル♪（あ～ん♪――おいしい♪）」

俺の差し出したベーコンをおいしそうに食べるフリード……やっぱ可愛いなこいつ。てか六課に来てスバルとティア以外だとこいつと一番話してるかもしれない。……俺が話すんじゃなく一方的に話されてる人ならもう一人いるが……

「アンタ等……ホント仲いいわね？」

「おかげで、俺の首は筋肉痛だよ……」

頭に戻ったフリードを見ながら、ティアに応える。

「――あ、あの！」

キャロが何か意を決したように声をかけてくる。やばい仲良くしすぎたか……自分の竜が他人にばかり懐いてたら不機嫌にもなるよな？

「コウタさんって……その……違ってたらごめんなさい……フリードの言葉がわかるんですか？」

あれ？

「あ、ああ……えと、なんとなくは……だけど」

とりあえずお茶を濁す。

「やっぱり！……すごいですコウタさん！」

「すごいって？……なにが？」

「フリードの言葉がわかるのがですよ！きっとコウタさんには召喚師の素質があるんですよ！」

嬉しそうに話すキャロ……こんなテンション高いとこ初めて見たよ。

「もぐ……そういえば……むしゃ……コウタ……ぱく……って」

「おいスバル、話すか食べるかどっちかにしろ」

「ごっくん――コウタってさ」

馬鹿な……喋る方を優先しやがった。

「色んな魔法使えるけど……召喚魔法も使えるの？」

「試したことない……ってか、召喚魔導師はそもそも珍しいし、俺達の訓練校の授業でもさわりしか習わなかっただろ？もっと詳しく教えてくれてたら試したかもしれないけどな」

「……コウタ、座学の授業いつも寝てたよね？」

「……ぐっ、いあ……ほらでもちゃんとテストの成績は……」

「私より下だったよね～♪」

ニヤニヤ腹の立つ笑い顔でこっちを見るスバル……こいつ……

「ほぅ……いい度胸だスバル……そういうつもりなら俺にも考えがある」

「な……なに？」

俺の言葉に笑うのをやめ聞き返すスバル……

「これからデスクワークは一人でやれよ」

「――！？！？あぁああ！ごめん！ごめんなさい！コウタ、お願い！それだけは……」

慌てた様子で俺の肩を持ち、平謝りするスバル……なんでデスクワーク苦手なんだよ訓練学校主席……

「知らんな……成績優秀なスバルさんなら問題なくこなせるだろ？」

「うぅ……ごめんってコウタ……許してよ～、私一人じゃその日のうちに終わらないもん……」

「アンタ等……エリオとキャロが固まってるでしょ……」

やば、二人の事すっかり忘れてた。……エリオはずっと無言でトースト食べてたけど……

「まぁ、ともかく試した事がないから使えるかどうかは分からないってことだよ……てかただでさえ希少技能なんだし、使えないだろ？」

「きっと使えますよ！」

話を締めようとした俺に、キャロが声を上げる。ホントテンション高いな今日は……

「あ、ああ……じゃあ、今度簡単な奴でも教えてくれよキャロ」

「わ、私がですか？」

「いや……だって俺ほかに召喚魔導師知らないし」

「わ、分かりました……上手く教えられないかもしれませんが……私でよければ」

「あ！私にも教えて！」

スバルが反応して手を上げる。

「……お前は無理だと思う……」

「なんで！？」

「皆さんに教えますよ、誰が使えるかなんて分からないですしね！」

「じゃあ、今日は訓練もないし、腹がこなれたら皆でやってみるか？」

俺の言葉に皆頷く、なんとなくだけど……スバルは無理だろ……後エリオ、忘れてないから寂しげな眼でこっちみんな。

――林――

キャロに簡単な、無機物召喚と初歩的な無機物操作を教わって、順番に試す。

スバル、ティア、エリオは発動できず……俺の番

「我が求めるは、戒める物、捕える物、言の葉に応えよ……鋼鉄の

縛鎖……錬鉄召喚！≪アルケミックチェーン≫！」

俺の詠唱に反応し、地面に描かれた魔法陣から鎖が飛び出す！……できたよ

だが！……鎖はそのまま『真っ直ぐ』上に伸び『何も捕えず』重力に従って落下した……

そっか……召喚魔法って遠隔操作……だったな……

「……」

無言で後ろを振り返ると……

「こ、コウタ……す……ごいよ……ぷっ……やっぱ……器用だね」

肩を震わせながら喋るスバル……

「ホントね……あはは……召喚まで……使えちゃうなんて……ホント……驚きだわ……ふふ」

途切れ途切れに話すティア……

「はは……初めは……上手く……いかないのも……しょうがないですよ……」

明らかになにかを噛み殺しながら言うエリオ……

「そう……ですよ……召喚までは……できたんですから……自然落下……するのは……初めて見ましたけど……」

フォローするようなことを言いながら、腹を押えてうずくまるキャロ……

四人とも後ろ向きで……

「お前ら……人と話す時は顔見て話せって教わらなかったか？」

「だって……っ！」

何かを言いかけて、口を押えるスバル……

「……笑えよ……」

気を使われる方が、逆にいたたまれない……

「「「「あはははははは！！」」」」

……俺の言葉を聞いた瞬間、全員はじけるように、笑い始めた……

こいつら……

「キュキュクク、キュキュクル！（コウタさん、元気出して！）」

「ありがと……フリード、俺の味方はお前だけだよ……」

林には四人の笑い声がしばらく響いていた……

――デバイスルーム――

「召喚魔法の補助機能も付けてください！！」

「ひぃ！お、落ち着いて……コウタ……いったい何があったの？」

今俺は、デバイスルームでシャーリーさんに詰め寄っていた。

「……実は……」

「――ということが」

「そう……なるほどね、でも召喚魔法も使えるのはすごい事よ」

あれ……意外とちゃんと聞いてくれた。そう思ってシャーリーさんの方を向くと……

「なぜ……頬を……つねっているんですか？」

「き、気にしないで」

……お前もか

「まぁ……それは置いといて、俺のデバイスはどうでしょうか？」

二日目の訓練が終わった後で、俺はシャーリーさんに呼ばれ以後、新デバイスの製作を手伝っている……といっても、主に自分のデバイスについて意見を言うぐらいだが……

「そ、そうね……コウタが提供してくれたＡＩの基礎プログラムもしっかりしていたし、コンセプトもまとまったから……うまくいきそうよ」

「そうですか、よかった……」

「ただ……」

うん？シャーリーさんが深刻な顔をする。

「何か問題が？」

「ええ……とても重要な問題が一つあるわ……」

シャリーさんの言葉に思わず息をのむ……

「いったい……どんな問題が？」

「……フォームチェンジが……出来ないのよ……」

「……はい？」

シャーリーさんは真剣な顔で訳の分からない事を言った。

「……それのどこが問題なんですか？」

「だって！変形できないのよ！」

「……は？」

何言ってんだこのメガネ……

「……すみません、意味がわからないのでもっと詳しくお願いします」

「貴方は元々すべての距離で戦えてたから……距離に合わせてフォームチェンジする必要がない！つまり……ロマンが足りないのよ！」

「……スバルとキャロのも形状変化はない構造だったと思うんですが？」

「そうね……でもスバルにはもう一つのデバイス、リボルバーナックルがあるし……キャロにはフリードがいるでしょ？」

「そうですね」

「でも貴方のは、今のところ今までのと形も変わらないし、何か変

化がほしいところなのよ」

「……帰っていいですか？」

「だめ♪」

困った……まだ数日の付き合いだが、この人はどうも拘りと言うか、なんというかメカオタクとても言うようなところがあり、熱くなるとものすごく楽しそうに、機械技術論的な物を話し始める……今まで話についてこられる人が少なかったと言っていたので……たぶんそれが原因だろう。

「――というわけで、独創性は絶対に必要だと思うの！」

「……ハイ、ソノトオリデスネ」

あれから……2時間たった……

「で、コウタ……何か良い案ないかな？」

２時間かけてようやく本題に戻ったようだ……

「……う～ん、ディアのみたいに２丁にする……とか？」

なにも言わないとまた、関係ない話に移行しそうなので思いついたことを言う。

「！？……なるほど……双銃剣ね。確かにそういうのは少ないし面白いかも！」

どうやら気に入っていただけたようだ……双銃剣なんて使ったことないけど……

「じゃあ……その方向で……お願いします。俺はそろそろ「その前に！」……？」

「このデバイスの名前、何にする？」

また唐突な……

「名前ですか……う～ん、名前」

それっぽい名前……それっぽい名前……

「じゃあ……『ジェミニ』で」

「ジェミニ？」

「地球にある双子座っていう星座です」

……とりあえず俺の誕生日が6月7日なので……

「なるほど……双銃剣……つまり2丁の武器、そして近距離遠距離の二つの顔……それを双子に見立てたわけね……いい名前ね！」

「……え？……いあ」

適当につけただけなんだけど……

「うん？」

「い、いえその通りです！」

もちろんそんなこと言えるわけもなく……俺のデバイスの名前はジェミニに決定した。

「じゃ、じゃあこれで終わりですね……俺は自「じゃあ次はモード2に当たる部分のプランを練りましょうか！」――――ハイ？」

――その後、俺の新デバイスに付いての話し合いは……日付が変わ

るまで続いた――

第十三話「開発と双子座？」（後書き）

シャーリーはデバイス設計について話せる人が、いままで少なかったため、主人公をよく話し相手にしています。

キャロは自分と同じ召喚師が増えることを期待して、主人公に召喚魔法を指導しています。

そして主人公は召喚魔法も素質がありました…でも召喚獣なんて使わせる予定はありません！…宝の持ち腐れが増えただけです。

がうさん、感想ありがとうございました。さっそくキャロと少し会話のあった主人公、もっと仲良くなるのはファーストアラート後を予定しています。

泡泡さん、感想ありがとうございます。フェイトは本当に人気がありますね。無論私も大好きです。

ｙｕｋｉさん、いつも感想ありがとうございます。これからも楽しんでいただけるよう頑張ります。

第十四話「教会と初出動？？」（前書き）

今年最後の更新です。

今日から実家に帰郷するので、次の更新は2日の夜か3日になります。

第十四話「教会と初出動??」

機動六課に来て、２週間がたった……

使えた召喚魔法と、動かせなかった鎖……

共に成長してきた友人がいて、再会を望んだ人がいて、新たな出会いもあった……

心の前にある壁は、とても高くとても遠い……

いつかこの壁を、越える事が出来るのだろうか？

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～孤独の歌～始まります。

スバルｓｉｄｅ

――父さんとギン姉へ

お元気ですか？スバルです。

私とティア、それにコウタ……三人が機動六課の所属になって二週間になります。

「おはようございます」

「おはよ～」

「おはよ……」

本出動はまだなくて、同期の陸上フォワード五人は朝から晩までず～っと訓練漬け。しかもまだ一番最初の第一段階です。

「おはよう！フリード」

「お、フリードおはよ」

「キュル、キュクル～（二人ともおはよ～）」

部隊の戦技教官……なのはさんの訓練はかなり厳しいんですが、しっかり付いていけば、もっともっと強くなれそうな気がします。

当分の間は、２４時間勤務なので……前みたいにちょくちょく帰ったりは出来ないんですが……

母さんの命日には、お休みを貰って帰ろうと思います。

「……あ！」

「うん？ああ、来たか」

「今日もやるぞ～！！」

「「お～！」」

「朝から元気だな……」

「ホントにね……」

じゃあ、またメールしますね――スバルより

スバルｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――訓練スペース――

「はい！整列！」

「「……はい！」」

「「「はぁ……はぁ……はぁ……」」」

なのはさんの言葉に、そこそこ元気に反応する俺とスバル。肩で息をしながら応えるティア、エリオ、キャロ……でも、スバルはさすがだな、初日はあんなに疲れてたのに……

「じゃ、本日の早朝訓練……ラスト一本！皆まだ頑張れる？」

「「「「「はい！」」」」」

早朝訓練は基本的に、訓練なしの日以外は行われる。

一日訓練の日なら、早朝訓練⇒朝食⇒午前訓練⇒昼食⇒午後訓練⇒夕食⇒就寝と言った感じだ。

間に出動が入ったりすると、変わるみたいだが……今のところ出動はない。

「じゃあ、シュートイベーションをやるよ……レイジングハート！」

≪了解……アクセルシューター≫

シュートイベーション……弾丸回避訓練で、追尾弾や操作弾への対応、回避を訓練する。

なのはさんの周りに、１０以上のアクセルシューターが展開され、高速移動する。……この人ホントすごいな、あれだけの数の遠隔同時操作……信じられん……

「私の攻撃を、5分間被弾無しで回避しきるか、私にクリーンヒットを入れればクリア。誰か一人でも被弾したら……最初からやり直しだよ。頑張っていこう！」

「「「「「はい！」」」」」

かなり厳しい内容だ。万全の状態ならともかく……訓練が終わって疲労してる体じゃ……

「このボロボロ状態で、なのはさんの攻撃を5分間、捌き切る自信……ある？」

「ない！」

「同じくです」

「……厳しいな」

「じゃあ……なんとか一発入れよう！」

「はい」

「コウタ！アンタは……『あれ』を威力は考えなくていいから撃って頂戴……どれぐらいかかる？」

「了解だ……威力なしでいいなら……1分くれ」

「じゃあ、タイミングは任せるわよ」

「よ～し！いくよエリオ！」

「はい！スバルさん！」

俺達はそれぞれデバイスを構え、臨戦態勢になる。

「準備はオッケーだね……それじゃ、レディー……ゴー！！」

なのはさんがアクセルシューターを放つ！

「全員撤退！回避！2分以内に決めるわよ！」

「「「「おう！」」」」

初撃のアクセルシューターをかわし、それぞれ散開する。

俺は土煙に隠れながらビルの影に入り、そのままソニックムーブでなのはさんから距離をとる！

「カートリッジ……フルロード！」

威力は考えず、形を保ったまま打ち出せる程度に魔力を圧縮！残りは速度に回す！

なのはｓｉｄｅ

私の放ったアクセルシューターを五人は散開してかわす……うん、いい反応。

直後！後ろにウィングロードが現れスバルの声がする！

「うぉおおお！」

スバルが拳を構えて突っ込んでくる。両側のビルには私を狙うティアナとコウタ……

「っ！……アクセル！！」

≪スナイプショット≫

３つのアシュセルシューターを一人に一つ飛ばす！

が！弾が当たると……三人の姿が消える！

「シルエット……やるね、ティアナ――っ！」

顔を上げると、こちらに向かって突っ込んでくるスバル……こっちが本命！

「でりゃぁあああ！」

ラウンドシールドを展開しスバルの拳を受け止める！

「くぅ……」

スバルはそのままシールドを突き破ろうと力を込める！私は２つのアクセルシューターをスバルに向かわせる！

「っ！？」

それに気付いたスバルは攻撃をやめバックステップで回避する。

「うん、良い反応……」

「う、うぇ……うわぁああ」

ってあれ？……スバルはバランスを崩したようで、そのまま滑るように後退していく。

そのままアクセルシューターに追われるスバル……

「うわぁああ！ティア！援護援護！」

スバルの叫びから少し遅れて、４つの魔法弾が飛んでくる……

２つはアクセルシューターに向かい、残りは私をめがけて飛んでくる。

「我が乞うは、疾風の翼。若き槍騎士に、駆け抜ける力を！」

≪ブーストアップ・アクセラレイション≫

背後からキャロの詠唱が聞こえ、振り返ろうとすると２発の魔法弾が私に向かってくる！

それを回避していると……

「いくよ！ストラーダ！」

エリオの声が聞こえる……なるほどこれが本命の攻撃だね。

上空から来た、フリードの追撃をかわしエリオを迎撃するために向かう……あれ……コウタは？

エリオの方を向いた瞬間！後ろから風を裂く音と魔力反応！

「っ！？」

振り返りプロテクションを発動！

……弾はプロテクションに弾かれ……そのかなり先にコウタの姿が小さく見える……あんなロングレンジからも狙撃できるんだ……ホント色々できるなぁ～あの子。

「エリオ！今！」

しまった！？

「いっけぇえええ！」

≪スピーアアングリフ≫

「っ！？」

「てやぁあああ！」

慌てて振り返るが間に合わない！体勢を整えられないまま、猛スピードのエリオと激突する！

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

俺は、狙撃を行ったビルから、大急ぎで皆の元へ向かっていた。

エリオとなのはさんが激突したのは見えたが、煙に包まれていて様子はよく分からない……

近づくにつれ煙も収まってくる……どうなった？

≪ミッションコンプリート≫

俺が着くのとほぼ同時に、レイジングハートの声が聞こえる。

「いたたた……お見事！ミッションコンプリート！」

「ホントですか？」

エリオが聞き返す。

「ほら、ちゃんとバリアを抜いて、ジャケットまで届いたよ」

そう言って自分の左胸の辺りを指すなのはさん、そこには小さな焦げ跡があった。……あの体勢でブーストしたエリオの攻撃を受けて……あの程度……どんな防御力してるんだこの人……

「じゃ、今朝はここまで……一旦集合しよう」

「「「「「はい！」」」」」

なのはさんはデバイスを解除して、俺達のところへ来る。

「さて、皆もチーム戦にだいぶ慣れてきたね」

「「「「「ありがとうございます！」」」」」

「ティアナの指揮も筋が通ってきたよ……指揮官訓練受けてみる？」

「い、いや……あの……戦闘訓練だけで、いっぱいいっぱいです」

「キュ、キュクル（なんか、焦げ臭い）」

「うん？臭い？……っておい！スバル、ローラー！」

フリードの言葉に目線を下げると、スバルのローラーから煙が出ていた。

「あ！うわぁやば！……あっちゃ～……しまった～無理させちゃった～、コウタ……これどうにかなる？」

「見せてみろ」

慌ててデバイスを外し、俺のところへ来るスバル……でも、これは……

「駄目だな……駆動部分が焼き切れてる。これ直すぐらいなら新しいローラー買った方が早いくらいだ」

「うぅ……」

俺の言葉にしょげるスバル、

「ティアナのアンカーガンも結構厳しい？」

「あ、はい……騙し騙しです」

「コウタのはどうかな？」

「今のとこ問題はないですが……近い内に、解体してメンテしないともたないですね……」

「……皆、訓練にも慣れてきたし、そろそろ実戦用の新デバイスに切り替えかなぁ？」

「新……デバイス……？」

ああ、あれ完成したんだ。前にスバルのデバイス製作を手伝ってか

ら見てなかったな……

――機動六課前――

「じゃ、一旦寮でシャワー使って、着替えてロビーに集まろうか」

「「「「「はい！」」」」」

「ん？あの車って……」

俺達が話しながら寮に向かっていると、黒いスポーツカーが俺達の前で止まる。

「フェイトさん！八神部隊長！」

車の窓と屋根が消え、フェイトさんと八神部隊長が見え、キャロが驚いたように叫び、二人が応える。

俺達も挨拶を返しながら車に近づく。

「すご〜い！これ、フェイト隊長の車だったんですか？」

「そうだよ、地上での移動手段なんだ」

「皆、練習の方はどないや？」

「あ、え〜と……」

「頑張ってます」

八神部隊長の言葉に、スバルは少し迷い、ティアナが代表して答える。

「エリオ、キャロ、コウタ……ごめんね。私は三人の隊長なのに……あんまり見てあげられなくて」

フェイトさんが申し訳なさそうに言う……俺の自主練には二日に一度ぐらい顔出してるけど……やっぱ日中は忙しいんだろうな……

「あ、いえ……そんな……」

「大丈夫です」

「気にしないでください」

エリオとキャロは、フェイトさんを心配させないように返す。子供なんだし、もう少し甘えてもいいと思うけど……

「五人とも良い感じで慣れてきているよ。いつ出動があっても大丈

夫！」

「そうか、それは頼もしいな」

「二人は……どこかにお出かけ？」

「ちょっと６番ポートまで……」

「教会本部でカリムと会談や。夕方には戻るよ」

教会本部……たしかベルカ自治区だったけ？訓練校と同じ北部だったけど……あの辺はあまり行ったことないなぁ……

「私は昼前には戻るから、お昼は皆で一緒に食べようか？」

「「「「「はい！」」」」」

「ほんならな～」

そう言って出発する二人を、俺達は敬礼し見送る。

前から思ってたけど……八神部隊長の関西弁？……俺はともかくミッド生まれの人に通じるのだろうか？

フェイトｓｉｄｅ

――車内――

私は6番ポートに向かう途中、はやてに話しかける。

「聖王騎士団の魔導騎士で、管理局本局の理事官……カリム・グラシアさんか……私はお会いしたことないんだけど……」

「あ～そやったね」

「はやてはいつから？」

「私が教会騎士団の仕事に派遣で呼ばれた時で、リインが生まれたばっかの頃のはずやから……8年ぐらい前かな？」

「……そっか」

8年前と聞き……少しコウタの事を思い出す。

「カリムと私は信じてるものも、立場も、やるべき事も、全然ちゃうんやけど……今回は、二人の目的が一致したから……そもそも、六課の立ち上げ、実質的なところをやってくれたんは、殆どカリムなんよ」

はやては嬉しそうに話す。

「そうなんだ」

「おかげで、私は人材集めの方に集中できた」

「信頼できる上司って感じ？」

「う～ん、仕事や能力はすごいんやけど……あんま上司って感じはせえへんな。どっちかっていうと……お姉ちゃんって感じや」

「ふふ、そっか」

きっと、いい人なんだろうな……会ってみたいな。

「まぁ、レリック事件が一段落したらちゃんと紹介するよ。きっと気が合うよ……フェイトちゃんもなのはちゃんも……」

「うん、楽しみにしてる」

レリック事件……出来る事なら早く解決してほしいけど……

第十四話「教会と初出動？？」（後書き）

…これかなり長くなりそうだ…出来れば3話ぐらいで終わらせたい…

リスカさん、感想ありがとうございます。後その発想力私に下さい。

ｄａｍｕｄａｍｕさん、感想ありがとうございます。見た目までおけらに…（；´Д｀）…確かに黒のロングコートとかにして後ろから見たら…コートは白にしよう

第十五話「教会と初出動？？」（前書き）

あけましておめでとうございます。

今年もよろしくお願いします。

そう言えば、今更ながらＳｔｒｉｋｅｒＳの漫画版を購入しました。

アニメじゃ、あまり詳しく書かれてなかった訓練校の部分が書かれてるのがいいですね。この辺のエピソードもいずれ書いてみたいものです。

第十五話「教会と初出動？？」

激しさを増す訓練……

所々無理が出始めるデバイス……

六課稼働から２週間……

新しい相棒との出会いが迫る。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～孤独の歌～始まります。

――六課・男子シャワールーム――

「驚いたな、エリオが俺達の居た訓練校に来たことがあるなんて…

…」

「フェイトさんに見学に連れて行ってもらったんですが、コウタさん達の事はよく覚えてますよ」

同じシャワールームに入り会話をする俺とエリオ、初めは槍術をどこで習ったか～から発展していた。

ちなみになぜ同室のシャワールームかと言うと、俺がエリオの頭を洗っているからだ。俺とエリオは同じフォワードで行動時間も近いため、夜の入浴なども殆ど一緒に行っている。その際に苦戦してたエリオを手伝ったのがきっかけで、最近はよく洗っている。

他人の頭なんて洗ったことがなかったので少し不安だったが、意外と気持ち良さそうにしてくれているのでよかった。

「へぇ～、そんなに特徴的だったかな？……どんな場面を見たんだ？」

「え～と……確かスバルさんがものすごい勢いで突っ込んでたり、ティアさんが凄い高く放り投げられたりしてた時ですね」

「……あ～、あの時ね……そりゃ印象にも残るか……っと流すよ～」

「あ、はい！いつもすみません……洗っていただいて」

「気にするなって……てかエリオはまだ１０歳だろ？もう少し周りに甘えたっていいと思うよ」

実際エリオ、しっかりしてるよな……なんとなく近い境遇を感じる。

しっかりしようとしたんじゃなく……しっかりするしかなかった…
…みたいな感じか？

フェイトさんの保護児童って話だし……いろいろあったんだろうな。

「そうでしょうか？……でも、なんかこういうのいいですね……」

「うん？」

「い、いえ！僕今まで、周りに男の人ってあまりいなかったので…
…」

「あ～、そういえばフェイトさんの知り合いって女性ばっかだな」

「はい……フォワードにコウタさんがいてよかったです」

年頃だもんな……周りが女性ばっかだといろいろ気を使うのか……

「まぁ、エリオの年頃だと異性には気を使っちゃうか……」

「あはは……はい……」

俺は、置いてあったタオルを取って、エリオの頭を拭いてやる。

「こ、コウタさん！拭くくらいは……自分で」

「いいから、このぐらい甘えとけよ」

「……はい」

少し慌てたエリオだが、俺の言葉に素直になったのか、気持ち良さそうに目を細める。

弟が居たら……こんな感じなのかな？……俺よりしっかりしてそうだけど。

――六課・女子シャワールーム――

「えっと、スバルさんのローラーブーツとティアさんの銃、それにコウタさんの銃剣ってご自分で組まれたんですよね？」

「うん、そうだよ～」

「訓練校でも、前の部隊でも……支給品って杖しかなかったのよ」

キャロの質問に、スバルとティアナが答える。

「私は魔法がベルカ式な上に、戦闘スタイルがあんなだし……ティアもカートリッジシステムが使いたいからって……コウタは、自作して持ち込むのが普通だと、勘違いしてたみたい」

「まぁコウタはともかくとして、そうなると私達は自分で作るしかないじゃない、訓練校じゃオリジナルデバイス持ちなんていなかったから、目立っちゃってね」

「あ！もしかしてそれで、スバルさん達、お友達になったんですか？」

「う～ん、私とコウタは元々幼馴染だったからね、ティアとはキャロの言うとおりだよ」

「腐れ縁と私の苦悩の日々の始まりっていって……」

「あははは……でも、なんだかんだで一番目立ってたのはコウタだったよね～」

「そうなんですか？」

「まぁ私達と同期……いや同じタイミングで訓練校に居て、アイツの名前知らないやつはいなかったわね」

「いろんな意味でね～」

「そんなに凄かったんですか？」

驚いて聞き返すキャロに、あきれたような顔で話し始めるティアナ。

「凄いというか……まず一つ目は、デバイスね」

「デバイスですか？」

「そう、あいつ訓練校に入るまで殆ど魔法とか使ったことなかったみたいで、自分にどんな物が合うのか分からないって、コロコロデバイスを作り変えてたのよ……インテリジェンス以外だったけどね」

「ええ！？」

ティアの言葉に驚くキャロ。

「でも、コウタの凄いとこは、ベルカ式以外殆ど使えちゃったとこだよね」

「使えたとしても……毎度毎度戦闘スタイルを変えられて、私は大変だったわよ……」

「あはは……一つ目はってことは他にもあるんですか？」

ティアナの言葉に苦笑しながら、質問を続けるキャロ……

「ええ……というかもう一つの方が、あいつが有名だった最大の理由よ」

「同期生への暴力行為で、謹慎処置7回だったけ？」

「……8回よ」

「えぇえぇ!?……こ、コウタさんて……実は怖い人なんですか?」

「ううん、そんなことないよ」

怯えながら聞き返すキャロに、スバルは笑顔で答える。

「まぁ……相手に非があったから、謹慎ですんでたわけだしね」

「えと……相手の人が悪かったってことですか?」

「そうね……私達は初めの方は、成績もよくなかったんだけど……スバルが自分の力をコントロールできるようになって、コウタがオールラウンダーのスタイルに落ち着いた頃から一気に成績が上がってね。総合訓練はトップばっか取るようになってね……そうなると妬みや嫉妬も多くなる」

「……」

ティアナの言葉に少し寂しそうな顔をするスバル

「殆どは、陰口だったし、ほおっておいたんだけど……いつだったか、座学の授業中にスバルの事を『親のコネで成績をとってる卑怯者』って皆の前で言った奴が居てね」

「酷い……」

「そうしたら、寝てたはずのコウタがいきなりそいつに掴みかかって、そのままボッコボコにしちゃってね。で、次の日に謹慎処分…
…確かそれが一番初めね」

「うん、その後も、私やティアが酷い事言われたり、酷い事されたりすると……次の日に必ず『コウタ・エルザードを暴力行為で謹慎処分とする』って張り紙が貼られてたね」

「それじゃあ……コウタさんはお二人のために？」

「う～ん、本人は自分の悪口言われたから殴ったとかいってたけどね……自分がどんな事言われても怒った事なんて無かったもん、コウタ」

「アイツは馬鹿なのよ。自分の事はすごい冷静に見る癖に、友達だとか仲間だとかの事になると……自分がどうなるかなんて考えずに行動を起こす。まったくフォローするこっちの身にもなってほしいわ」

「そうだね。私に馬鹿馬鹿言うけど……コウタだって十分馬鹿だよね～」

悪態をつきながらも……二人の表情は嬉しげだった。

「本当に……三人は仲がいいんですね」

「あはは、なんだかんだで付き合い長いしね」

「おかげで、私は苦労ばっかだわ……まぁスバルに対しての苦労っていう意味じゃ、コウタの方がよっぽどだけどね」

「えぇ～、そんなことないよ！」

「そうかしら、私はコウタがあんな本読む気持ちも少しわかるわよ」

「うぅ……酷いよティア！」

「あはははは」

ティアナは気付いてなった、コウタが『あんな本』を読んで対策を考えてる『ワガママ女』に自分もカウントされている事を……

「さて、キャロ頭洗おっか」

「お願いします」

思い出したようなスバルの言葉に、キャロガ嬉しそうに返事をする。

「じゃあ、私は先にあがってるからね」

「「は～い」」

――六課・寮玄関付近――

「――クシュン！」

「コウタさん、風邪ですか？」

「……いや、そんな感じじゃないけど……」

「キュックル？（大丈夫？）」

「うん、大丈夫」

俺とエリオは、シャワーを終え女性陣を待っていた。

「皆、遅いなぁ……」

「女の入浴は長いもんだよ……ニムでもやるか？」

そういって、俺はポーチから小さな鉄の玉を一握り取り出す。

「ニム……ってなんですか？」

……この世界にはないのかな？

「簡単なゲームだよ、この玉を交互に取り合って、最後の一つを取った方が負け。一回に取れる玉は３つまで、簡単だろ？」

「なるほど……」

「時間つぶしにはちょうどいいさ」

「キュキュキュル！（私もやる！）」

「じゃあフリードも一緒にやろう」

こうして二人と一匹の小さな戦いは幕を開けた。

「えと……これを取って……次にフリードが」

俺の前で真剣な表情で考えるエリオ。ちなみに現在までの戦績は俺が2敗、エリオが3敗、フリード2敗だった。

上手い具合に勝率調整できたな……どっちも素直というかなんというか……読みやすい。

エリオの目の前には6つの玉……まぁエリオが3個取って、フリードが2個取って俺の負けかな?……エリオに負け越させるのもかわいそうだし……

「よし！これで……」

エリオは3つ玉を取り、フリードの番、

「キュイ！」

フリードは玉を『1つ』取って俺に回す……どうやらフリードは俺の味方らしい……ごめんエリオ。

目の前で裏切られたような顔をしているエリオ……すると

「アンタ等……なにやってるのよ？」

良いタイミングでティアが現れてくれて、お開きにする。

――ベルカ自治区・聖王教会――

広い部屋の机で、一人の金髪の女性が書類を書いていた。

「騎士カリム、騎士はやてがいらっしゃいました」

モニターが現れ、赤髪の女性が声をかける。

「早かったのね……私の部屋に来てもらって頂戴」

カリムは、書類から目を離さないまま答える。

「はい」

「それと、お茶を二つ、ファーストリーフの良い所を、ミルクと砂糖付きでね」

「かしこまりました」

「……よしっと」

書類を一段落させペンを置く。

――コンコン

「どうぞ」

カリムの声にドアを開け、はやてが入室する。

「カリム……久しぶりや」

「はやて、いらっしゃい」

二人は、少し雑談をした後テーブルへ移動し、部隊の話を始める。

「ごめんな、すっかりご無沙汰してもうて」

「気にしないで、部隊の方は順調みたいね」

「ふふ、カリムのおかげや」

「ふふふ、そういうことにしておくと、色々お願いもしやすいかな」

「なんや？今日は会って話すのはお願い方面か？」

「……」

カリムは真剣な表情になり、端末を操作しカーテンを締め、モニターを出す。

「これ……ガジェット……新型？」

「今までの？型のほかに二種類。戦闘性能は、まだ不明だけど……これ、？型は割と大型ね。……本局にはまだ正式報告はしてないわ、監査役のクロノ提督には、さわりだけお伝えしたんだけど……」

「……！？これは！」

はやてはモニターに映る一つの物体を見つけ、表情を険しくする。

「それが……今日の本題。一昨日付で、ミッドチルダに運び込まれた不審貨物……」

「……レリックやね」

レリック……機動六課設立のきっかけの一つで、超高エネルギーの塊であるロストロギア

「その可能性が高いわ。？型と？型が発見されたのも、昨日からだし」

「ガジェットがレリックを見つけ出す予想時間は……？」

「調査では早ければ今日明日」

その言葉にはやては少し考えるようなそぶりを見せ……

「せやけど……おかしいな。レリックが出てくるのが、ちょう早いような……」

「だから会って話したかったの……これをどう判断すべきか、どう動くべきか……」

「……」

「レリック事件も……その後に起こる事件も……対処を失敗するわけには……いかないもの」

思いつめたようなカリムを見て、はやては手元の端末を操作しモニターを閉じ、カーテンを開ける。

「はやて？」

「まぁ……なにがあってもきっと大丈夫！カリムが力を貸してくれ

たおかげで、部隊はもういつでも動かせる。即戦力の隊長達はもちろん、新人フォワード達も実践可能……予想外の緊急事態にも、ちゃんと出来る下地が出来ている……そやから大丈夫！！」

――はやては言葉を紡ぐ、カリムを元気づけるように……自身を奮い立たせるように――

第十五話「教会と初出動？？」（後書き）

……デバイスすら登場してないという体たらくＯｒｚ

主人公の設定が少し明かされました…主人公は自分の優先順位を他人よりかなり下に置いているため、自分の事を言われても怒ったりはしませんが、友達や仲間の事になると自分への被害は度外視で行動します。ちなみにレジアスに助けられたのも８回のうちの１つです。

ｙｕｋｉさん、あけましておめでとうございます。今年もいい年でありますように～

ジョン１１７さん、感想ありがとうございます。チンクフラグは中盤～後半の主人公の大きな転機となる場面になる予定です。

第十六話「教会と初出動？？」

発見される新型ガジェット……

現れたレリック……

動き始める大きな欲望……

裏にある様々な思惑……

それを知らないまま、俺たちの戦いは始まる。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～孤独の歌～始まります。

――六課・デバイスルーム――

「うわぁ……これが……」

「私達の……新デバイス……ですか？」

俺達の前には、５つのデバイスが浮いている。ちなみに俺の前には翡翠色……俺の魔力光と同じ色のネックレスが、浮いている。

「そうで～す。設計主任は私……協力者は、なのはさん、フェイトさん、レイジングハートさんとリイン曹長……そしてコウタ」

「ええ！コウタも！？」

シャーリーさんの言葉に驚くスバル……

「っていっても……俺は自分のとスバルの以外には、殆ど関わってないと思いますけど？」

「いやいや、一番難航してた、その二つを手伝ってもらって助かったよ。特にスバルのデバイスに関しては、むしろコウタの方が主導だったしね」

「そうなの！？コウタ」

シャーリーさんの言うとおり、スバルのデバイスに関しては基本設計部分から手伝っていた。まぁ元々大分ガタが来ていたし……そのうち作り変えてやるつもりだったから色々考えてはいた。

「そんなことないですよ……基本設計部分は、その内作り直してやるつもりだったので……色々考えてただけですよ。それにウィングロードの解析や、ＡＩ部分に関しては俺ではどうする事も出来なかったです」

「……」

実際、あの特殊な魔法を解析してしまうシャーリーさんはさすがだと思う。

って……うん？スバルが肩を震わせている……そして、

「コウタ……ありがと～～～！？」

感極まったのか、スバルが俺に飛びついてくる。

「引っ付くな！離せ！」

「やだ！」

「なんで！？」

「絶対に！やだ～！」

俺の言葉にますます抱きつく力を強めるスバル……引きはがそうとしてもまったく離れない。

「いい加減に……てか、力つよ！？」

「～♪」

俺の体から、ミシミシ不快な音が聞こえる。

「……は、離せ……お、折れる……ホントに……折れる……」

「～～♪」

い……意識が……

「スバル……そろそろ離さないと……コウタ死ぬわよ」

「え？……あっ！？ごめんコウタ、嬉しくってつい」

「……お前……」

怒る気力もない俺……あと少し遅かったら……マジで気絶してたかも、ティア……次はもう少し早く頼む。

「「コウタさん……大丈夫ですか？」」

キャロとエリオが心配して声をかけてくれるが……

「そう……思うなら……止めてくれ……」

「「ごめんなさい、無理です！」」

二人とも、この二週間でずいぶんはっきり言えるようになって……嬉しいやら悲しいやら……

「まぁコウタは置いといて……皆自分のデバイスのところに戻ってあげて」

シャーリーさんが、俺のところに集まってた皆を戻す……置いとくなよ……

「あれ？そう言えば、ストラーダとケリュケイオンは変化無しなのかな？」

「そう言えば……そうなのかな？」

元の位置に戻ったエリオとキャロが、デバイスの外見が変わってない事に残念そうに声を出す。

「違います！変化無しなのは外見だけですよ！」

「リインさん……」

「はいです♪」

するとリインさんが、エリオとキャロの前に行き、説明をする。

「二人はちゃんとしたデバイスの使用経験はなかったですから、感触に慣れてもらうために、基礎フレームと最低限の機能だけで渡してたです」

「あ、あれで……最低限！？」

「……本当に？」

リインさんの言葉に驚愕する二人。

「皆が扱うことになる五機は、六課の前線メンバーとメカニックスタッフが、技術と経験の粋を集めて完成させた最新型。部隊の目的に合わせて、そして……エリオやキャロ、スバルにティアにコウタ、個性に合わせて作られた……文句なしに最高の機体です！」

リインさんは、浮いてるデバイスを自分の周りに集め、話を続ける。

「この子たちは……皆まだ生まれたばかりですが、色んな人の思いや願いが込められてて、いっぱい時間かけてやっと完成したです」

そう言ってそれぞれの前にデバイスを移動させる。

「だから……ただの道具や武器と思わないで、大切に……だけど性能の限界まで、思いっきり全開で使ってあげて欲しいです！」

「この子たちも、きっとそれを望んでいるから……」

リインさんの言葉にシャーリーさんが付け足す。

「ごめんごめん、お待たせ～」

図ったようなタイミングで、なのはさんが入ってくる。

「ナイスタイミングですよ、なのはさん。丁度今から機能説明をしようかと……」

「そう、もうすぐに使える状態なんだよね？」

「はいです！」

タイミング良すぎないか？……外でタイミングうかがってたんじゃ……

「コウタ……何か言いたい事でもあるのかな？」

「!?……いえ、なにもありません!」

この人……心が読めるのか!?

シャーリーさんは何事もなかったように、それぞれのデバイスの画像をモニターに出し、説明を始める。

「まず、その子達皆何段階かに分けて、出力リミッターをかけてあるの。一番最初の段階だと、そんなにビックリするほどパワーが出る訳じゃないから……まずはそれで扱いを覚えていって」

「で、各自が今の出力を扱いきれるようになったら、私やフェイト隊長、リインやシャーリーの判断で解除していくから……コウタは、自分で解除できると思うけど……しないようにね」

「……しませんよ」

俺をどういう風に見てるんだこの人……

「あはは……丁度、一緒にレベルアップしていく感じですね」

……リインさん……貴女も無視ですか……

「あ!出力リミッターっていうと……なのはさん達にもかかってますよね」

ティアがなのはさんの言葉に反応し返す。……お前も間のやり取りは無視か……

「ああ……私達は、デバイスだけじゃなく、本人にもだけどね……」

「!?」

「「「「ええ!?」」」」

なのはさんの言葉に四人は驚き、俺は別の意味で驚いていた。……あの輪っかみたいなのは……リミッターだったのか……

「リミッターがですか?」

「能力限定って言って……うちの隊長と副隊長は皆だよ。私とフェイト隊長、シグナム副隊長にヴィータ副隊長……」

「はやてちゃんもですね」

「うん」

……なるほど納得がいった。つまりは……

「それってつまり、部隊の保持ランク統計規模の調整ですか?」

「うん、そうだよ」

「え~っと……」

俺の言葉になのはさんが答える。キャロはよく分かってないようで、考えるようなしぐさを見せる。

(コウタ!それってなに?)

（おい……訓練校で習ったろ……この後説明があると思うから、しっかり聞いてろ）

（あ、あはは……）

忘れてやがるな……しっかりしろよ訓練学校主席……

「コウタの言うとおり、部隊ごとに保有できる魔導師ランクの統計規模っていうのが決まってるてね」

「一つの部隊で、優秀な魔導師をたくさん保有したい場合は、そこに上手く収まるように魔力の出力リミッターをかけるんですよ」

「まぁ……裏技っちゃあ……裏技なんだけどね」

シャーリーさんの言葉に、リインさん、なのはさんが続ける。……裏技以前にリミッターをかけたりできる人が、そもそも少ないような……

「うちの場合だと……はやて部隊長が４ランクダウン、隊長達は大体２ランクダウンかな」

「４つ!?八神部隊長って……ＳＳランクのはずだから……」

「Ａランクまで落としてるんですか？」

Ａランク……ってことは、普通の部隊の分隊長レベルくらいか……

「はやてちゃんも……色々苦労しているです……」

「……なのはさんは？」

「私は……元々Ｓ＋だったから……２．５ランクダウンでＡＡ。だからもうすぐ、一人で皆の相手をするのは辛くなってくるかな」

……なるほど、俺の目に映ってる３つの輪っかは、大きいのが１ランク、小さいのが０．５ランクのリミッターか……

「隊長さん達ははやてちゃんの、はやてちゃんは直接の上司のカリムさんか、部隊の監査役のクロノ提督の許可がないと、リミッター解除が出来ないですし……許可は滅多なことでは出せないそうです」

もし……解除しなければ勝てない相手と戦って……解除の判断が遅れれば……

「……そうだったんですね」

「まぁ……隊長達の話は心の片隅くらいでいいよ。今は、皆のデバイスの事……」

「「「「「……はい」」」」」

……まぁ俺が考えたとこで、どうにもならないか。

シャーリーさんが、デバイスの詳細データを表示して、説明を続ける。

「新型は、皆の訓練データを基準に調整されているから、いきなり実戦で使っても違和感はないはと思うんだけど……コウタのだけは、

近接戦闘での耐久力の関係上、前の物に比べ重量が1．5倍くらいになってるから……注意してね」

「分かりました。その位になるだろうと思ってたので、大丈夫です」

「午後の訓練の時にテストでもして、微調整をしようか？」

「遠隔調整も出来ますから、手間は殆どかからないと思いますよ」

「ふぅ……便利だよね、最近は」

なのはさんがしみじみ話す……レイジングハートは遠隔調整できないんだろうか？

「べんりです～」

あ、そういえば……

「そうだ、スバルのやつは、リボルバーナックルとのシンクロも出来てるはずだから、収納と瞬間装着も出来るようになってるはずだ」

「本当！？ありがとうコウタ！シャーリーさん！」

前々から、持ち運びが面倒だと言っていたので、シャーリーさんに相談して機能を付けてもらった。シャーリーさん曰く簡単にできたらしいが……

――ミッドチルダ・道路――

はやてを送ったフェイトは、車内でビックアーチ副官のグリフィスと通信をしていた。

「――うん、はやては向こうに送ったから……そろそろ会談が始まってるんじゃないかな？」

「はい、お疲れ様です」

「私はこの後、公安地区の捜査本部に寄って行こうと思うんだけど……そっちはなにか急ぎの用事とかあるかな？」

「いえ、こちらは大丈夫です。副隊長お二人は、交替部隊と一緒に出勤中ですが……なのはさんが隊舎にいらっしゃいますので」

「そう……え！？」

フェイトが通信を切ろうとした瞬間、車内にモニターが現れアラートが鳴る！

――六課・メンテナンスルーム――

デバイスの説明が終わり、退出しようとした頃。室内にアラートが響いた。

「このアラートって……」

「一級警戒態勢!?」

「グリフィス君!」

なのはさんの声に、モニターが現れグリフィス准尉が写る。

「はい!教会本部から出動要請です!」

「なのは隊長!フェイト隊長!グリフィス君!こちらはやて!」

もう一つのモニターが写り、八神部隊長が写る。

それとほぼ同時に、フェイトさんからも通信が入る。

「こちらフェイト……状況は?」

「教会調査団で追っていたレリックらしきものが見つかった。場所は、エイリム山岳丘陵地帯……対象は山岳リニアレールで移動中」

「移動中って!」

「まさか！」

部隊長の説明に、フェイトさんとなのはさんが驚いたように聞き返す。現在は隊長達の作戦確認中なので、俺達は黙っている。

「そのまさかや……内部に進入したガジェットのせいで、車両の制御が奪われてる……リニアレール車内のガジェットは最低でも３０体……大型や、飛行型の未確認タイプも出ているかもしれへん」

未確認タイプ……新型ってことか……

「いきなりハードな初出動や……なのはちゃん、フェイトちゃん……いけるか？」

「私はいつでも！」

「私も！」

「スバル、エリオ、キャロ、ティアナ、コウタ、皆もオッケーか？」

「「「「「はい！」」」」」

「よし！良いお返事や。シフトはＡ－３、グリフィス君は隊舎での指揮、リインは現場管制！」

「「はい！」」

「なのはちゃんとフェイトちゃんは現場指揮！」

「うん！」

「ほんなら……機動六課フォワード部隊……出動！！」

「「「「「「はい！」」」」」」

「了解……皆は先行して、私もすぐに追いかける！」

「うん」

フェイトさんの言葉に部隊長が応え、俺達もヘリポートへと急ぐ！

――聖王教会――

「シャッハ！はやてを送ってあげて……機動六課の隊舎まで最速で！」

「かしこまりました！騎士カリム！」

カリムの言葉に応え、モニターが消える。

「聖堂の裏に出て……シャッハが待ってる」

カリムの言葉にはやては身支度をしながら返事をする。

「おおきにな、カリム……今日のお茶、おいしかったよ」

「ふふふ……」

「ほんなら……行ってきます！」

――機動六課・ヘリポート――

俺達がヘリポートに着くと、すでにヴァイス陸曹が準備をしていてくれたので、急いで乗り込む。

「新デバイスで、ぶっつけ本番になっちゃったけど……練習通りで大丈夫だからね」

「はい」

「頑張ります」

なのはさんがスバルとティアに話しかけ、二人が答える……さすが

に緊張してるみたいだ。

「エリオにキャロ、それにフリードもしっかりですよ！」

「「はい！」」

「キュクゥ！（はい！）」

……俺忘れられてね？……なんか今日無視されることが多い気がする。

「危ない時は、私やフェイト隊長、リインがちゃんとフォローするから、おっかなびっくりじゃなくて、思いっきりやってみよう！」

「「「「「はい！」」」」」

――こうして、レリックをめぐる戦いが始まった――

第十六話「教会と初出動？？」（後書き）

ふぅ…やっと原作で言うとこの４話が終わった…

５話は戦闘メインだし…テンポ良くいくといいなぁ…

会話をテンポ良く進めないと恐ろしく長引くため、主人公の会話をあまり入れれない…戦闘になれば心理描写も増やせるかな？

ｙｕｋｉさん、いつも感想ありがとうございます。

黎音さん、感想、ご意見ありがとうございます。これから読み始める方のためにさっそくその部分は訂正させていただきます。これからも何かお気づきの点があればよろしくおねがいします。

第十七話「厳しい言葉と優しい思い？」（前書き）

今回は過去最長の長さです。

第十七話「厳しい言葉と優しい思い？」

新しい自分専用のデバイスとの出会い……

間を置かず鳴り響く警報……

それぞれの想いと共に現場へ向かうヘリ……

ただ、一人の少女の瞳は、不安と恐怖に揺れていた。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～孤独の歌～始まります。

――４年前――

「アルザスの竜召喚の娘……ルシエの末裔……キャロよ……」

「僅か６歳にして、白銀の飛竜を従え、黒き炎竜の加護を受けた…

…お前は、真に素晴らしき竜召喚師よ……」

「じゃが……強すぎる力は災いと……争いしか生まぬ……」

「！？」

「すなぬな……お前をこれ以上、この里に置くわけには……いかぬのじゃ……」

（竜召喚は……危険な力。人を傷つける……怖い力……）

――現在・ヘリ内部――

俺達は、現場に向かうヘリの中に居た。

会話はなく、それぞれ思い思いの様子で、緊張を解しながら現場への到着を待つ。

ただ、キャロだけは何かを考えるようにうつむいたままだった……

俺は目を切り替え、キャロの様子を見る。キャロの魔力は酷く不安定に揺れていた。

緊張……という感じではない……そう、まるで何かに脅えるような感じだ。

少し前にフリードに聞いた……キャロが故郷を追いだされた話を思い出す。そして、フェイトさんに聞いた竜魂召喚の暴走の話も……

……キャロが怖がってるのは……竜召喚……いや、自分自身か……

なんとかしてあげたいが、上手く言えるだろうか？いや、たとえ上手く言えなくても……言ってやらないといけないよな。……フェイトさんがここに居ない以上、両方の事情を知ってるのは俺だけなんだし……

フリードが心配そうにキャロを見つめている……俺はエリオの隣から立ち……キャロの前に目線を合わせるようにしゃがむ……

「なあ……キャロ」

「え！は、はい！」

俺の言葉に、キャロは驚いたように答え、皆は俺達の方を向く……俺はキャロの頭に手を置き、出来るだけ穏やかな声で語りかける。

「怖いか？……自分の力が……誰かを傷つけてしまう事が……」

「！？！？」

キャロは目を見開き……俺を見つめる。そして少しの沈黙の後、

「……はい」

小さな声でそう言った。

「……俺も怖いって思う時はあるよ」

「……コウタさんも？」

「うん、非殺傷設定の魔法だって、小さな力だって……そしてキャロの力も、使い方次第では……誰かを傷つけることも……殺す事も出来る……敵でも仲間でも……」

「っ！？」

「コウタ！」

キャロは怯えたような目で俺を見て、そしてそれを見たスバルは、俺を咎めるように立ち上がる。

「スバル……少し黙ってくれ……大事な話なんだ」

俺はスバルの方を向き、静かに言う。真剣な俺の様子にスバル、同じく何かを言おうとしてた様子のティアとなのはさんも黙る。

ヘリ内に沈黙が流れ……俺はキャロに向き直り、真剣に話を続ける。

「例えばさ、俺の魔法はそんなに強い魔法じゃない。でもそんな俺の魔法も……非殺傷でも、当たり所が悪ければ誰かを傷つけ、その人の人生を狂わすことだって出来てしまう」

「！？」

俺の言葉にヴァイス陸曹の肩が少し揺れる……今は気にしてる場合じゃないな。

「けど……さ、その力は、何の意思もなくただ闇雲に他人を傷つける物なんかじゃなく……俺自身の力なんだ。……だから俺が、誰かを傷つけないようコントロールすることだってできるんだ」

「……え？」

「いいか、キャロ……力が誰かを傷つけるんじゃない。力はどこまで行っても力だからね……それを他人を傷つけるものにするか、誰かを守るものにするかそれを決めるのは自分次第だ」

「……自分、次第……」

俺はキャロの頭を撫でながら、優しい口調で話しかける。

「今のキャロはさ、自分自身から逃げてるだけだ……自分の力を怖がって……目を背けたままじゃ、その力だって応えてはくれない……キャロが自分の力とフリードを信じて……自分の力を受け入れないと、いつまでたったって上手くいく事はないと思う……」

「自分を……フリードを……信じる……」

厳しいな俺……要するに俺じゃどうにもできないから自分で何とかしろっていってるみたいなもんじゃないか……まだ１０歳なんだよな……それが自分の力を恐れられて、避けられて……怖いに決まってるよな。

「……ごめんな、俺の言ってる事、厳しいかな？……厳しいよな……俺がもっとうまく言えて……言葉だけでキャロの不安を取り除いてあげられるならよかったんだけど……」

「……コウタさん」

俺に、キャロを救ってやることはできない……キャロ自身が自分と向き合わない限り……たぶん何も変わらない。俺に出来るのは……言葉をかけてやる事だけだ……

「だけど……これだけは覚えていてほしいんだ。キャロの力もフリードも俺達も……キャロの敵なんかじゃないんだよ……皆キャロの味方なんだ……だから、自分を……フリードを……俺達を信じて、怖いかもしれないけど、自分と向き合ってみてくれないか？」

「……はい！」

俺の言葉に、キャロは少し考え力強い返事を返してくれた……その表情には先ほどまでの怯えた様子は……もうなかった。……強いなキャロは……

俺は微笑み、少し強くキャロの頭を撫でる。

まったく……どうして俺は、こう、自分じゃ出来もしないくせに……誰より自分を信じてないのは俺なのに……他人にばかり偉そうに……ホント、最低だな……俺……

――六課・ロングアーチ――

「問題の貨物車両、速度７０を維持、依然進行中！」

「重要貨物室の突破は……まだされていないようですが」

「……時間の問題か……」

通信士のアルトとルキノの言葉に、グリフィスが呟く用に言う。

「アルト！ルキノ！広域スキャン！サーチャーを空へ！」

シャーリーが何かに気付き、指示を出す。

表示されたモニターに、無数の航空型ガジェットが写る。

「ガジェット反応！？空から！？」

「航空型、現地観測隊を捕捉！」

――ミッドチルダ・パーキング――

「こちらフェイト……グリフィス、こちらは現在パーキングに到着。車を止めて現場に向かうから……飛行許可をお願い」

「了解、市街地個人飛行、承認します」

フェイトは車を止めて外へ出ると、デバイスを取り出す。

≪ゲット、セット≫

「うん……バルディッシュ・アサルト……セットアップ！」

≪セットアップ≫

フェイトは金色の光に包まれ、デバイスを展開する。

「ライトニング1、フェイト・テスタロッサ・ハラオウン……行きます！」

そのまま高速で飛行し、現場へ向かう。

――ヘリ内部――

ロングアーチから通信が入り、状況が説明されるが……俺はむしろ現在の自分の状況について考えていてあまり頭に入ってこない。

「ヴァイス君！私も出るよ……フェイト隊長と二人で空を押える！」

……あれ？なんでこうなったんだろう……現在俺の両脇には、エリオとキャロが居て、二人とも俺にひっつくように座っている。……そして頭にはフリード

「うっす！なのはさん……お願いします！」

えと、キャロと話をして……その後、キャロにせがまれて隣に座って……なぜかエリオも俺の隣に移動してきて……まぁいいか

「じゃ、ちょっと出てくるけど……皆も頑張ってズバッとやっつけちゃおう！」

「「「「「はい！」」」」」

キャロもしっかり返事をする……よかった、少しは不安もとれたみたいだ。

キャロside

不思議な気分だった。さっきまで……ううん、ずっと怖かったはずなのに……今は心が軽い。

もちろんまだ、不安はあるけど……さっきまでみたいに体が強張ったりはしてない。

コウタさんの言葉は、嬉しかった……私の事を真剣に考えて言ってくれてるのが伝わってきて……私は一人じゃないんだって、そう思った。

コウタさんは厳しい言葉だって言ってたけど、厳しい言葉も優しさなんだって思う。コウタさんの言葉は、すごく優しくて……暖かかったから。

「ヴァイス君！私も出るよ……フェイト隊長と二人で空を押える！」

「うっす！なのはさん……お願いします！」

「じゃ、ちょっと出てくるけど……皆も頑張ってズバッとやっつけちゃおう！」

「「「「「はい！」」」」」

なのはさんの言葉に、私は力強く返事をする。

なのはさんは微笑みながら、私の方に来て私の頬に手を当てて話してくれる。

「キャロ……さっきコウタが言ってたみたいに、私達はキャロの味方だよ。離れていても通信でつながっている……ピンチの時は助け合える。だから、一人なんかじゃないんだよ……キャロの魔法は、皆を助けてあげられる……優しくて強い魔法なんだから……頑張って！」

私は……なにを不安になってなんか居たんだろう。

私の周りには、こんなに優しくて頼りになる人達がいっぱい居るんだ……だからもう、大丈夫！

「はい！」

なのはさんの目を見て、私は精一杯の声で返事をする。

「うん、良い返事……それじゃあ行ってくるね！」

私の返事に、なのはさんは微笑み、ハッチから外へ飛び出す。

≪スタンバイレディ≫

「レイジングハート・エクセリオン……セットアップ！」

≪セットアップ≫

「スターズ1、高町なのは……行きます！」

デバイスと展開して、なのはさんは航空型ガジェットの迎撃に向かっていった。

キャロside　end

なのはさんが出撃した後、俺達はリインさんからミッションの説明を受けていた。

「任務は二つ、まずは、ガジェットを逃走させずに全機破壊する事。そして、レリックを安全に確保する事。……ですから、スターズ分隊とライトニング分隊、それぞれに分かれてガジェットを破壊しながら、中央に向かいます。ちなみにレリックはここ……7両目の重要貨物室。スターズかライトニング、先に到着した方がレリックを確保するですよ」

「「「「「はい！」」」」」

「で！……私も現場に降りて、管制を担当するです！」

そう言って一回転すると、リインさんは騎士甲冑姿へと変わる。……まぁ『甲冑』かどうかは置いといて……

――上空――

『スターズ1、ライトニング1、エンゲージ！』

『こっちの空域は……二人で抑える。新人達のフォローお願い』

『了解』

フェイトの通信にグリフィスが答える。

『同じ空は……久しぶりだね、フェイトちゃん』

『うん、なのは……』

なのはとフェイトが感慨深げに通信をしていると、ガジェットが向かってくる！

≪アクセルシューター≫

なのはは素早い動きでガジェットの攻撃をかわしながら、正確に攻撃を打ちこむ。

≪ハーケンセイバー≫

そしてフェイトは素早い動きで、次々とガジェットを撃破する。

だがガジェットの数は多く、制圧まではまだ時間がかかりそうだった。

――ヘリ内部――

「さ～て、新人共！隊長さん達が、空を押えてくれているおかげで、安全無事に降下ポイントに到着だ！……準備はいいか！」

「「「「「はい！」」」」」

まず、スターズ分隊の二人が先に降下する。

「スターズ３、スバル・ナカジマ」

「スターズ４、ティアナ・ランスター」

「「行きます！！」」

「いくよ！マッハキャリバー」

「お願いね、クロスミラージュ」

「「セットアップ！！」」

≪≪スタンバイ・レディ≫≫

二人はバリアジャケットを展開し、リニアレールの先頭に着地する。

「次！ライトニング！……チビ共……気いつけてな！」

「「はい！」」

……俺は？

「コウタさん……三人で一緒に降りましょう」

そう言ってエリオが、それに続くようにキャロも手を出してくる。

「ああ、そうだな」

俺は二人の手を握り、ハッチ付近まで行こうとすると……

（……コウタ）

（ヴァイス陸曹？）

ヴァイス陸曹から念話が届く。

（二人の事……頼むな……）

（……はい！）

そして俺達は三人でハッチに並び……

「ライトニング3、エリオ・モンディアル」

「ライトニング4、キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ」

「ライトニング5、コウタ・エルザード」

「「「行きます！！」」」

そうして、手を繋いだまま三人一緒に降下する。

「これからよろしくな……ジェミニ！」

「ストラーダ！」

「ケリュケイオン！」

「「「セットアップ！」」」

≪≪≪スタンバイ・レディ≫≫≫

俺達もそれぞれのデバイスを展開し、リニアレールの最後尾に着地する。

――リニアレール・後方――

「……もしかして」

エリオが自分のバリアジャケットが変わってるのに疑問を持ち、キャロも自身のバリアジャケットを見つめてる。……俺は製作の段階で見たんで知ってたけど……

『デザインと性能は、各分隊の隊長さん達のを参考にしてるですよ、少し癖はありますが高性能です』

エリオの疑問にリインさんが通信で答える。ちなみに、俺のジャケットは暗緑色のシャツに紺色の長ズボン、そしてエリオと同じ白色のロングコートだ。

……設計段階ではエリオと被らないように……コートを黒にという案もあったんだが……なぜか黒だけは駄目な気がしてエリオを同じものになった。

以前は一つだった腰のポーチも、両サイドに一個ずつになっている。

っと……考え事してる場合じゃないな。

ガジェットがこちらに気が付き、車両の天井を壊し上がってくる。
俺は牽制のために、ショートバレットを連射する……が！
「……すげえな」
今までとは桁違いの早さと密度で生成された弾は、ＡＭＦで弱まって尚、ガジェットを一撃とはいかないものの、一体に付き3発ずつ『同じ個所』に着弾し破壊する！
「一発も外れないとは……自分で製作に絡んどいてなんだけど、凄いなお前……魔力の圧縮効率も、速度も前のと比べ物にならない……」
生まれて初めての誘導弾に、少し感動しつつジェミニに話しかける。
≪私は、マスター唯一人を全力でサポートするために生まれましたから≫
少し硬い様子で返すジェミニ。
「そっか、助かるよ。今まで前衛に当たらないように打つのが大変だったからな」
≪お役に立てて、光栄です≫
さて……続けていくか……
「エリオ！前衛を頼む……内部に切り込んでくれ！キャロ！俺と一

緒にエリオを後方でサポート！エリオの手が回らない位置の敵から優先して攻撃だ！」

「「はい！」」

二人に指示を飛ばし、前方を確認すると……スバルが何やら飛び出していた……なにやってんだアイツ

っと、エリオが突っ込む前に上にあがってるのを全滅させないとな……

俺はポケットから鉄の玉を取り出し前に広げるように投げ、デバイスを構えると、

≪スクラップバレット≫

ジェミニが状況を判断し、即座に術式を発動する……ホント俺にはもったいない位の性能だ……

――リニアレール・前方――

≪ヴァリアブルバレット≫

「シュート！」

ティアナの放った弾が、ＡＭＦを突き抜けガジェットを破壊する。

「うぉおおお！」

スバルはガジェットの開けた穴から内部に突入し、リボルバーナックルでガジェットを一体破壊する！

続けざまにもう一体破壊し、内部のガジェットからの攻撃をよける！

≪アブソーブグリップ≫

マッハキャリバーがグリップ力を高める魔法を発動し、スバルは壁を走る！

「リボルバーシュート！」

目の前のガジェットに狙いを定めリバルバーシュトで破壊する……が！同時に天井も破壊してしまい、その勢いでスバルも外に放り出される！

「う、うわわ……」

≪ウィングロード≫

するとマッハキャリバーがウィングロードを展開する！それに乗り別の車両の屋根へ着地

「……うわぁ……マッハキャリバー……お前って、もしかして……かなり凄い？加速とか、グリップコントロールとか……それにウィ

ングロードまで」

≪私は、貴女をより強く、より速く走らせる為に作りだされましたから≫

「……うん！……でも、マッハキャリバーはＡＩとはいえ心があるんでしょ？だったら……ちょっと言い換えよう！……お前はね、私と一緒に走るために生まれてきたんだよ」

≪同じ意味に感じます≫

「違うんだよぉ……色々と」

≪考えておきます≫

「うん！」

デバイスと会話を終え、スバルは再びリニアレールの内部へと入る。

その頃、内部でティアナは、リニアレールを停止させるためケーブルを破壊していた。

『ティアナ！どうです？』

「駄目です……ケーブルの破壊……効果なし！」

『了解！車両の停止は私が引き受けるです。ティアナはスバルと合

流してください』

「了解！」

≪ワンハンドモード≫

リインとの通信を終え、ティアナクロスミラージュを一丁に変え、スバルと合流するために進む。

「しかし……さすが最新型、色々便利だし、弾体生成までサポートしてくれるんだね」

≪はい、不要でしたか？≫

ティアナは走りながらクロスミラージュと会話する。

「アンタみたいに優秀な子に頼りすぎると、私的にはよくないんだけど……でも、実戦では助かるよ」

≪ありがとうございます≫

――六課・ロングアーチ――

『スターズF、4両目で合流！ライトニングF10両目で戦闘中』

「スターズ1、ライトニング1、制空権獲得」

「ガジェット？型、散開開始……追撃サポートに回ります」

「ごめんな！おまたせ」

リインからの通信、状況を確認しながら告げる通信スタッフ。そこへ聖王教会からはやてが戻ってくる。

「八神部隊長！」

「おかえりなさい」

「ここまでは、比較的順調です」

「うん」

「ライトニングF……8両目に突入――――――エンカウント！新型です！」

――リニアレール・８両目――

俺達の目の前には、さっきまでのガジェットの数倍はある大型のガジェットが居た。

ガジェットは俺達を確認すると……アームを伸ばし攻撃を仕掛けてくる！後方へ飛び即座に術式の準備にはいる！

「カートリッジロード！」

俺はカートリッジを、４発ロードしソニックバレットの準備時間を短縮する！

「フリード！ブラストフレア！」

「キュクウゥ！」

「ファイア！」

アームに向かってフリードが炎弾を放つが、弾かれ崖に当たる！

俺は本体が見える今で移動し……

「ソニックバレット！」

≪ソニックバレット≫

俺の持つ最大の魔法を放つ……すさまじい速度で弾はガジェットに向かい直撃する。

「なっ！？」

だが……ガジェットが少しへこんだだけで……ほぼノーダメージだった……

「うりゃあぁぁ！」

エリオが続くように、ストラーダの先端に魔力をこめ、斬りかかるが、装甲に止められる！

「くっ……硬っ……」

ガジェットのレンズ部分が光を放つ！

「エリオ！離れろ！」

「え！？」

瞬間、ガジェットからＡＭＦが展開されストラーダの魔力刃を消し、後方のキャロの魔法陣も消滅する！

「ＡＭＦ！？」

「こんな遠くまで……」

「大型な分……出力も大きいのか……エリオ！俺もそっちに行く！」

このＡＭＦ内じゃ……俺の魔力弾じゃどうすることもできない！……フルバックのキャロも同様だ……

俺はエリオの居る内部へ向かう！

エリオはストラーダの両端を掴まれ、ガジェットと引き合いをしている！

俺はエリオの横に降りガジェットと向き合う！

「あ、あの……」

「大丈夫！任せて！」

キャロが上から心配そうに覗きこみ、それに気付いたエリオが返事をする……くそ、どうすれば……

「エリオ！振り払えるか？」

「はい！」

エリオはアームを振り払い、ガジェットの後方へ飛ぶ！

ガジェットはエリオを追うようにレーザーを放ち、２本のアームの内一本を俺に向け振るう！

「くぅ！？」

それを何とか防御するが……少し後方に飛ばされる！

まて、もう一本のアームは！？

「うわぁぁぁ！？」

「エリオ！？」

「！？」

エリオがアームに吹き飛ばされ壁に叩きつけられる！……起き上がらない！？

そのままガジェットはアームでエリオを掴み上げ……外に……まずい！

俺は一本のアームの攻撃をかわしながら、銃剣を一丁に変え屋根の上にでる！

丁度エリオが投げ出されそうになっていた！？

「エリオ！」

そのままエリオの方に走り、空中でエリオキャッチするが……視界に映るのはこっちに向かって伸びるアーム！

「っ！？」

なんとか銃剣で防ぐも……そのままリニアレールのから弾き飛ばされる！

どうする！……この高さ……エリオを抱えたまま浮遊魔法で着地で

きるか……無理だ

ホールディングネット……この速度じゃ間に合わない！

……なんとか、エリオだけでも……

「エリオ君！コウタさん！」

声に反応してそちらろ見ると……目に映ったのは……こちらを追うように、飛び降りてきているキャロの姿だった……

――六課・ロングアーチ――

「ライトニング４！飛び降り！ちょ！あの三人……あんな高々度でのリカバリーなんて！？」

「いや……あれでええ……」

「……そっか！」

はやての言葉にシャーリーが反応する。

『そう、発信源から離れればＡＭＦは弱くなる……使えるよ、フルパフォーマンスの魔法が！」

――リニアレール付近――

キャロｓｉｄｅ

弾き飛ばされたエリオ君とコウタさんを追って私も飛び降る。

私は魔力で落下するスピードを上げ、コウタさん達に近づき手を伸ばす……

守りたい……私に優しくしてくれた人を……私を一人じゃないって言ってくれた人を……私に笑いかけてくれる人達を……自分の力で……守りたい！

そのまま、驚いたような顔でこっちを見ているコウタさんの手を掴み、ケリュケイオンを起動させ、魔力で浮遊する！

そのまま必死で二人を抱きしめる

そして一緒に降りたフリードを見つめ……

「フリード……不自由な思いさせててごめん……私ちゃんと制御するから……行くよ！」

キャロｓｉｄｅ　ｅｎｄ

キャロが飛び降りてきたのには驚いたが、それ以上に3人を浮遊させた事に驚く……

キャロは俺とエリオをしがみつく様に抱きしめ……フリードに語りかける。

「蒼穹を走る白き閃光、我が翼となり、天を駆けよ。来よ、我が竜フリードリヒ……竜魂召喚！」

キャロの詠唱が終わると、フリードが白い巨大な竜へと変わる！意識を取り戻したエリオも俺と同じで言葉が出ず目の前の光景に見入

る……

そのまま、フリードは俺たちを背に乗せ……リニアレールを追う……

――リニアレール・5両目――

「あれが……」

「フリードの……本当の姿……」

「……かっこいい」

リニアレールの上でスバル、ティア、リインはフリードの真の姿を見ながら話す。

「あっちの三人には、もう救援はいらないですね。……さ、レリックを回収するですよ」

「「はい！」」

リインの言葉に二人は答え重要貨物室へ向かう。

――リニアレール付近――

「すごい……」

「……ああ」

俺とエリオはようやく呆けていた状態から戻り声を出す。てか、抱きしめられたままなんだけど……

「キャロ……そろそろ離してもらっていいかな？」

「え？……あ！？……ご、ごめんなさい」

「あ！……うん、そんな……こっちこそ」

俺達を抱きしめた体勢のままだったのを思い出し、顔を真っ赤にして離れるキャロ、同じく顔を赤くして返すエリオ……微笑ましいけど……

俺とエリオは、起き上がりフリードの背に立つ。音が聞こえリニアレールの天井をガジェットが突き破る。

「さあ、それじゃあ……反撃と行くか！」

「「はい！」」

俺達はリニアレールの上に出てきた大型ガジェットに向き直る。

「行きます！フリード！ブラストレイ……ファイア！」

フリードの口に膨大な魔力が集まり、ガジェットに巨大な炎が向かう！

炎はガジェットのアームを吹き飛ばすが、本体を破壊するには足りない……

「やっぱり……硬い」

「あの装甲形状は砲撃じゃ抜きづらいですね……」

「そうだな、エリオ！いけるか？」

「はい！」

「キャロ！エリオにフィールド攻撃力のブーストを！速度は俺がやる！」

「はい！」

「我が乞うは、清銀の剣。若き槍騎士の刃に、祝福の光を……」

≪エンチャントフィールドインベイド≫

「武きその身に、力与える祈りの光を！」

≪ブーストアップストライクパワー≫

「ツインブースト！スラッシュ＆ストライク！！」

ブースト魔法の同時発動……ホントすごいなキャロは……

俺はキャロに続く様に詠唱を開始する。

「我が乞うは、疾風の翼。若き槍騎士に、駆け抜ける力を……」

≪ブーストアップアクセラレイション≫

３つのブーストを受けたエリオは巨大な魔法刃を作り、突撃の態勢を取る。

「一閃必中！……でりゃぁぁぁぁ！！」

叫び声と共にストラーダのバーニアを噴出し……一直線にガジェットに突っ込み貫く！そしてそのまま上に切り抜きガジェットを破壊する！

「やった！」

「ああ……お疲れ様、二人とも」

――六課・ロングアーチ――

「車両及び、上空のガジェット反応……すべて消滅！」

「スターズF、無事レリックを確保！」

『車両のコントロールも取り戻したですよ。今止めます』

「ほんなら、ちょうどええ。スターズとリインの三人はヘリで回収してもらって……そのまま中央のラボまでレリックの護送をお願いしようかな」

『はいです』

「タイトニング達はどうします？」

「現場待機、現地の局員に事後処理の引き継ぎ……よろしくな」

――リニアレール付近――

フリードの背で俺達は、スバル達を見送っていた。この後は現地職員への引き継ぎがある。

「二人とも……本当に頑張ったな……ありがとう……二人が居なかったらあのガジェットを破壊することなんてできなかったよ」

俺はそう言って二人の頭を撫でる。

「そ、そんな！コウタさんの指揮があったからですよ！」

「そうですよ！コウタさんがヘリで声をかけてくれたから……私……」

「ありがたいが、でもまぁ褒められてる時ぐらい謙遜せず受取っておいてくれよ……」

「「……はい」」

俺の言葉に二人は嬉しそうに目を細める。

二人を撫でながら、俺はある一点を見つめる……

俺の目に映るのは遠く……小さな……自然の物ではない魔力反応……

――？？？――

「刻印？９……護送体勢に入りました」

「……ふむ」

モニターの前で白衣を着た男性が、先ほどの戦闘の様子を見ている。

「追撃戦力を送りますか？」

「やめておこう……レリックは惜しいが、彼女達のデータが取れただけでも十分さ……」

モニターに映る女性が、男に提案するが、男は必要ないという。

「それにしても……この案件はやはり素晴らしい。私の研究にとって、興味深い素材がそろっている上に……」

男はモニターを操作し、エリオとフェイトを映す。

「この子達を……生きて動いているプロジェクトＦの残滓を、手に入れるチャンスがあるのだから……」

そこで男は再びモニターを操作し、コウタを映す。

「だが……こいつは……何者だ……」

「その男ですか？……資料を見る限り、優秀ではありますが……特に目立ったところはないように思います」

「ああ……私が興味を抱くような存在ではないはずだ……だが何か気にかかる……一応この男の詳細な情報も集めておいてくれ……」

「わかりました」

「ふ、ふはははは……これから……楽しくなりそうだ……」

第十七話「厳しい言葉と優しい思い？」（後書き）

…一万字…越え…だと…２話に分ければよかったＯＲＺ

リスカさん、感想ありがとうございます。今回はコウタはそこそこ主軸にからんでおりました！

黎音さん、感想ありがとうございます。次回はコウタ中心のオリジナル話になる予定なので出番は多めです。

只野飯陣さん、感想ありがとうございます。クロスの件ありがとうございます。私のキャラはよそで使って頂いて全く構いませんｂ

ただ…こちらがストーリーの関係上クロス返せる可能性が低いのでご了承ください（そのうち番外編とかでやるかも？）

第十八話「外出と無限書庫？？」

初めての任務は、やはり大変なものだった……

新しい愛機と共に乗り越えていく皆……

知らぬ場所で動き出す欲望……

戦いは俺に、一つの課題を提示する。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～孤独の歌～始まります。

――六課・寮――

初出動を終え、事後処理を終えた俺は、自室で一人考え事をしていた。

ちなみに、俺の部屋は一人部屋だ。六課内男性局員の人数は偶数な

のだが、エリオとキャロはフェイトさんの保護児童という事で、同室になっているため、残りの男の中で唯一のフォワードの俺が一人部屋になった。

≪マスター、お休みになられないのですか？≫

ジェミニが部屋の中央に座って、考え事をしている俺を心配して話しかけてくる。

「ああ……少し考えたい事があってな」

≪今回の出動の事でしょうか？≫

ジェミニの言う通り、俺は今回の六課での初出動について考えていた。

今回の任務は、俺にとって……あまりいい結果とは言えなかった。

「なあ……ジェミニ、正確に答えてもらいたいんだが……」

≪なんでしょうか？≫

「俺がもし、今回の大型ガジェットと……1対1で対峙した場合……俺の勝率は……」

≪……5％に満たないかと、思われます。捕縛や逃走が目的ならまた変わってくると思いますが、破壊するという意味では……ソニックバレットを同箇所に……最低でも5発以上当てる必要があります≫

そう、俺が考えてるのは今回遭遇した大型のガジェット……？型と

呼ばれるタイプの事だった。高出力のＡＭＦ……硬い装甲……あれからいくら考えても、俺の使える魔法では戦う術がなかった。

「じゃあ……エリオとキャロが二人で戦った場合は？」

≪竜魂召喚が成功する前提で、７０％ぐらいでしょうか≫

「なら、エリオと俺、キャロと俺のどっちかのタッグで戦う場合は？」

≪前者は……ＡＭＦ範囲外に逃れる術が少なく、マスターの補助魔法では装甲を突破するほどの力は与えられないと推測します。後者の場合は、前者と比べればまだ可能性はありますが、マスターの攻撃魔法に対象を破壊するだけの力がなく、白竜頼みになるかと思われます≫

ジェミニの分析は、正確だった。俺の魔法はＡＭＦを持つ敵に対してはむしろ有利と言っていい。攻撃を届かせるという意味では、簡単だからだ。

だが、俺は？型に対してさえ、一撃で仕留める事の出来る魔法は少ない。……倍のカートリッジを使ったソニックバレットすら弾く装甲に対して……なすすべがない……

「……そうか」

≪もうしわけありません≫

「いや、正確に応えてくれてありがたいよ」

≪……はい≫

もしこれから、あれ以上のガジェットが現れたら……俺は仲間を守ることは……出来ないかもしれない。

「お前の言う通り、俺には……あの装甲を破れる魔法がない。直接戦闘においても……エリオほど突貫力もない……」

≪唯一考えられる手段としては、ソニックバレットの数倍の魔力圧縮弾を放つ方法ですが……≫

「時間が……かかりすぎるな、カートリッジを全部使って無理やり……魔力を得ても……数分はかかるか……」

≪そうですね……収束魔法並みの魔力量が必要です≫

嫌だ……『あの時』みたいに何もできないのは……自分の無力さを実感するのは……なにか、考えないと……

『あの時』は、なのはさんのおかげで失わずに済んだ……でも次は失うかもしれない。

「収束魔法か……集めるだけなら得意なんだが……放出することはできないしな」

その時に何もできないのは嫌だ。あんな思いは……二度としたくない……

≪はい、収束した魔力を圧縮できればいいのですが……そうですね、近接系の魔法を増やしてみるというのは？≫

これから先の状況に対応できる手が欲し……うん？

「……ちょっと待て、お前今何て言った……」

≪え？……近接系の魔法を……≫

「その前だ！」

≪収束した魔力を圧縮できればいいのですが……ですか？≫

収束した魔力を圧縮……考えた事がなかった。いや、収束した魔力は収束魔法で打ち出すっていう先入観があった……

「収束した魔力を圧縮……確かにそれが可能なら……そう！例えば、収束した魔力を……砲撃としてじゃなく弾として打ち出すなら……魔力を継続して放出する必要もない。発射の瞬間にだけカートリッジで無理やり魔力を上げれば……」

≪た、確かにマスターのおっしゃる通り、それが可能なら魔力放出量に関係なく、膨大な魔力の弾を作る事が出来ると思いますが……そんなことが可能なんでしょうか？≫

「……わからない」

確かに、そんな話は聞いた事がない。というかそもそも魔力を圧縮して運用する魔導師は少ない。俺のもほぼ独自の術式だ……だが、自身の魔力を圧縮できるなら……収束した魔力を圧縮できても、おかしくはないはずだ。

「……試してみる価値はあるな」

≪マスター？≫

俺は立ち上がり、寮の外へと向かった。

――林――

「――！？うわっ！？」

≪マスター！？≫

何度目か分からない失敗……俺は魔力が拡散する際の衝撃で吹き飛ばされる。

「っ！？……くぅ……また失敗か」

結論から言ってしまえば……収束した魔力を圧縮することは可能なようだ。だが、上手く形にする事が出来ない。何度か術式を変更し

て繰り返しているが、一向に進展してなかった。

≪これで、マスターが使っている……圧縮の術式は全部試し終わりましたね≫

「ああ……どれも基本は俺の魔力を圧縮する事を、前提にしているせいか……これだけの魔力量を圧縮する事が出来ない……」

≪そうですね……この様子だと、今使っている物を流用するより……一から専用に組み直した方がいいのかもしれませんね≫

「そうだな……だが、そうなると一体どういう風に組んだらいいのか……」

≪確かに、魔力の圧縮はあまり見ない術式ですしね……≫

なにか、参考になる資料でもあればいいんだけど……ただでさえ珍しい魔力圧縮……本屋などで手に入るとは思えない。……まてよ……本……

「そうだ……あそこなら……」

≪マスター？≫

「無限書庫になら……魔力の圧縮について書かれた本があるかもしれない」

無限書庫……時空管理局次元航行部隊の本部にある施設で、管理局・管理世界の膨大な情報が書籍という形で保存されている場所だ。

やっと見えた一筋の光明……これを取りこぼしたくはない。

俺は一度寮に戻り、身なりを整え……部隊長室へと向かった。

――六課・部隊長室――

コンコン

「はい？」

「夜分遅くにすみません。コウタ・エルザートです」

「入ってええよ」

「失礼します」

八神部隊長の返答を受け、俺は室内に入る。八神部隊長は書類を見ていた手を止め、俺の方を向く。

「それで、こんな時間にどうしたん？」

「はい。勝手な事だと思うのですが、次回の訓練のない日に外出の許可をいただきたいのですが……」

現在は、基本２４時間勤務のため外出するには、部隊長に理由を話し許可をもらわなければならない。

「外出？それはええけど、どこへいくん？」

「無限書庫へ行きたいのですが……」

「無限書庫？」

「はい、俺の使っている……魔力の圧縮の術式は、殆どがオリジナルで……それを改良するためのヒントが欲しいんです」

「ふむ……確かに、コウタの魔法はちょっと特殊やし……六課内にもアドバイスできる子はおらんな……」

八神部隊長は何かを考えるように、俺を見ている。

「……」

「うん！ええよ……外出、許可するわ」

「本当ですか！ありがとうございます！」

「……そんな、思いつめた顔されたら……駄目っていうわけにもい

かんしな～」

「え？」

八神部隊長の言葉に、少し驚く……そんな顔をしてたんだろうか……

「後、訓練のない日って言ってたけど……明日でええよ。なのはちゃんには私の方から言っとくから」

「え？……よろしいのですか？」

「うん……すぐにでも行きたいって、顔に書いてるで、それに……コウタやったら大丈夫やろ」

「……大丈夫とは？」

「普段、訓練はめんどくさい～とか言ってるわりに、コソコソ影でなんかやってるみたいやしな」

「！？」

八神部隊長は意地の悪そうな笑顔で、そう言う……ばれてたのか……

「まぁ……なにを焦ってるのかは、分からんけど……あんま思いつめて無茶はせんようにな？」

「……はい！」

「うん！良い返事や、じゃあ本部の転送ポートに連絡入れとくから……時間の方は端末に転送するようにしとくから」

「はい！ありがとうございます！」

俺は八神部隊長に深く頭を下げる。

「ああ、それと……無限書庫に付いたら、ユーノ君……ユーノ・スクライア司書長に聞いたらええ、私の方から連絡しとくから、力になってくれると思うよ」

「はい！」

「それじゃ、初出動で疲れてるやろ？戻って休み」

「はい！ありがとうございました！……失礼します」

俺はもう一度、八神部隊長に頭を下げ、部隊長室を後にする。

はやてｓｉｄｅ

私は、あの子の事……なんも分かってなかったんかもしれない。

いつも冷静で、何でもそつなくこなす……そんな風に思ってた。

だけど……夜こっそりと自主練をしてたり、さっきみたいな思いつめた表情をしたり……初めの印象とは、ずいぶん違って見えた。

あの子は、『何か』に苦しんでた。でも、私にはその『何か』が分からん。

やれやれ、部下の心情ももっとしっかり把握せんとダメやな……

「……ほんま、私は部隊長として……まだまだやな」

私は、誰もいない部隊長室で一人つぶやいた。

はやてｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――翌日・ミッドチルダ中央区画――

俺は部隊長の好意で、休みをもらいクラナガンを地上本部に向かって歩いている。

「思ったよりだいぶ早く着いちゃったな……」

≪そうですね、転送ポートの予約時間までまだ1時間弱あります≫

どこかで、時間とつぶすか……そう考えながら歩いていると……

「――!?」

「!?」

曲がり角で銀髪の小柄な少女とぶつかった。体格の差もあってか俺はよろけただけだったが、少女は尻餅をついていた。

「ごめん！少し考え事をしていて……」

俺は慌てて少女に手を差し出す。

「……いや、こちらも不注意だった……すまない」

少女はそう応え、その手を取ろうと顔を上げて……目が合う……

眼帯？……いやそれよりも……あの目……

俺は少女の目を見て、硬直する。同様に、少女もこちらを見て硬直している。

根拠なんてなかった……ただなんとなく……自分と似てるって……

そんな風に思った。

チンクｓｉｄｅ

私は……ドクターの後の計画のため、ドクターに許可をもらい地上本部を確認に来ていた。

資料で見るのと、実際に見るのでは多少誤差があるため、それを修正するためだ。

確認を終え、戻ろうと歩いていると、曲がり角で男とぶつかった……私とした事が不注意だった。

「ごめん！少し考え事をしていて……」

男は慌てた様子で私に手を差し出してくる。

「……いや、こちらも不注意だった……すまない」

謝罪を口にし、男の手を取ろうと顔を上げて……硬直する……こいつは……ドクターが興味を持っていたあの部隊の！？

その男の顔は、資料で見た事があった。……まずい相手と会ってしまった。……どうするか……

ここで騒ぎを起こしてしまえば、後の計画に支障が出るかもしれない。幸い相手はこちらの事を知らないはずだし、ここは事を荒立てずにすませるか……

それにしても……なんだこの男……妙な気分だ……

なんというか、根拠や理由などないが……私と似てるような気がした。

相手も同様の事を考えてるのか、こちらを見て硬直している。

「……あ！ごめん！」

硬直から立ち直った男が、私の手を取り立ち上がらせる。

「……あ、ああ……すまん」

立ち上がり礼を言うが……その後、気まずい沈黙が流れる。

――数分後――

私は、先ほどぶつかった男……コウタと一緒にオープンカフェに座っていた。

互いに言葉が見つからず硬直していた私達に、チラシ配り女性が近づいてきて……

チラシを受け取ったコウタが、ぶつかったお詫びにと言ってカフェに誘ってきて……流されるまま了承してしまった。……考え事で頭が埋まっていたとはいえ……迂闊だった。

テーブルにつき、互いに簡単な自己紹介を終え……再び沈黙。

あまり長くこの状況で居るのもまずい、早めに茶だけ飲んで切り上げよう……

――数十分後――

「――というわけなんだけど」

「ふふ……なるほど、それは興味深いな……だが私が思うに――」

……どうしてこうなった。

テーブルにつき、暫くは互いに沈黙していたが……その後、ポツポツと世間話を始めると……話題に詰まることなく今に至るまで、話し続けている。

最初に感じた、「似ている」という感覚は間違いではなかったようで、私とコウタは驚くほど意気投合した。

もちろん似ているといっても、処々に違いはあり、考え方、感じ方、など微妙に違ってはいたが……逆にそれが話を盛り上げる結果になり、話題は進む。

正直……悪い気分ではなかった。

こちらの伝えようとする事が、労せず伝わる為、話しやすい。

こんなに誰かと一対一で、話題が切れることなく話し続けたのは……初めてかもしれない。

食べ物の話、コウタの仲間の話、私の姉妹の話、最近あった出来事の話……話題は終わることなく続き、まだ出会って間もないのに……コウタの事はまるで数年前から知ってるように理解できた。

私は一体なにをやってるんだ……こいつは……敵だ……いずれ必ず相対す……その時に手が鈍るような事になってはいけない……

頭ではそう考えるが、私の口はまるで別の生き物のように話を続ける。

私は本来……あまり話す方ではない、自分から話題を振るより、相手の振ってきた話題に応える方が圧倒的に多い……はず……だったんだが……

なぜかコウタ相手だと、そんなことはなく、寧ろ進んで自分から話題を出しているようにさえ感じる。

このままだと、話してはいけない内容まで話してしまいそうな気が

する。……何とか話を切り上げないと……でも、どうやって……

私がそんな事を考えながら話を続けていると、コウタがふと、時計を見て慌てたように、

「え!?もうこんなに時間が経ってたんだ……ごめん!チンク!俺、この後に行かなきゃいけないところがあって……」

私もつられて時計と見ると……すでに一時間近く経っていた……早い……

「そうか……長く話し込んでしまったな……すまない……」

私は残念そうな様子で話す。……なぜ残念がる、ついさっきどうやって切り上げるか……思案してたというのに……

「いや、楽しかったよ!……出来ればもっと話したかったんだけど……」

コウタは伝票を持って立ち上がり、残念そうに言う。

「ふふ……急ぐんだろ?……遅れてしまうぞ」

「ああ、それじゃあ!チンク……またな!」

そう言ってコウタは会計を済ませ……手を振り……駆け足で去っていく……

……またな……か……

次に会う時はおそらく敵同士……

出来る事なら……コウタとは戦いたくはない……でも、きっと無理だ。

コウタは……私と似ているから……

コウタは仲間の為なら、自身の命すら……何の躊躇いもなく戦いの場に投げだすだろう。

そして……それは私も一緒だ……

互いがどんなに戦いたくないと思っていても、私は妹達の為、コウタは仲間の為、相対せば……互いにきっと……微塵の躊躇もなく相手に刃を向ける。

――出会うべきでは、なかった――

チンクｓｉｄｅ　ｅｎｄ

1時間前に知り合った少女、チンクと別れ、俺は急いで地上本部に向かっていた。

時間はすでに5分ほど過ぎている。

ぶつかった後、お互いに気まずくなって、沈黙していた状況を変えようと、受け取ったチラシを見てカフェに誘った。

初めは、お互い沈黙してたけど、話し始めるとびっくりするほど気が合った。

誰かと一対一であんなに話し込んだのは初めてかもしれない。

こっちが伝えたい事を、ストレートに理解してくれるので、凄く話しやすかった。

初めに感じた、「似てる」って印象は間違ってなくて、1時間話しただけなのにチンクの事はまるで数年来の付き合いの様に分かった。

もちろん、すべてが似てるわけではなく、所々考え方なんかは違ったんだけど、逆にそれが話を盛り上げ小さな話題でもどんどん広が

っていった。

俺は昔から、自分で話題を振ったりすることはそんなに多くなかったはずなんだけど……チンク相手だと不思議と次々話題が出てきた。

あまり自分の事を話さない俺が……あんなに積極的に自分の事を話すのに、自分自身で驚いた。

ともかく、楽しい時間だった……また時間のある時にゆっくり話したいな……

時間には遅れてしまったけど……

――出会えて、よかった――

第十八話「外出と無限書庫？？」（後書き）

火力不足に対する悩み、見つけた可能性、チンクとの出会いどうしても、後の話の関係上チンクとは早めに出会わせておきたかったので、この回で登場していただきました。

実は、この主人公、考える場面は多いんですが…楽しそうにしてるところは少なかったりします。

リスカさん、感想ありがとうございます。コウタはＢＯＳＳ級の相手にはいいとこがないですね…試験の時のスフィアしかり、前回の？型しかり。

ｙｕｋｉさん、いつも感想ありがとうございます。オリジナルの話は元がないので自由にかけて楽しいです。

第十九話「外出と無限書庫？？」

見つける事の出来た一つの可能性……

地上本部へ向かう道、出会う一人の少女……

楽しい会話と、忘れる時間……

俺は、大急ぎで転送ポートへと向かう。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～孤独の歌～始まります。

――時空管理局本局・無限書庫――

転送ポートに１０分遅れでたどり着いた俺は、すぐに転送してもらい無限書庫へと向かった。

前に一度だけ来た事はあるが……改めてみると本当にすごい所だ。

そこが見えない縦穴の形の施設に、壁一面の本、圧巻の光景だ。

俺は受付らしきとこにいる……金髪の女性……いや服装が男物だから、男性か？……に話しかける。

「すみません」

「はい」

「えと……ユーノ・スクライア司書長を探しているのですが、いらっしゃいますか？」

「ユーノ・スクライアは僕ですが、君は？」

「！？……失礼しました！機動六課所属、コウタ・エルザード二等陸士です！八神はやて部隊長の紹介で参りました」

俺は慌てて敬礼をし、挨拶をする。

「ああ、はやてから聞いてるよ。よろしくねコウタ」

「はい！よろしくお願いします。スクライア司書長」

「ふふ、僕の事はユーノでいいよ」

「わかりました……えと、ユーノさん」

「うん……じゃあ、魔力の圧縮に関する資料だったよね……用意してあるからこっちへどうぞ」

そう言って進みだすユーノさんに、まだ無重力に慣れなくフラフラしながら付いていく……

その先には、ものすごい数の本が積まれていた。

「ここに用意してある物が、魔力の圧縮に関係してるものだね。右側から、魔力の圧縮運用、圧縮した魔力の形状変化……で一番左に2列積んでいるのが、圧縮魔法に関係する資料だよ……片方が通常の圧縮魔法、もう片方が収束系圧縮魔法の資料だね」

「圧縮……魔法!?……そんなものがあるんですか?」

ユーノさんの言葉に驚いて聞き返す俺、圧縮魔法なんてものは初耳だ。

「うん、昔は一括りの魔法として存在していたらしいけど……いくつかの理由で現在は廃れてしまって、殆ど残ってはいないね」

「いくつかの理由……ですか?」

「うん、まず一つ目は……技能としての問題。圧縮魔法を使うには、魔力の圧縮という技能が必要になる上に、収束系の圧縮魔法なら……魔力の収束、魔力の圧縮と二つの技能が必要になることから使い手が少なかった」

「……なるほど」

「次に、発動までにかかる手間の差、収束系の魔法を例に挙げてみると、収束系砲撃が……魔力の収束⇒発射という2段階で撃てるのに対して、圧縮魔法は……魔力の収束⇒魔力の圧縮⇒発射と3段階

かかるために、他の魔法に比べ時間がかかるというのが二つ目だね」

これはよく分かる……確かに他の魔法に比べても、魔力の圧縮って部分を間に挟むため瞬発性に欠ける……

「三つ目……これが圧縮魔法が廃れた最大の理由でもあるんだけど。効果範囲の狭さだね」

「範囲……ですか？」

「そう、広域殲滅に優れた砲撃魔法に比べ、圧縮魔法は単体または小規模にしか影響がないからね。戦術的な面で消費や時間に対して、あまり効率的とは言えなかったみたいだね……」

……要するに収束魔法は、扱いが難しく、発動まで時間がかかり、効果範囲も狭いってことか……今主流の魔法とは真逆だ……先行き不安になってきた……

「……でも、はやてから聞いた話だと、コウタは自身の火力不足を改善するために調べに来たんだよね」

「はい」

俺の不安を見透かした用に、ユーノさんが話しかけてくる。

「なら……圧縮魔法は、コウタの探してる答えの一つとも言えるよ」

「……え？」

「確かに圧縮魔法は扱いも難しいし、時間もかかる……でも、想像

してみて……あれだけの広範囲を撃ち抜く砲撃魔法のエネルギーを、一箇所に固めて撃つ圧縮魔法は……『単体威力』という一点に特化されたものと言えるんじゃないかな？」

「！？」

「とまあ……偉そうに色々言ったけど……僕も昨日はやてに頼まれて調べた程度の知識だから……実際は色々違ってくるのかもしれないけどね」

そう言って苦笑するユーノさん。

「いえ、そこまで調べてくださって……本当にありがとうございます」

「役に立てたのなら嬉しいよ……じゃあ、集中して読みたいだろうし僕は別の場所に居るから……帰る時は念話で知らせてもらっていいかな？」

「わかりました……えと、この本の内容って記録したりしてもかまいませんか？」

「うん、そこにある本に関しては全部軽く目は通してあるから……機密情報なんかはないから大丈夫だよ」

……なんて言ったこの人……この量の本に全部目を通した？……昨日の夜から今までの時間で？

「……あ、えと……ありがとうございます」

「ふふ……じゃあ又後でね」

ユーノさんはそう微笑みながら去って行った。

俺は本の山に向き直り……

「ジェミニ……開いたページ、片っ端から記録頼む」

≪わかりました≫

「後、時間を忘れちゃうと思うから……」

時計を見る……13：23……帰りの予約時間が18時だから……

「18時前になったら教えてもらえるか？」

≪わかりました≫

単体威力に特化した魔法……参考になる事は多そうだ。

――数時間後――

≪――タ――スタ――マスター！≫

「！？」

ジェミニの声が聞こえ、本から意識を戻す。

≪そろそろ時間になりますよ≫

「え？もうそんなに時間が！？」

≪はい、現在時刻１７：４５です≫

……完全に没頭してた。

ここにある本には、収束した魔力の圧縮、圧縮した魔力の形状変化、圧縮を応用した魔法の参考術式など俺の求めている全ての情報があった……なんで今まで着てなかったんだと後悔するほどに……

「そうか……データの記録は？」

≪問題ありません。マスターの開かれた本の内容はすべて映像デー

タとして残してあります≫

「よし……じゃあ、ユーノさんに連絡して戻ろうか」

俺の頭の中は、今読んだ本の術式を応用する魔法のことばっかり考えてた……

俺は今までホント適当に圧縮してたんだと思うほど、その本に書かれていた内容は画期的だった。

早く色々試してみたい……形状変化のバリエーションも増やせそうだ……でもまずは威力のある魔法からだな……いや、むしろ形状で威力を……いやいや……なにも打ち出すだけでなくても……

≪――ター！マスター！！≫

「！？」

≪何を固まってるんですか？≫

……考えるのは後にしよう。また時間忘れそうだ……

「ああ、悪い……」

（ユーノさん、そろそろ失礼させていただこうと思うのですが……）

俺はユーノさんへ念話を送る。

（うん、じゃあそっちにいくから少し待っててもらっていいかな？）

（はい）

一分ほどでユーノさんが何かを持ってやってくる。

「おまたせ……資料は役に立ったかな？」

「はい！すごく」

「それはよかった……本はこっちで戻しておくからそのままで大丈夫だよ……後これを……」

そう言ってユーノさんは何か書かれた紙の束を差し出す。

「……これは？」

「いくつかの簡単な治癒魔法の術式と、コツみたいなものを書いておいたから……コウタは治癒魔法も使えるみたいだし……まぁ、僕が書いたものだからあまり参考にはならないかもしれないけど、役立ててくれると嬉しいよ」

「そ、そんな……役立たないなんて！ユーノさんの魔導師としての腕前は聞いてますし……」

ユーノさんは支援型魔導師でありながら総合Ａランクの魔導師ランクを持っている。

特に結界や治癒は相当な腕前で……探索に至っては並ぶ者が居ないほどだ……

「前線で治癒魔法が使える魔導師は、居るに越したことはないからね……」

「……はい、参考にさせていただきます」

「うん……頑張ってね。よかったら、また今度時間のある時にでもおいで……その時はお茶でも飲みながらゆっくり話そう」

「はい！また来ます」

「うん……っとあまり引き止めちゃ悪いね。それじゃあ……気をつけて帰ってね。なのは達によろしく」

「ありがとうございました！失礼します！」

ユーノさんにお礼を言い、無限書庫を後にする。

そう言えば……転生前は抜きにして……あまり年上の同姓に会う機会ってなかったな……

――地上本部――

地上本部に戻ってきて外へ向かっていると……

「あら？……コウタじゃない」

「え？……オーリスさん！？」

通路でオーリスさんと会う。

「今日はどうしたの？暫くは休みが取れないってメールに書いてあったけど……」

「実は――というわけで、無限書庫にいってたんです」

「なるほど、それで今は帰るところって訳ね……ゆっくり話したいけど私も仕事があるし、また今度ね……コウタはこのままっすぐ帰るつもり？」

「え？あ、はい」

「駄目よ、それじゃあ……無理言って外出させてもらったんだし、さり気なく手土産でも買って帰るのが良い男ってものよ」

「そ、そういうものなんですか？」

「そういうものよ」

……良くは分からないが……オーリスさんが言うならそうなんだろう。

「そうだ！ちょっと待ってね……」

そう言ってオーリスさんは端末を開き操作する。

「数は――ぐらいで……これでよし！」

「？」

「私の知ってるお店に、注文しておいたから……帰りに受け取って帰りなさい」

「ええ！？」

「大丈夫、支払いはこっちに回してもらってるから」

「いあ、そういう問題ではなく……申し訳ないですよ！」

「気にしなくていいの、こういうとこで男としてポイント稼いどかなくっちゃ駄目よ」

……男としてのポイント？

「ああ、それと私から貰ったとかでなく、ちゃんと自分で買ってきたって事にするのよ」

「……結果は変わらない気が？」

「変わるのよ、場所はコウタの端末に転送しておいたからちゃんと受け取って帰ってね」

「何から何まで、すみません……」

「ふふふ、気にしないで……それと、いい娘が出来たら私にもちゃんと教えてね」

「……？」

いい娘？

「それじゃあまたね。父さんも会いたがってたからまた休みの日にでも来て頂戴」

「分かりました。色々ありがとうございます」

良く意味が分からない部分もあったけど……確かに休みを貰ったお礼は必要かもしれない。

≪マスター道のナビゲートは必要でしょうか？≫

オーリスさんと別れ、外に出るとジェミニが話しかけてくる。

「うん……あ、でも先に寄りたいところがあるからその後だな」

≪どこに寄るんですか？≫

「デバイスショップ」

≪デバイスショップですか？≫

「うん……空のカートリッジを発注しようと思ってね」

≪カートリッジですか……でもそれは支給してもらえるのでは？≫

「確かに、訓練や任務で使う物は支給して貰えるけど……自主練で使うのは無理だしな。支給品のを使って訓練や任務で使う時に無い、なんて事にならないように用意しとくんだよ」

≪なるほど……確かに圧縮魔法はカートリッジを多用しそうですしね≫

「魔力を充填するのにも時間がかかるし、多めに発注しとくつもりだ」

≪多めにですか……どのぐらい注文するんですか？≫

今支給してもらってる分が……交換分含め２４本だから……

「……う～ん１００ぐらい？」

≪マスターはこれから……戦争でも始めるおつもりですか？≫

「いや！ほら……再充填してる間も他で使えるようにって……」

≪それでも１００は多すぎますよ……空のカートリッジだけ１００とか……お店に喧嘩売ってるようなものじゃないですか≫

「う～ん……訓練校時代からの行きつけだし……大丈夫だとは思うんだけど……」

≪良くいかれていたお店なんですか？≫

「ああ、お前の前に自分で作ってたデバイスなんだけど……ほら、俺のデバイスは少し特殊な形だから……既存のパーツじゃ相性悪くてな……その店はパーツショップみたいな感じだったから良く利用してたよ」

≪しかし……マスターなら部品ぐらい作れるのでは？≫

「作ってたよ。ただ……カスタムパーツぐらいならともかく……殆ど丸ごと自作になると、手持ちの工具じゃ難しくて……で、そのショップで良く工房を貸してもらってたんだよ」

≪ああ、なるほど……≫

「まぁだから店主とも結構長い付き合いだし……たぶん大丈夫……怒鳴られると思うけど……受注してくれるはず……」

≪それは大丈夫と言っていいのでしょうか？≫

「……さあ？」

――首都クラナガン――

デバイスショップで……何とか発注を終えた俺はオーリスさんに言

われた店の前に来ていたが……

「……ここ……だよな？」

≪はい、データ上ここで間違いありません≫

目の前にあるのは、見るからに高級店と言わんばかりのお店……

店名は「パーラ・デルレ」と書いてある……俺でも知ってる一見さんお断りの会員制超高級洋菓子店……え？聞いた事がある？……気のせいだ。

……ここ確か、ケーキ一つで数千とかだった気が……

恐る恐る中に入ると……高級そうなスーツを着た男性が話しかけてくる。

「いらっしゃいませ。本日はご来店誠にありがとうございます。失礼ですが会員証をお持ちでしょうか？」

「あ、いえ……えと……オーリス・ゲイズさんから……予約が……いってるらしい……のですが？」

慌てながら返す俺……だって店内が明らかに空気違うもん……なにこの店……

「少々お待ちください――はい、コウタ・エルザード様ですね伺っております。それではこちらへどうぞ」

「は、はい！」

「商品の方持って参りますので、申し訳ありませんが……少々お待ちください。その間こちらの用紙に記入いただいてもよろしいでしょうか？」

「はい」

渡された用紙に名前などを書き終えるが……落ち着かずキョロキョロしてしまう。

「あ……あれは……」

一つの商品が目にとまり、ケースの前に行く……これってたしか……

「お待たせいたしました。エルザード様……こちらが商品になります」

そう言って二人の男性が、大きな高級そうな袋を2つ持ってくる……多すぎないか？……オーリスさん、どんだけ注文したんだ……ってかいくらぐらいするんだこれ……

「商品……お間違いはありませんか？」

そう言って脇に居たもう一人の男性が、商品内容の書かれた紙を差し出す。

「えと……ジェミニ？」

≪はい……ケーキ――個、アイス――個……間違いないです≫

恐ろしい数が聞こえた気がするが……

「……大丈夫です」

「では、お会計の方は頂いておりますので、このままお持ち頂いて大丈夫です。後、こちらエルザード様の会員証になりますので、次回ご来店の際はこちらをご利用ください」

「あ、はい」

黒塗りの高級そうなカードを受け取る。

「商品の方重くなっておりますので、お気を付けください」

「分かりました、ありがとうございます」

袋を受け取り……重!?

≪浮遊させますね≫

ジェミニが浮遊の魔法をかけてくれ、重さが消える。

「ありがと、ジェミニ……あとすみません……あそこにあるシュークリーム二つ……購入できますか?」

「はい、かしこまりました。少々お待ちください」

男性は一礼し、商品を取り出し箱に入れる……おいおい、一個ずつ別箱なんですか……

「ジェミニ、荷物頼む」

≪わかりました≫

浮いてる袋から手を離し、財布を取り出す。

「ではこちら2点で、４８００になります」

……シュークリーム1個２４００って……

「じゃあ……これで……」

「はい、確かに」

商品を受け取り袋に入れる。

「それじゃあ、失礼します」

「ありがとうございました。またのご来店をお待ちしております」

浮いてる袋を持って店を出る俺に深々と頭を下げる男性……あ～、緊張した……

オーリスさん何もこんなお店じゃなくてもよかったんじゃ……次に外出した時、買ってくるとか無理だぞこの価格……

――六課・食堂――

戻ってきた俺は、一度自分の部屋によりシュークリームの箱を置いて食堂へと向かう。

日持ちしない物ばっかだし、一度食堂においてから部隊長の部屋に行こうとおもっていたが……

食堂に入ると、丁度夕食時だったのか……隊長達含め殆ど皆いた。

「あ！コウタ！おかえり～」

スバルが俺を見つけ手を振る。……が、とりあえず部隊長への挨拶が先なので無視して隊長達の居るテーブルへ向かう。

「八神部隊長、ただ今戻りました……本日はありがとうございました。」

「お、もどったか……その顔見ると収穫はあったみたいやな。それならよかったわ」

部隊長にお礼を言い。スバル達が居るテーブルへと向かう。

「あれ？コウタ……その手に持ってるのはなに？」

テーブルに近づくとスバルが俺の持ってる袋に気がつき訪ねてくる……

「ああ、これは……パーラ・デルレのケーキとアイス……」

「「「「「「「「「「！？」」」」」」」」」」

瞬間、殺気に似た気配！……振り向くと食堂に居るほぼ全員がこっちを見ている。

「パーラ・デルレ……ってあのパーラ・デルレだよね……」

スバルが俺の持ってる袋を凝視しながら聞く……向き直り周りの視線に威圧されながら応える……

「あ、ああ……休みを……貰ったんだし……六課の皆に手土産に……って……」

「「「「「「「「「「ガタ！？」」」」」」」」」」

背後で、一斉に席を立つ音が聞こえる……怖くて振り向けない……なんかまずい事言ったか？……スバルも肩を震わせてるし……

「……コウタ……」

「は、はい！」

スバルが絞り出すように……何かを言う……思わず背筋を伸ばす。

「コウタは……ほっっっんとうに、私の自慢の幼馴染だよ！！」

「……は？」

急に目を輝かせ、大声で何かを叫ぶスバル……何言ってんだコイツ……そう思いティアの方を向くと……

「……アンタ……なかなか気がきくのね……その……正直、見直したわ……」

視線は手の袋を向いたままなんか言ってる……

助けを求めるようにエリオとキャロを見るが……二人はキラキラした目で俺の手の袋を見ている。

ポンっと肩を叩かれ……背後を向くと……ヴィータ副隊長が居て……その周りにほぼ全員が居る……そして、ヴィータ副隊長は満面の笑みで、

「私はな……初めて見た時から……お前はやる時はやる男だと思ってた！」

えぇえええ！？

「確かに……少し見ない間に……一人前の男の顔に近づいた気がするな」

シグナム副隊長も何か頷きながら……訳の分からない事を言ってい

る。

「ほんま……男の子って……知らんうちに成長するんやな……部隊長として嬉しいわ」

「男子三日会わざれば刮目して見よとは……ホントその通りね～」

なんか言ってる八神部隊長……後、今朝会いましたよねシャマル先生……

「私……コウタみたいな教え子を持てて……幸せだよ」

しみじみ言うなのはさん……続けるようにフェイトさんも頷き……

「うん、私もコウタの分隊の隊長である事……誇りに思うよ」

ちょっと待て……手土産一つでどこまで上がるんだ俺の評価……てか今までどんな風に思われてたんだ!?

しかも全員、なんか言いながらも視線は俺の手の袋に集中してるし……なんかじりじり近づいてきてるし!

身の危険を感じた俺は、近くのテーブルに袋を置き……少し下がってから。

「じゃ……じゃあ……ど、どうぞ……召し上がってください……」

声をかけ即座に振り向き逃げ出す!

――瞬間、そこは戦場と化した。

選ぶ順番決め……じゃんけんという名の戦争を遠目に眺めつつ……思う。

食堂の職員も全員参加してるけど……俺の夕食は？

「キュキュク、キュイキュ～？（コウタさん、私には～？）」

頭に乗ったフリードは俺に聞いてくる……ケーキとかよりはやっぱ肉とかがいいのかな？

「こんなのでよければあるけど……」

そう言ってポーチからビーフジャーキーを取り出す。

「キュ♪（わ♪）」

「2本あるし……一緒に食うか？」

「キュイ！キュキュク、キュルキュイ～♪（うん！コウタさん、大好き～♪）」

横目で戦争を眺めながら……フリードと一緒にビーフジャーキーを食べる。

当分……夕食にはあり付けなさそうだ……

――数時間後―六課・寮――

長く続いた戦いも終わり、それぞれ自室に戻っていた。

俺は２つの箱を持ちスバル達の部屋へと行く。

コンコン

「は～い――あ、コウタ！さっきはありがとう♪……それでどうしたの？」

「ああ、えとティアも居るか？」

「居るけど……こんな時間にどうしたの？」

「これを渡しにな……」

そう言って二人に一つずつ箱を渡す。

「これって……」

「ほら、前二人とも、あそこのシュークリーム食べたがってただろ……思い出したから一緒に買ってきたんだけど……あまりに凄い戦いに渡すタイミングがなくてな……」

「コウタ……」

スバルが感極まったような様子で……シュークリームを机に置き……え？

――！？

なんだ……今の感覚……まるで全身がこの場から逃げろと……叫んでるような……

逃げようとするが……一歩遅く……

「コウタ！ありがと～～～～～♪」

スバルが『全力』で抱きついてきた。

メキメキと体が軋む音を立てる。

「ぎゃぁあああ！？……ちょっと……おま……え……」

必死に逃れようとするが、スバルは微動だにしない……

魔力で強化されてるとはいえ、素手で鉄の塊を粉々に破壊するような腕力を持った女だ……

抱きついてるんじゃなく……これは紛うことなき『さば折り』だ……

「シュー……クリー……ム……早……食べないと……暖か……なる……ぞ」

絞り出すように声を出す……

「あ！そっか！」

やっと解放されその場に崩れ落ちる俺……良く耐えた俺の体……

「ホントありがとうね！コウタ♪」

「……ありがと」

「あ、ああ……じゃあ……また、明日……」

「うん！おやすみ～」

「じゃあ、またね……あれなら、医務室行きなさいよ」

そう言って二人は部屋に戻る……出来れば……術式試してみたかったけど……無理。

――這うように部屋に戻った俺は……そのまま意識を失った――

第十九話「外出と無限書庫？？」（後書き）

というわけで、主人公は圧縮系魔法という道を見つけます。…欠点も多いですが

次回ようやく高火力魔法が？

リスカさん、チンクはいいキャラですよね～悩むって意味では主人公はティアナとも似てるかもしれませんね。

鉛のクワガタさん、感想ありがとうございます。色々欠点はあれど一点特化型の必殺技…ロマンがあります。

ｙｕｋｉさん、早く表に出させてあげたい気持ちと…結局おいしいとこは取られるところに萌える心…どうしたものでしょうかｗ

ジョン１１７さん、感想ありがとうございます。新技は早ければ次回に形になる予定です。…修行編の後の技披露って燃える展開ですね。

第二十話「進展と虚栄？？」（前書き）

新年会にて二日酔い…更新が遅れまして申し訳ないＯｒｚ

第二十話「進展と虚栄？？」

無限書庫で見つけた道……

無限書庫から帰って二週間が経ち……

訓練も新しい段階へと進む……

そう……あの人との訓練が始まった。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～孤独の歌～始まります。

――六課・訓練スペース――

「おら、行くぞ！てやぁぁぁぁ！」

森林の表示された訓練スペース、ヴィータはハンマーを振りかぶりスバルに迫る。

「マッハキャリバー！」

≪プロテクション≫

スバルは右拳の前にバリアを張り、ハンマーを受け止めるが、その威力は強く少しずつ後ろに押される。

「でりゃぁぁぁ！！」

「く！？うわぁぁぁぁ！」

ヴィータがハンマーを振りかぶり二撃目を放つと、スバルは受け止めきれず後方の木まで吹き飛ばされる。

「っぅ……いたた」

「……なるほど、やっぱりバリアの強度自体はそんなに悪くねえな」

「……ありがとうございます！」

ヴィータの言葉を受けスバルは嬉しそうにヴィータの元へ移動する。

「私やお前のポジション……フロントアタッカーはな、敵陣に単身で切り込んだり、最前線で防衛ラインを守ったりが主な仕事なんだ。防御スキルと生存能力が高いほど、攻撃時間を長くとれるし、サポート陣にも頼らねぇで済むって……これはなのはに教わったな」

「はい！ヴィータ副隊長」

「受け止めるバリア系、弾いて反らすシールド系、身にまとって自

分を守るフィールド系、この三種を使いこなしつつ、ポンポンふっとばされねぇように、下半身のふんばりと、マッハキャリバーの使いこなしを身につけろ」

「頑張ります！」

≪学習します≫

その言葉を聞き、ハンマーをスバルにつきつけてヴィータは続ける。

「防御ごと潰す打撃は、あたしの専門分野だからな……グラーフアイゼンにぶっ叩かれたくなかったらしっかり守れよ」

「はい！」

別の場所では、エリオとキャロに対し、フェイトが攻撃回避の訓練をしていた。

「エリオとキャロはスバルやヴィータみたいに頑丈じゃないから、反応と回避がまず最重要。例えば……こうやって……こんなふうに」

そう言って、スフィアから放たれた攻撃を、ゆっくりとステップでかわすフェイト。

「まずは動き回って狙わせない。攻撃が当たる位置に……長居しない……ね？」

「「はい！」」

話しながら、低速で分かりやすく回避を見せる。

「これを低速で確実に出来るようになったら……スピードを上げていく」

そう続けると、スフィアは攻撃の頻度と速度を上げる。それを同じようにステップでかわすフェイト。

すると今度は周りのスフィアから一斉に攻撃が放たれた。

「「あ！？」」

隙間がないほどの攻撃がフェイトを襲い、その場に爆煙が立ち込め、二人は心配そうにその場を見る。

「……こんな感じでね」

声に反応して振り向くと、二人が気付かないほどの早さで攻撃を回避し、後ろに回り込んだフェイトが居た。

地面にはどう移動したか分かりやすいように、跡が残してある。

「す……すご……」

「今のもゆっくりやれば、誰でも出来るような基礎アクションを早回しにしているだけなんだよ」

「「は、はい！」」

「スピードが上がれば上がるほど、勘やセンスに頼って動くのは危ないの……ガードウィングのエリオは、どの位置からでも攻撃やサポートをできるように。フルバックのキャロは、すばやく動いて仲間の支援をしてあげられるように。確実で、有効な回避アクションの基礎……しっかり覚えていこう」

「「はい！！」」

さらに、別の場所では様々な色の魔法弾を浮かべたなのはが、ティアナを指導していた。

「うん、いいよティアナ。その調子！」

「はい！」

それぞれの魔法弾は、機動や性質などが違い、それに対して瞬時に対応する弾丸を生成して命中させる訓練だ。

「ティアナみたいな精密射撃型は、いちいち避けたり受けたりしてたんじゃ、仕事ができないからね」

そう言って2色の魔法弾を飛ばす用意をする。

「!?バレット！レフトV、ライトRF！」

≪アラート≫

後方から魔法弾が迫り、クロスミラージュが注意を促す。

「!?」

ティアナはそれを横に転がり、回避する。

「ほら、そうやって動いちゃうと後が続かない！」

なのはが魔法弾を発射。

≪バレットVアンドRF≫

起き上がると同時に弾丸の準備が完了し、ティアナは足を止め2発の弾丸を放ち迎撃する。

「そう、それ！　足を止めて視野を広く……　射撃型の真髄は？」

「あらゆる相手に、正確な弾丸をセレクトして、命中させる……判断速度と命中精度！」

「チームの中央に立って、誰より早く中長距離を制する。それが私やティアナのポジション、センターガードだよ」

「はい！」

それぞれが分かれて個別の指導を受けている……フロントアタッカーのスバルはヴィータ副隊長に、実戦経験不足のエリオとキャロはまとめてフェイトさんに、センターガードのティアはなのはさんに……

となると、必然的に俺の相手は……

「なぜ、複雑そうな顔をしている……」

「……いえ、なんでもないです」

シグナム副隊長だ……正直、不安だ……この人「体で覚えろ」とか言って問答無用で斬りかかってきそうだし……

「そうか……では、まずは確認だ。お前のポジションはオールラウンダー、それ故一番重要なのは様々な状況に応じて、最善の手を選ぶ対応力だ」

あれ？……思ったよりまともな事言ってる。……なんだ、心配して損した……そうだよな、この人も副隊長なんだし大丈夫だよな。

「はい！」

「よし！では構えろ」

そう言ってデバイスをこちらに向けるシグナム副隊長。え？解説あれだけで終わり？

「……は？えと、例とかそういうのは……？」

嫌な予感しかしない……

「私は、あれこれ説明するのはあまり得意ではないのでな……これからお前に斬りかかる。お前は状況によって対応を考えて行動しろ……早い話が……体で覚えろ！」

シグナム副隊長はとてもいい笑顔でそう言った。

「やっぱりかぁあああ！」

ようするに模擬戦みたいな事をしろと言いたいわけだこの人は……

「安心しろ、注意はしてやる……」

「そういう問題じゃ……」

「では、行くぞ！」

「ちょ！？」

そう言って物凄いスピードでこっちに突っ込んでくるシグナム副隊長……終わった。

「ぎゃぁあああ！」

なのはさんの笛が鳴り、午前訓練は終了を告げる。

「はい！じゃ、午後の訓練終了……コウタ……生きてる？」

「「「「はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……」」」」

「……」

疲労し座り込み、息を整えてる四人……うつ伏せに倒れたまま動けない俺……訓練着もあちこち切れてボロボロになっている。

「……なんとか……」

なんだよあれ、ありえねえよ……一瞬ですぐ傍にくるし、こっちがバックステップで逃げるよりも振り終わった剣を戻して追撃する方が早いって、どういう事だよ……サイズが小さく早い俺の魔法弾も、全部叩き落とすし……「締めだ」とか言って紫電一閃うってくるし……もうやだこの人怖い。

「だらしないな、エルザード……せめて起き上がったらどうだ」

シグナム副隊長が俺を注意するが……

「最後の……紫電一閃がなかったら……起き上がれてました……」

「「！？」」

「おいシグナム、お前こいつ殺す気か……」

俺の言葉になのはさんと、フェイトさんはは驚き、ヴィータ副隊長

は呆れたように言う。

「いや、その……思っていたより覚えが良くて……ついな」

つい、でほいほい使われたらたまんねぇよ……

「あはは……ま、まぁそれは置いといて……皆お疲れ様、個別スキルに入ると、ちょっときついでしょ」

置いとくなよ隊長……

「……ちょっと……というか……」

「……その……かなり……」

そしてそのままスルーされる俺……泣いていいよな？

「フェイト隊長は忙しいから、そうしょっちゅう付き合えないけど、私は当分お前らに付き合ってやるからな」

「あ、ありがとうございます」

ヴィータ副隊長の言葉に、苦笑いで答えるスバル。

「無論、私もだ」

シグナム副隊長がそう続ける。

「担当変更を要――「なんだ？」――シグナム副隊長の指導を受けられて、自分は幸せです」

目の前に剣を付きたてられ、屈する俺。

苦笑いしながらフェイトさんが。

「ライトニングの二人は特になんだけど、スターズの二人もまだまだ身体が成長している最中なんだから、くれぐれも無茶はしないように」

「「「「はい」」」」

貴女も俺はスルーですか、フェイトさん……と思ってると念話が届き、

（コウタに至っては論外だよ。はやて……凄い怒ってたよ……）

（うっ……）

フェイトさんが言ってるのは俺の自主練の件だ……

無限書庫から帰った俺は、圧縮魔法を開発するのに浮かれ……その結果、林の地面を穴だらけにした。

幸い隊舎からかなり離れてやってたので、他の人には気付かれなかったが……自主練を見に着たフェイトさんに見つかり、その後八神部隊長に数時間説教され、地面の修復と林での自主練禁止を言い渡された。

（頑張ってるのは分かるけど……周りに迷惑かけちゃだめだよ）

（……はい）

返す言葉もない…まいったな、あの件……フェイトさんに頼もうと思ったけど……良く考えればフェイトさんは忙しいし難しいか……

「じゃ、お昼にしよっか」

「「「「「「「」」」」」」」

そんな事を考えてると、なのはさんの声が聞こえ俺は返事をして、気合いで立ち上がる。

なのはさんも俺の事はスルーのままだったが……あれ？俺嫌われてる？

「そんなことないよ」

また心を読みやがったこの人……

そこで、ふと思い出し……シグナム副隊長に念話を送る。

（シグナム副隊長）

（うん？どうしたエルザード）

（後で、折り入ってお願いしたい事があるのですがお時間取っていただいてもいいですか？）

（かまわんが……念話という事は、あまりほかには知られないようにか？）

（いや……まぁ、話して回るような事でもないので……）

（……わかった、時間と場所は？）

（ありがとうございます……２１時頃に訓練スペースでよろしいですか？）

（ああ）

話を終え、移動し始めた皆に続く。

――六課・隊舎前――

「あ、皆おつかれさんや」

「「「「「はい！」」」」」

シャワーを浴びるため寮に向かっていると、どこかに出かけようとしてる八神部隊長とリインさんと出会う。

「はやてとリインは外回りか？」

「はいです。ヴィータちゃん」

「うん、ちょうナガジマ三佐と話してくるよ」

その言葉に少しだけ反応してしまう……そう言えばゲンヤさんとは最近会ってないな……

「スバル、お父さんとお姉ちゃんに何か伝言とかあるか？」

「いえ、大丈夫です」

八神部隊長の言葉にスバルはそう応える……まぁ、良くメールしてるみたいだしな……

「じゃぁ、はやてちゃん、リイン、行ってらっしゃい」

「ナカジマ三佐とギンガによろしく伝えてね……」

「うん」

「行ってきま～す」

なのはさんフェイトさんの言葉に返事をして、車に乗り込む二人……そこで、

（コウタ……分かってるやろうな、次あんなことしたら説教だけではすまさんよ）

（はい……申し訳ありません）

俺への注意を忘れずして、出かけていく……。

俺は苦笑いしながら見送った。

――六課・食堂――

シャワーを終え、揃って食事をする俺達の前には、パスタの山があった……

それでも、スバルとエリオが居る分少なく見えるのが不思議だ。

今は、先ほど上がったゲンヤさんの話題で話をしていた。

「なるほど、スバルさんのお父さんと、お姉さんも、陸士部隊の方なんですね」

「うん、八神部隊長も一時期、父さんの部隊で研修してたんだって」

「へぇ」

キャロの質問に答えるスバル……食いながら話すなよ。

「しかし……うちの部隊って関係者つながりが多いわね。確か隊長達も幼なじみ同士だったわよね」

「だな、なのはさんと八神部隊長が地球出身で、フェイトさんも子供の頃に地球で暮らしてたんだっけな」

ティアの疑問に俺が答える。昔ずいぶん聞いたからある程度は知ってる。特に海鳴市……

「確か……管理外世界の97番でしたっけ？」

「そうそう」

地球を番号で聞くってのも変な気分だ……まぁロクな思い出のない所だけど……

「97番って、うちの父さんのご先祖様が住んでいた世界なんだって」

スバルが、ふざけた量のパスタを取りながら話す……お前の胃はほんとどうなってる。

「そうなんですか？」

「うん」

「そういえば、名前の響きとか何となく似ていますよね。なのはさん達と」

俺も地球の名前寄りだけどね……ファミリーネーム方はそうでもないか……

「そっちの世界には、私も父さんも行ったことないし、良く分かんないんだけどね……あれ？エリオはどこ出身だっけ？」

「あ、僕は本局育ちなんで……」

「「あっ」」

エリオの言葉にティアとキャロガ反応する。孤児ってことか……まぁ、当然のごとくスバルは気付かない。

「本局？……住宅エリアってこと？」

「本局の特別保護施設育ちなんです。８歳までそこにいました……」

エリオの返答に「しまった」という顔をするスバル。

ティアがジト目でスバルを睨む。

「あ、あの……気にしないでください。優しくしてもらってましたし、全然普通に幸せに暮らしていましたから……」

「そういえば、フェイトさんは、その頃からエリオの保護責任者だったんだっけ？」

「はい、物心を付いた頃から色々お世話になっていて、魔法も僕が勉強を始めてから、時々教えてもらってて、本当にいつも優しくしてくれて……僕は、今もフェイトさんに育ってもらってるって思ってます……フェイトさん、子供の頃、家庭の事で……ちょっとだけ寂しい思いをした事があるって……だから、寂しい子供や、悲しい子供の事、ほっとけないんだそうです……自分も、優しくしてくれる暖かい手に救ってもらったからって……」

エリオの言葉に少し心が痛む……あの頃を思い出した。

「そういえば……昔そんな事言ってたな……」

思わず口を付いて出る言葉……

「そういえばコウタ、そう言うアンタはどこ出身なのよ？」

俺の言葉にティアが話しかけてくる……失言だったな。

「あ、私も知りたい！」

スバルがそれに乗るように続ける。

「え？スバル、アンタも知らないの？」

「うん、だって……コウタ本当に自分の事全然話さないんだもん…
…私と出会った頃にはもう一人暮らししてたし」

「「「!?」」」

スバルの言葉に、三人が驚いたようにこちらを見る。

「ちょ……アンタ等が出会ったのって7歳の頃でしょ!?」

「う、うん」

驚いたティアの質問にスバルが答える。エリオとキャロは悲しそうな顔で俺を見ていた。

「聞かれなかったから、言わなかっただけで別に隠しちゃいないよ。聞きたいなら話すが……面白い話じゃないぞ?」

「う、うん……コウタがいいなら……聞いてみたい」

スバルの遠慮するような言葉に、皆も頷く。

「……俺の出身は、ミッドチルダ南部のアルトセイム地方……フェイトさんと同じ場所だな……まぁそこの端の方にあった。小さな孤児院で生活していたな」

「孤児院……コウタさんも……」

「そこでの生活は、ロクなもんじゃ無くてな……その孤児院は、経営者が補助金を自分の懐に入れたいためって感じの施設で……一人に一着ずつの替えのない服と一日二切れのパン……まぁそんな生活だったな」

「「「「……」」」」

四人は言葉を失ったように黙って聞いている。

「で……5歳の頃だったかな、その施設から金だけ盗んで飛び出したよ」

「「「「!?」」」」

「その後は、西部のエルセア地方……スバル達の出身のとこで、残飯を漁って、公園で寝て生活してたかな?……で、その時に落ちてる機械を修理して売る事を思い付いて……独学で技術を学んで、公園で小さな露店をして、お金を稼ぐようになった……二年ぐらいたって一人で生活するぐらいは稼げるようになった頃……フェイトさんと出会ったかな?」

「「「「……」」」」

「まぁその頃の俺は、心配してくれたフェイトさんの言葉に耳を貸さず……酷い事言ってばっかだった……その後、たまたまスバルと知り合って……で、後は知ってるだろ?陸士学校に入って陸士になった……まぁそんなとこだよ……ついでに言えば、名前も適当に考えた……」

「名前も!?」

スバルが驚いたように聞く。

「ああ、お前に聞かれて初めて考えて……まぁ結局戸籍上も俺は名前が登録されてなかったから……その名前を登録したけどな」

「「「「……」」」」

あちゃ～皆やっぱ黙ってるよ……聞いちゃいけない事聞いたみたいな顔してる。

「ま、まぁほら……どこぞのワガママ女のせいで、そんな昔のこと考える暇もないほど振り回されたから……今は大して気にしてないよ」

「むぅ……ワガママ女はひどいよ……」

「ほら、俺の話はもういいだろ？それより早く食べないと昼休み終わっちまうぞ」

そう言ってはんば無理やり話を締めくくる。

――実際、昔の事はあんまり気にはしていない。前世と大して変わらない生活だったしな――

第二十話「進展と虚栄??」（後書き）

個人訓練が始まりました。この後は地球編に移行していく予定です。

リスカさん、オーリスさんフラグはどうなるのか……ここで一つ問題です。

現在の私の構想段階で、一番最後にフラグが建つのは?（正解しても何もないですが）

?シャッハ
?オーリス
?レジアス
?ジェミニ
?スカリエッティ
?イクスヴェリア

ちなみに正解の一つ以外はフラグは立ちません。

鉛のクワガタさん、ご指摘ありがとうございました。全話修正いたしました。

ｙｕｋｉさん、お菓子は怖いですね……特に女性とお菓子は危険な組み合わせです。

黎音さん、デバイスの強化……ドキッとしました……ジェミニは一度壊れる予定です。

第二十一話「進展と虚栄??」

始まる個別スキルの訓練……

容赦のないシグナム副隊長……

語らない方が良かった過去……

なにかが、変わり始めていた。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～孤独の歌～始まります。

――陸士１０８部隊・隊舎――

「新部隊……なかなか調子いいみたいじゃねえか」

「そうですね……今の所は」

ゲンヤ・ナカジマ三佐の言葉に苦笑しながら応えるはやて、

「そんで、今日はどうした……古巣の様子を見にわざわざ来るほど、暇な身ってわけでもねえだろうに」

「えへへ……愛弟子から師匠への、ちょっとしたお願いです」

ブザーが鳴り、スバルの姉ギンガがリインと一緒に入室してくる。

「失礼します」

「ギンガ！」

「八神ニ佐！……お久しぶりです」

ギンガははやてと少し話してリインと共に退室し、残ったゲンヤとはやては話を続ける。

「お願いしたいんは……密輸物のルート捜査なんです」

「お前のところで扱っているロストロギアか？」

「それが通る可能性が高いルートがいくつかあるんです……詳しくはリインがデータを持ってきていますので、後でお渡ししますが……」

「まっ……うちの捜査部を使ってもらうのはかまわないし、密輸調査はうちの本業っちゃ本業だ。頼まれねぇことはないんだが……」

ゲンヤは少し怪訝そうに答える。

「お願いします」

「八神よ……他の機動部隊や本局捜査部でなくて、わざわざうちにくるのは、何か理由があるのか？」

「密輸ルートの捜査自体は、彼らにも依頼しているんですが……地上のことはやっぱり、地上部隊の方がよく知っていますから」

「まっ、筋は通っているな……いいだろう。引き受けた」

「ありがとうございます」

「捜査主任はカルタスで、ギンガはその副官だ……二人とも知った顔だし、ギンガならお前も使いやすいだろう」

「はい、六課の方はテスタロッサ・ハラオウン執務官が捜査主任になりますから、ギンガもやりやすいんじゃないかと……」

その頃ギンガは、別室でリインと話していた。

「そうですか、フェイトさんが……」

「そうです。六課の捜査主任ですから、一緒に捜査を当たってもらうこともあるかもですよ」

「これは、凄く頑張らないといけませんね」

フェイトに憧れているギンガは、一緒に仕事できる事が嬉しいようで、笑顔で話す。

「はい！……あっ！そうだ、捜査協力に当たって、六課からギンガにデバイスを一機プレゼントするですよ」

「デバイスを？」

「スバル用に作ったのと同型機で、ちゃんとギンガ用に調整するですよ」

「それは……その……凄く嬉しいんですが……いいんでしょうか？」

申し訳なさそうにギンガが言う。

「大丈夫です！フェイトさんと一緒に走り回れるように、立派な機体にするですよ！」

「ありがとうございます！リイン曹長」

「あ、後コウタも協力してくれてるですよ」

「コウタも！？」

リインの言葉に驚くギンガ。

「あれ？コウタから聞いてませんでしたか？コウタはデバイスの製作を手伝ってくれてるですよ」

「そうなんですか……六課に居る事はスバルから聞いて知っていましたけど……あの子はホント昔から自分のことは全然話さなくて……メールもスバル達の事ばかりですしね」

ギンガは少し呆れたような顔をする。

部隊長室では、はやてとゲンヤが話を続けていた。

「スバルに続いて……ギンガまでお借りする形になってしもうて、ちょっと心苦しくあるんですが」

「なに、スバルは自分で選んだ事だし……コウタも付いてるんだから心配はしてねえよ。ギンガも、ハラオウンのお嬢と一緒の仕事は嬉しいだろうよ」

「そういえば、コウタとも、お知合いでしたね」

「ああ、スバルが良く家に連れてきてたからな……しかしまあ、気が付けばお前も俺の上官なんだよな。魔導師キャリア組の出世は早えな」

「魔導師の階級なんて、ただの飾りですよ。中央や本局に行ったら、一般士官からも小娘扱いです」

「だろうな……おっと、すまんな。俺まで小娘扱いしてるな」

「ナカジマ三佐は、今も昔も尊敬する上官ですから」

「……そうかい」

『失礼します。ラット・カルタス二等陸尉です』

すると二人の間にモニターが現れ、カルタスから通信が入る。

「おう、八神二佐から外部協力任務の依頼だ……ギンガ連れて会議室で、ちょいと打ち合わせをしてくれや」

『は！了解しました』

「……つうこった」

「はい、ありがとうございます」

「打ち合わせがすんだら、メシでも食うか？」

「そうしたいとこなんですが……出張任務が入りまして……その準備が」

「そうか、じゃあ又次の機会だな」

「はい」

――六課・訓練スペース――

時刻は２０：４０俺は訓練スペースでシグナム副隊長を待っていた。

「う～ん了承してくれるといいんだけど……」

≪どうでしょうか？…元の原因がマスターにあるだけに、断られても文句は言えませんね≫

「うっ……」

≪そもそも、もう少し休養を取った方がいいのでは？≫

「そうかな？……昨日一日ゆっくり休んだと思うけど」

≪……地面を修復てたんですから、それほど休めてもないでしょ！≫

「ぐ……」

≪そもそも、最初から適度に休憩をはさんで、地面を修復しておけば……こんな事にはなってないんですよ！≫

「……はい」

ジェミニの言葉に、俺は一昨日の事を思い出していた。

――一昨日・林――

俺の足元に魔法陣が浮かび、デバイスの先端へと巨大な魔力が収束される。

収束された薄緑の魔力は、圧縮にされ密度を上げ、その色を深緑へ変化させていく……

少しでも気を抜けば破裂しそうな魔力を、集中し固める…

野球ボールサイズになった魔力を確認し、ゆっくり先端を先方へ向ける。

俺の動作に反応して発射の為にカートリッジが４発ロードされる。

「ヴァニティバレット！」

≪ヴァニティバレット≫

俺の声と共に放たれた弾は、術式により加速され、地面に当たる！

着弾の瞬間、圧縮していた魔力が膨張し大きな爆発を起こす！

煙がはれるとそこには……直径４ｍ程の小さめのクレータが出来て

いた。

それを確認し、俺は崩れるようにその場に座り込む。足元には、空のカートリッジが16発。

「はぁ……はぁ……」

≪大丈夫ですか？マスター≫

「あ、ああ……やっぱり収束圧縮は凄い神経を使うな……」

無限書庫から帰った後、資料を参考に収束した魔力を圧縮してみたが……これが恐ろしいほど扱いが難しく、針の穴を通す程集中しないと、途中で暴発するほどだった。（実際最初はかなり暴発して吹き飛ばされた）

なんというか、少しでもコントロールを間違えば爆発する爆弾を、手元で大きくしてるような感じで打ち終わるとかなり精神に疲労が来る。

≪形になりましたが……これは、あまり気軽には使えませんね≫

「そうだな……今何発撃った？」

≪今のでで5発目です≫

「5発でこの疲労感じゃ……戦闘なら使えて4発が限度か……それ以上は戦闘に支障が出るな」

≪ただ……このネーミングはあんまりだと思うんですか……≫

「そうかな？……虚栄心……俺にはぴったりの言葉だと思うけど……」

≪マスターは自分を卑下しすぎです！≫

「…そうかな？そんなこともないと思うけど……」

≪（自覚がないから……問題なんですよ。それって……常に自分を他より低く見てるって事ですよ）≫

「ジェミニ？」

≪……少し休みましょう≫

「ああ、そうだな……」

ジェミニの言葉に、俺は近くの木の根元まで移動し座り込む。……今何か考え込んでたような？

≪マインドヒール≫

ジェミニが、ユーノさんにもらった資料で習得した精神力の回復魔法……というより精神をリラックスさせてくれる魔法を発動してくれた。

「ありがと、ジェミニ」

≪いえ、制御はこちらでするので、マスターは今は頭を休めてください≫

魔法により少し楽になった俺は、ジェミニに話しかける。

「これで……形になった魔法は四つ……いや、『あれ』を入れると五つか？」

≪『あれ』は欠陥品じゃないですか≫

俺が無限書庫から戻って１０日で試行錯誤し、魔法として運用できる形になった魔法は五つ……

収束圧縮系射撃魔法１、圧縮射撃魔法１、近接用魔法１、防御系魔法１……そして問題とされる『あれ』

「でも、威力だけなら『あれ』が一番だと思うんだが……」

≪カートリッジ全部使っても打てなかった上に、その後精神疲労で気絶したような魔法を、どう使うつもりですか？≫

「うっ……」

『あれ』とは一番初めに考えた収束圧縮魔法で、速度だとか、発動時間だとかを考えず。俺の維持できる限界ぎりぎりまで収束と圧縮を繰り返した魔法だ。

結果として、あきれるほどの時間をかけて出来上がったその巨大な魔力の塊は……カートリッジを全部使っても打ち出すことはできな

かった。

そして、その魔力をゆっくり拡散し終わった後、俺は一時間ほど気絶した。

「……ちなみに、最後の拡散して処理するを除いた『あれ』の準備時間は？」

≪１８分４３秒です≫

「……使い物にはならないな」

≪あたりまえです！動くのも辛いほどの極限の集中状態で、約１９分……気絶ですんでよかったですよ！一歩間違えば、脳にダメージが出る可能性だってあるんですよ！≫

「……おっしゃる通りです」

ジェミニの言葉に言い返せない俺。

≪では『あれ』の術式は消去してもいいでしょうか？≫

「いや……一応残しといてくれ、もしかしたらそのうち改善策が見つかるかもしれない」

≪……了解しました≫

「他のは……収束圧縮でなければ、寧ろ今までより効率がいいぐらいだからいいんだが」

≪そうですね、ヴァニティバレットはもう少し調整の必要がありますが、他の三つは実戦で使用可能だと思います≫

ヴァニティバレットは、ソニックバレットの術式を参考に組みあげた魔法で、２つ目に作った魔法だ。

圧縮する密度とスピードのみを重視して組んである。

弾速こそソニックバレットに劣るものの……その威力はケタ違いで、ソニックバレットを時速２００ｋｍで飛ぶビー玉だとするなら、ヴァニティバレットは時速１００ｋｍで飛ぶボーリング玉だ。

まだ少し発動に時間がかかるものの、大分改良して今では３０秒ほどで発射できる。

問題は極度に集中するため、ほぼ動けないのと、一発でカートリッジを４発も使うという燃費の悪さだ。

「そうだな……まぁ実戦ではここぞという時の一発って感じだな」

≪そうですね。確かに威力は今までのマスターの魔法とはランクが完全に違います。今後の戦いでは必要になるでしょうしね≫

「だな……後は今まで使ってた圧縮系の魔法の術式を見直して、組み直さないとな」

≪それより今は休息を取るべきです！≫

「いや……そのほら、考えるだけなら……」

≪マスターが今一番疲労してるのは、それを考える頭でしょう！≫

「……はい」

≪そもそも、無限書庫から戻って以来、マスターの自主練は無茶をしすぎです！……いいですか――≫

ジェミニの説教が始まった。最近多く、自主練が終わるといつもこの調子だ。

まぁそれでも……もし俺が無茶を押してでもやると言えば黙って従ってくれるんだし、ありがたい相棒だ。

≪――ですから、明日は訓練がないですし、丸一日ぐらい休養を……って聞いてるんですか！マスター！≫

「あ、はいすみません」

ジェミニの言葉に思わず正座をして向き直る俺。

正座してデバイスに説教されてる魔導師……かなりシュールだ。

「コウタ、今日も頑張っ――って何これ！？」

「ふぇ、フェイトさん！？」

声が聞こえ、振り向くと驚いた顔でこちらを見ているフェイトさん。

「地面がめちゃくちゃ……」

唖然とした様子で周りを見るフェイトさん……

≪フェイトさんからも言ってやってください。マスターはここのところ、自分の体の事も考えず無茶ばかり……≫

「ちょ！？ジェミニ！」

ジェミニの言葉にフェイトさんがピクリと肩を動かし、こちらを振り向く。

「……コウタ」

「！？！？」

笑顔でこちらに向かってくるが……その笑顔は怒気に満ちていた。

「……コウタとは……少し……長いお話をしないとダメみたいだね」

……こ、怖い……

その後、正座で約二時間説教され、部隊長室に連行された。

――一昨日・部隊長室――

「――というわけで、当分の間林での自主練習は禁止や！」

「……はい、申し訳ありませんでした」

部隊長室に連行され、その後八神部隊長に引き渡され説教を受けていた。

フェイトさんは明日も仕事があるので俺を八神部隊長に引き渡した後、自室に戻った。

さっきのと合計で、説教は約5時間……正座で……

「はぁ……やる気のあるんはええことやけど……どうもコウタは、好きにやらすと不安やな」

「……返す言葉もありません」

「かといって……自主練習自体禁止しても……こっそりやるやろうし……」

「うぐ……」

見破られてた。禁止されたのは『林』でのなので、他ならと考えてたとこであった。

「はぁ……しゃあない、見えんとこで無茶されても困るし、訓練スペースを時間制限付きで使用していい事にするわ」

「え？……本当ですか！？」

「そうやな……時間は２２時～２４時の二時間、その時間やったらあの辺は他に誰もおらんし、大丈夫やろ」

「あ、ありがとうございます！」

願ってもない事だった。訓練スペースが使えるなら色んな状況での練習ができる。

「ただし！」

「……え？」

「一人での使用は許さんよ、必ず副隊長以上の誰かに監督してもらう事！ええな？」

「……わかりました」

当然と言えば当然の条件か……誰に頼もう、フェイトさんがいいかな？事象知ってるし……

「じゃあ……とりあえず明日は、休養をとってから……めちゃくちゃにした林の修繕。訓練スペースの件はそれが終わってからやで」

「わかりました」

「うん、じゃあ今日はもう休んでええよ」

「申し訳ありませんでした！失礼します」

結局次の日は、半日近く地面の修繕をしていたので誰にも頼めなかった。

――現在・訓練スペース――

そういった経緯があり、俺は今監督をシグナム副隊長に頼もうとしていた。

フェイトさんは忙しそうだし、シグナム副隊長なら……あまり周りに言う事もないと思ったからだ。

「すまんな、待たせたか？」

「あ、いえ大丈夫です」

ジェミニに言われ、事の経緯を思い出していると、シグナム副隊長がやってくる。

「それで、用件はなんだ？」

「えっとですね――」

俺はシグナム副隊長にこうなった事の経緯を説明し、時間のある日に監督を頼めないかとお願いする。

「なるほどな……事情は分かった……確かに、それでは一人で放置するわけにはいかんな」

「……ええ、なので見てくださってるだけで構わないので、お願いできないでしょうか？」

「……いいだろう」

「ホントですか！？」

少し考えた後、シグナム副隊長は了承してくれる。

「ああ、ただしやるからには、見ているだけとは言わず……日中の訓練の延長のつもりでやるが構わないな？」

「はい！是非、ご指導お願いします！」

「ああ」

「でも、紫電一閃は勘弁してください！」

「……考えておく」

そこは即答していただきたい…

「……しかし、お前に対する印象が変わったな……」

そう言ってシグナム副隊長は少し笑う。

「印象……ですか？」

「ああ……日頃の行いからか、軟弱者という風に見ていたが……中々骨がありそうだ」

喜んでいいんだろうか？

「可能な限り来るようにするが、私が仕事で来られない時はヴィータに頼むと良い……なんだかんだで面倒見のいいやつだからな」

「わかりました」

「では……さっそく始めるとするか」

そう言ってシグナム副隊長は騎士甲冑を身に纏う。

「はい！よろしくお願いします！」

俺もデバイスを起動させ、シグナム副隊長と一緒に訓練スペース中央まで行き構える。

「さあ、どこからでもこい！」

「……行きます！」

――この日から、俺の自主練は大きく変わった――

第二十一話「進展と虚栄??」（後書き）

主人公の新魔法の名前がついに登場しました。

……元ネタ分かった人は私の「極星」デッキとデュエルだ。

次回は地球編へと移っていきます。

第二十二話「地球と銭湯??」

俺達の知らないところで、動き続けるレリック事件……

最近説教される事が増えてきた俺……

そして容赦のない師匠との自主練……

そんな日々を過ごす中、懐かしい?場所への出張が入る。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～孤独の歌～始まります。

――六課・食堂――

「これで……よしっと!」

俺は型に入れ冷ましたプリンを冷蔵庫へ入れる。

なぜこんな事をしているかって？以前俺の料理の話題になった時に、エリオとキャロに作ってやるって約束したからだ。

まぁ一つだけ馬鹿みたいにでかいのも入れたけど……ちゃんと固まるかな？

「1時間ほどおいて様子を見るか……」

≪了解です。タイマーをセットしておきますね≫

「うん、頼む」

手を洗い、食堂の職員に厨房を借りたお礼を言って食堂の外へ出る。

≪そういえば、マスター明日の準備はしなくていいのですか？≫

歩いていると、ジェミニが声をかけてくる。明日の準備というのは部隊長から聞いた地球への派遣任務……所轄出張だ。

……地球か……正直あんま懐かしいという気はしない。ちょっと知ってる場所へ行くっていう程度の気分だ……ミッドって結構日本臭いしなぁ……

「準備って言っても、特に必要な物もそんなにないだろ？着替えぐ

らいで十分だって」

≪他の皆さんは、色々準備してるみたいですが？≫

「何持ってくつもりなんだろうな……」

ジェミニと話しながら、オフィスの付近を通りかかると……視界の端に涙目でデスクに向かうスバルが見えた……

……嫌な予感しかしないが、放っておく事も出来ないのでオフィスに入る。

――六課・オフィス――

「なにしてんだお前？」

「うぅ……コウタ～」

俺の言葉に、半泣きでこちらを向くスバル。デスクを見ると、大量の書類仕事が表示されている。

いくらフォワードと言ってもデスクワークも存在する。報告書と、前線で必要な情報整理が殆どで3日に一度ほど、午後の時間を使って処理を行う……それなりの量ではあるが、午後丸々かけて終わら

ないようなものではない。

「なのに……なんで、お前はこんなにため込んでるんだ？」

「う、だってぇ～」

フォワード陣の中で、デスクワークが苦手なのは三人……エリオ、キャロ、スバルだ。

エリオとキャロはまだ１０歳なのでしょうがないが、スバルはなぜか昔からこの手の仕事が苦手だった。

なので普段は、デスクワークが得意な俺とティアがそれぞれを手伝っていた。

「ティアは？」

「明日の準備があるって……」

明日の任務は出張なので、滞在期間が不明の為、溜ってるデスクワークは消化しとかないといけない。

だから今日は午後丸々訓練が無くなったはずだが……スバルの手元の端末にはほぼ全部残っていた。

「そっか……じゃあまぁ頑張れよ」

「！？！？」

この先の流れは予想できるので、手を振って立ち去ろうとすると…

…手を掴まれた、

「……」

「コウタ……お願い……手伝ってぇ～」

やっぱりか……ホントなんでデスクワーク苦手なんだよ……訓練学校主席。

「……嫌だ、メンドイ」

「このままじゃ……明日になっても終わらないよぉ～」

正直この後の展開は分かっていたが、最後の抵抗をする。

「……俺の準備は……」

「うぅ……お願い……」

「……はぁ……俺の端末に半分送れ」

「やった～♪さっすがコウタ！」

やれやれ……

「ジェミニ、タイマー切っておいてくれ」

≪了解しました≫

スバルの隣に座り、端末に送られてきたデータを見る……が、

「お前これ……ため込みすぎだ……今日の午後何やってたんだよ」

「うぐ……」

「まぁいい、さっさと終わらせるぞ」

「うん！」

呆れながらも手元の端末を操作する……整理めちゃくちゃすぎるだろこれ。

――2時間後――

処理の終わった書類を、なのはさん、ロングアーチ、部隊長宛てにそれぞれ分け送信する。

「……これで、全部かな？」

「うん！手伝ってくれてありがとう！コウタ」

「違う、これは手伝ったって言わない……俺が処理したっていうんだ」

「……あはは」

あははじゃねえよ……ほぼ8割ぐらい俺が処理したじゃないか、

「これに懲りたら、もう少し小まめにやっとけよ……」

「うぅ……はい……」

俺の言葉にしゅんとなるスバル……まぁ次回もどうせためてるだろうけど……

「さて、食堂に行かないとな」

「あれ？コウタまだ夕食食べてなかったの？」

「いや……プリン作ってるからそれを取りに……」

「プリン！？私のは！？私のもある？」

俺の言葉に目を輝かせ、詰め寄ってくるスバル。

「……あるけど？」

「やった～♪」

嬉しそうにまあ……

その様子に少し苦笑しながら、

「丁度いいから、ティアの分も持って行ってやってくれ……俺はエリオとキャロに持っていくから」

「うん♪」

尻尾を千切れそうなほど振る子犬の幻覚が見えたが……たぶん気のせい。

――六課・寮――

食堂でスバルに二人分のプリンを渡し、残った二つを持って俺はエリオとキャロの部屋の前に来ていた。

プリンをジェミニに浮かせてもらい、ドアをノックする。

「は～い」

「俺だけど今大丈夫か？」

「コウタさん？どうぞ～」

エリオの声が聞こえ、ドアを開け中に入ると……明日の準備中だったのだろう、二人は床に物を広げ鞄に何を入れるかを思案していた。

「これは……明日の準備か？」

「はい……なにを持って行ったらいいのか」

「悩んでます……」

「キュクルキュ～（こんばんわ～）」

俺の問いかけに応える二人と、暇だったのか頭に飛び乗ってくるフリード。

「ふむ……まぁ一息入れないか？これ持ってきたし」

「「……？」」

「ほら、この前約束しただろ何か作ってやるって、簡単なプリンだけど……」

「「プリン！？」」

俺の言葉に即座に振り返る二人、うわ……目がきらきらしてる。

「口に合うといいけど……はい」

そう言って二人にプリンとスプーンを渡す。

「「ありがとうございます！！」」

「キュイキュクル？（私のは？）」

「お前はこっち」

フリードにはソースでなく、塩コショウで味付けしたミートボールを差し出してやる。

「キュ～イ♪（わ～い♪）」

俺の頭から降り、嬉しそうに食べ始めるフリード。それを眺めた後、二人に向き直って、

「どうかな？……それなりに上手く作れたとは思うんだけど……」

「おいしいです！」

「こんなおいしいプリン初めて食べました！」

二人は笑顔で答える……けど、キャロそれは言いすぎだ。

「それはよかった」

「そういえば、コウタさんは明日の準備はもう済んだんですか？」

エリオが思い出した様に聞いてくる。

「まだだけど、そんな時間かかるようなものでもないしな」

「そうなんですか！？」

キャロが驚いたように声を上げる。

「……そっか、二人とも派遣系の任務って初めてか？」

「はい……なので何を持って行ったらいいか……」

「……全然分からなくって」

「なるほどな……こんなに色々持っていかなくていいと思うぞ」

俺の視界には、これから探検にでも行こうかというほどの量があった。

「あの……コウタさん……」

キャロが少し言い辛そうに声をかけてくる。

「うん？どうしたキャロ？」

「もしよかったら……私の荷物チェックしてもらってもいいですか？」

そうだな、初めてなんだしアドバイスした方がいいな。

「ああ、いいよ」

「あ、僕のもお願いしてもいいですか？」

「了解っと」

二人の要望に応え、立ち上がって鞄の見える位置まで行き、荷物をチェックする。

「う～ん……まず着替えが多すぎるかな。最初に着ていくものは除外して、着替える物と予備で2着入れれば十分だ……滞在期間不明と行っても、洗濯は出来るし、いざとなればバリアジャケットもある……後は、日用品もこんなに要らないかな。ペンションって話だから基本的な物はあるだろうし……歯ブラシとタオルぐらいでいいよ」

「「はい！」」

「後は……なんだこれ、枕？」

「え、はい……スバルさんが……」

「……枕を持っていかないと寝れなくなるって」

何教えてんだあの馬鹿……二人とも純粋なんだから信じちゃうだろ……

「……あいつの言う事を真に受けちゃだめだ……後は……」

二人に注意をして再び整理を始める。

「……こんなとこかな？」

俺の手元には綺麗にまとまった鞄があった。フリードはお腹が膨れて眠くなったのか、今は寝ている。

「すごい！あんなにあった荷物が……こんな小さく」

「ありがとうございます！コウタさん」

「まぁベースはこんなもんだから、後はどうしても向こうで使うと思う物だけ追加するといいよ」

「「はい！」」

ホント素直な子達だ……

「じゃあとりあえず、散乱してる他の荷物を片付けようか……手伝うから場所だけ教えて」

「そ、そんな！」

「悪いですよ！」

「いいから」

遠慮する二人を無視して、片付けを始める。

まずは物ごとにまとめて、それからそれぞれの場所にしまう。

それを何度か繰り返し、散乱していた荷物は片付いた。

「これで……最後かな？」

「はい……すみませんコウタさん」

「何から何まで……」

二人が申し訳なさそうに話すので、近くに行って頭を撫でてやる

「……あ」

「……わ」

「気にしなくていいよ。このぐらい、いくらだって甘えてくれていいんだから……な」

「「……はい♪」」

二人は頭を撫でられ、嬉しそうに目を細める。

そのまま少し撫でていると、扉をノックする音が聞こえる。

「どうぞ」

エリオが答えると、フェイトさんが入ってきて……

「エリオ、キャロ……明日の準備で……あれ？コウタ」

「お邪魔してます」

「うん……エリオ、キャロ……明日の準備で何か分からない事とかない？」

「大丈夫です！」

「コウタさんが手伝ってくれたので！」

「……え？コウタが……そ、そうなんだ……」

「「はい♪」」

あれ？……俺まずい事したかな……フェイトさんなんか落ち込んでる。

「そ、そっか……じゃあ……明日も早いし今日はもう寝た方がいいよ」

「「はい！」」

二人はフェイトさんの言葉に真剣な顔で返事をする。

フェイトさんの言葉に続き俺も、

「じゃあ俺も失礼するよ」

っと二人に声をかける。

「はい！ありがとうございました。コウタさん！」

元気よく笑顔で返事をするエリオ。

「コウタさん、ありがとうございました。プリン凄く美味しかったです」

少し照れながら嬉しそうに話すキャロ。

「ああ、また作るよ。それじゃまた明日」

「「はい♪」」

子供らしい笑顔で返事をする二人。

「……コウタばっかりずるい……」

……え？なんか今ぼそっと聞こえたような。

――六課・通路――

エリオとキャロの部屋を後にし、俺はフェイトさんと二人で歩いていた……が、

「……」

なんか凄いジト目で見られてる!?

気まずい……凄い気まずい。

「ねぇ……コウタ……」

「!?!?は、はい!」

声をかけられ、姿勢を正す俺。

「……相談してもいいかな?」

「……へ?……相談?」

「うん」

「それは構いませんけど……」

「ありがとう……じゃあ食堂に行こうか」

相談？俺に？フェイトさんが？……なにを？

――六課・食堂――

俺はフェイトさんと食堂へ移動し、同じテーブルに座り話を聞いていた。

「――だから……どうやったら二人と良い家族になれるのかな？」

「……」

話をまとめると、フェイトさんはもっと二人に甘えて貰いたい⇒でも二人は遠慮してる⇒自分から言うのは変⇒どうやったら良い家族になれるのか？……ということらしい。

……相談する相手と内容を、致命的に間違っている気がする。

家族が居た事のない俺に……良い家族って言われても……

……そもそも、家族っていうのがどんなものか想像しかできない。

……もし、俺に……いや、それより今はフェイトさんの相談か……
家族の部分は分からないけどそれ以外にだけでも……フェイトさん
凄い期待を込めた目でこっち見てるし……

「……コウタ？」

「あ、すみません。少し考え事を……答える前に一ついいですか？」

「……うん」

「なんで俺に相談を？」

これは正直、疑問だった。

「だって……コウタはエリオとキャロに凄く懐かれてるから……どうしたらそんなふうになれるんだろうって……」

「俺が？……エリオとキャロに？……確かに同じ新人フォワードなので仲は良いと思いますが……凄く懐かれてるって程でしょうか？」

「程だよ！」

「ひぃ！？」

急にすごい剣幕で大声を出すフェイトさんに、思わずビビる。

「だって……エリオもキャロも、話をするといっつもコウタの話ばかり……そりゃスバルやティアナの話もあるけど……コウタの話の割合が圧倒的だもん……さっきだって、私には真面目な感じで答え

てるのに……コウタには嬉しそうに……コウタばっかり……」

あ、ああ……それで、さっきの「ずるい」か……

「と、とりあえず落ち着いてください」

「う……ごめんなさい」

「いえ……でさっきの質問の答えなんですが……」

「うん」

確かに、エリオとキャロはどこかフェイトさんに対して遠慮しているけど……多分それは……

「良い家族になる方法ってのは分からないんですが……多分二人はフェイトさんに心配をかけたくないって思ってるんじゃないでしょうか？」

「……私に？」

「ええ……本当は甘えたいんだと思いますよ。ただ、二人ともしっかりしてるでしょ？だからフェイトさんに甘えると迷惑になるんじゃないかって思ってるんじゃないでしょうか？」

難しい問題だ。フェイトさんは二人に甘えて欲しいけど、自分から言うのは押しつけがましいって思ってて、二人はフェイトさんに甘えたいけど、甘えると迷惑になるんじゃないかって思ってる。

「これぱっかりは、焦って何かをしても逆効果だと思います。それ

よりも、出来るだけ三人で居る時間を作るとか……三人で一言でも多く会話をするのが一番だと思います」

「……三人で……」

「ええ、少し時間はかかると思いますが……すみません、俺には正直こんな方法しか思い浮かばないです」

俺はそう言って頭を下げる。正直これ以上の方法は浮かばない……どういう風になれば『家族』なのかが分からない……

「ううん……ありがとうコウタ」

「少しでも参考になればいいんですが……」

「うん……私もっと頑張ってみるよ……嫉妬みたいな事言ってごめんね……」

「気にしないでください。それだけ二人を大切に思ってるってことですし」

「……うん」

「……」

正直、二人が羨ましい……フェイトさんが二人の事を想ってるのが伝わってきたから……

「……コウタ？」

「あ、すみません……俺そろそろ戻りますね。明日の準備もあるので……」

黙っている俺を心配して、フェイトさんが声をかけてくる。

「うん……付き合ってくれてありがとう……あ！コウタ！」

「はい？」

席を立とうとする俺を呼び止め、フェイトさんは微笑みながら……

「コウタだって、私にとって大切な……大切な、仲間だからね」

「……ありがとうございます……それじゃ、おやすみなさい」

「うん、今日は本当にありがとう……また明日ね」

フェイトさんに笑顔で答え、俺は食堂を後にする。

――六課・通路――

「……仲間……か」

≪マスター？≫

「あ、いや……なんでもないよ」

≪そうですか……≫

――馬鹿だな俺……エリオとキャロに嫉妬してどうするんだ――

第二十二話「地球と銭湯??」（後書き）

地球編と言いながら、まだ地球に出発すらしてない……Ｏｒｚ

今回は地球出発前夜のお話でした。なんだかんだであちこちで世話を焼いてしまうコウタ。

なぜ……私はサウンドステージを持ってないのにこのストーリーを書こうとしたんだろう……お風呂イベントって素敵だよね

なので、他の方の小説やらネットの情報やらを参考に書いていきます……買おうかなＣＤ……

時期的には６月上旬くらいでいいはずですよね……ね？

グリィンさん、感想ありがとうございます。よもや？をしょっぱなで選ぶ人が居ようとは……残念ながらそんな雄々しい展開にはなりません。

リスカさん、コウタの器用さが発揮されました……唯その新魔法が活躍するのはもう少し先です。

ｙｕｋｉさん、開闢とか……フルボッコにされる未来しか見えないんですが……

ｄａｍｕｄａｍｕさん、レビューありがとうございます！感激です！戦隊物のグリーン……言いえて妙ですね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6348z/

魔法少女リリカルなのはStrikerS〜孤独の歌〜

2012年1月11日07時50分発行